案山子

２０１７夏号

新潟大学文芸部

サクラを再び舞い上がらせよう　　白杏

サクラを再び舞い上がらせよう　　白杏

春めきが町並みを染め、坂道沿いの桜並木は潔く咲き誇っている。まるで初登場を待ちわびていた踊り子のようで、彼女らは空で生涯最高の舞踏を舞い、春めきと、春風のメロディと共に……
降りたきりで、再び舞台に立ち上がれないとしてもだ……

＊

「ナ～我が妻よ……散った花弁って…また空に舞い上がれるのか……？」
公園のベンチに男の人が亡くなった妻の写真と今日送ってきた手紙を手にしている。ひらりと舞う花弁が彼に目の前からちらつくのをものともせず、子供に踏み躙られた桜の花弁ばかりを見つめている。
男は息を吹いた。こうしたら春風ともを連れ、地に落ちた花の踊り子にもう一曲弾いてあげることができるかのようだ。

＊

――昔、あなたが言ってた。桜は気の毒な花だと。誰もが彼女の一瞬の美だけに目を配るものだから。散った花を惜しむあなたは、それきり頭を上げるのをやめて、足元の花弁、下の人間ばかりに気をかけた。一心に上昇気流になろうと思ってるあなたの末は、自分が花弁となり地に落ちた……そして誰も彼もあなたの春風になってくれない……

＊

「父さん、仕事もしないで公園で息子の放課を待つ中年男子って、見苦しいとは思わない？」
男の視界に黒いランドセルを背負う男の子が現れた。
「我が息子よ、小五の息子の迎えって、至って当たり前の事だと思わない？」男は真面目な目と説教の口調で言った。
男の言い分を聞いて男の子は思わず嫌な顔で父親を見た。
カジュアルな紺色ジーンズに黒ジャケットとワイシャツ、手は妻の写真一通の手紙を大事そうに握っている。
「……僕には放課後の小学生が行き詰まった父親の迎えをするとしか見えない」
「ハハハ、我が息子よ、こう言われたら、強い父さんも傷つくだろう！」
「父さんは強すぎだ！」
「その手紙はなに？」
「何もないよ。よし、帰宅部の時間だ！夕方特売だ！」
「そんな部活はない」男の子は溜息を吐いて言った。

「今日の晩ご飯は何にする？オムライス？いいよ」
「息子よ、実はとっくに決めてたんじゃ……？」
「明日の昼ご飯もついてに作っておくね」
「おっ、かたじけない」

晩ご飯前の三十分の運動は栄養分の吸収に役に立つ。節約にしては丁度いいものだ。男は息子が料理している間、テレビをつけニュースを流させたまま、壁に掛かっている竹刀を手に、剣道の稽古を始めた。因みに、壁には本物の刀と満開の桜の木の絵（それは林の中の桜木、それ以外の人物はない）が掛かっている。みんな妻の形見である。

親子の家は東京郊外のマンション、三人家族にしては丁度いい間取りだが、今の彼らにとって少々広い。この家には、亡き妻の好みで飾った飾りや家具以外、余った私物はない。二人の生活もそのまま一切の変化はない。強いて言えば一つだけ代わったことがある―家中のあちこちに妻、母親の写真を不気味なほど飾ってあるところである。

竹刀を振る音のリズムが男の子に穏やかな気分をさせた。彼は母親の手書きレシピを開けていながら傍に置きっぱなしにした。何しろ、彼も彼の父さんもレシピを全部覚えたからだ。

ニュースの画面にトナルト・トランプ大統領がが映っている。またほざいているようだと男は思っている。ホワイトハウスの外、吉野桜も満開である。

Make America Great Again。アメリカを再び偉大にしよう……か。突然、男はトランプの言葉を思い出し、動きを止めた。

「どうした？」男の子は手を止めて聞いた。

「トランプはアメリカを再び偉大にしようと言ったよ」

「うん、うちの英語教材も使ったよ、その言葉。*We Can Do It*！に続いて一番使われてるアメリカ大統領の台詞だって」男の子は冷蔵庫からベーコンとソーセージを出した。

「あのさぁ。俺も再び偉大になったほうがいいかも？」

「リストラされたもんね、確かに要るかも」

「だろう！」

「ちょっとは落ち込め！」父親の大らかな態度に苛立って、ドンとソーセージを二つに斬った。

「俺たちは何かcrazyな事をやって、人生を再び偉大にするべきと思う！」男はこの前適当に完結した漫画―ブリーチの主人公の一護の卍解ポーズをして、張り切って言った。

「……て？どうやって偉大になるの？」冷たく問うた。

「よく聞いた！俺は『イントゥ・ザ・ワイルド』の主人公と一緒、荒野でしばらく生きてみてみたい！」

それは米国の小説から改編した映画、一人の青年が大学卒業後、アラスカの荒野へ旅立った物語である。

「いってらっしゃい」

「何を言う？君も行くに決まってるんじゃない？」

「人は未来に悩んでいる時こそ、昔の自分を思い出さないといけない。ええと、原点回帰！父さんも原点回帰してみて！」

「なんか話題がむりやり変えられた気がするけど、まぁいいや。その言葉はどこで覚えたの？小学校の国語ってそんなの教える？」

「原点回帰？あれはナルトのEDから覚えた単語だよ。名前はSpinning Worldかな？『忘れがちな事が何よりも大切な事だって』って歌詞がいった。だから、父さんも荒野なんか行かないで、原点回帰したらどう？」

「Spinning World。回転世界か。原点回帰だね？いいぜ。じゃ二週目からリセットだ」

「なにそれ？ゲームの話？」

「君の母さんと結婚して父さんは生まれ変わった。それから二週目ということだ」

父から聞いたことのない事を聞いて、男の子はぼうっとして反応はついて来れなかった。

ピンポン～

玄関のチャイムが鳴った。

「はい～」男はテレビを消し、玄関に出た。

――父さんの二週目ってどういう事？昔、何かあったの？
「「お邪魔します」」
男と女の声により男の子の意識が現実に戻された。
「あ、谷岡兄さん、舞姉ちゃん！いらっしゃい！」
背広に眼鏡の男とスーツ姿のボーイッシュのショートヘアをする女が居間に入った。谷岡晃希と森原舞。二人共男の元部下だ。今の彼らは会社ではほかの人の上司になっている。
「今日はオムライスだよ！もうすぐできるから、待ってて。父さん、お茶！」
「なんで俺があいつらに……」
「もう部下じゃないから、客人です」
「ウッ！」クリティカルヒット！
「この子の口の鋭さは本当に母親に似てますね」森原は笑って言った。
「相手と回したくないですね」谷岡は苦笑いした。
二人は勝手に居間の椅子を引いてコートを掛けて座り込んだ。もうこの家のことに馴染んでいる。
「アイス要る？」
「お願いします」森原は言った。
「私はいいです。ありがとうございます」谷岡は言った。
男は牛乳を二人の前に置き、どうぞと言った。
「客に牛乳を出す人っているか！しかも粉乳！ジュースは？麦茶は？」男の子はテーブルを叩いて思いっきり突っ込んだ。
「この前、こいつらに飲みきられてから……」
「今買え！」
親子二人のやりとりを見て二人は微笑ましく思った。相変わらずの親子二人だ。

「「「「いただきます！」」」」
一ヶ月ぶりの四人の晩餐会が始まった。
「「美味しい！」」
「「チッ、また失敗したのか……」」
客人二人の感想と違い、親子は今回の料理に不満がある。
「美味しいと思いますが、やはり味が…？」谷岡が言った。
「はい、母さんとの違います。一体なにが……」
「落ち込むな、我が息子よ。明日俺が挑戦しよう」
実は二人はもう挑戦を諦めた。何分、レシピを丸ごと覚えたほど試行錯誤したというのに、イメージ通りできなかったら、きっと何かレシピに書いてないものがあるはずだ。
この二人を見て、森原は少し痛々しさを覚えた。
「所で、部長、新しい職場を見つけました？」
「ゴホン、ゴホン！」森原の言葉で谷岡が咽た。
「まだだ。部長と呼ばないの。今お前らが部長だろう。営業部部長森原、人事部部長谷岡」
「申し訳ございません」谷岡が謝った。「まさか仕事探しはこんなに難しいとは……」
普通の会社はリストラを行う場合、出来の悪い人間とこの仕事じゃなくても生きていける人間が先に首にされる。男は後者だ。多くの部門に転々と変えられていながら、いい成果が出せていた。しかし一箇所に留まることはなかった。逆に男の指導を受けた子がより上位に上った。この二人はそうである。彼らが口にした部長は「元営業部長」と「元人事部長」である。

「謝らなくていいです。こいつ探してないですから」
「「なんですって！」」
「何で探さないですか！あなたの能力ならうちの会社よりいい場所なんていくらでもあるはずなのに！」谷岡が言った。
「おいおい、自分の会社をそんな風に言っちゃっては」
「あなたを首にする命令を出しやがった会社なんて……」谷岡は拳を握り言った。「やはり戻ってください。上には…」
「駄目だ」
「部長！私も上に申し出ますから、戻ってください！ほかの部門の子もきっと……」森原は言った。
「部長と呼ぶなって。もう部外者だから。それに仕事したい時は自然に行くよ。やっと手に入れたヴァケーションだぞ」
男の固めた意志に対し、元部下はどうしようもできない。
テーブルの上では沈黙に落ちた。
「谷岡兄さん、舞い姉ちゃん。もしクレージーな事で人生を再び偉大にしようとしたら、何をしますか？」沈黙を破った。
「あら？作文のテーマなの？」森原が聞いた。
「そうであればいいな」目をそらして言った。
「一応これは僕の大事な人の抱えている問題です」
「ゴホンゴホン！」男は突然に咳をだした。
「あら！大事な人ができたの？どんな子？」目が光った。
「そう問い詰めるな。恥ずかしがるだろう？」
「え～弟と等しい人の恋悩みだよ？谷岡兄さん～」
「部長になっても小娘だね、お前は」
「森原は高校卒業すぐ就職だから、今は二十代後半だけじゃない？息子を恋より、森原の方が興味があるんだ」男は言った
「相手なんてありませんよ。この前の合コンも失敗した」
「言うな！ニヤニヤ笑うな！谷岡め！」
「『部長』が原因だって、自分より上位はやはり駄目だね」
「もう言わないで……」森原は耳を塞いだ。
「お前、よく森原のこと詳しいね」男は呆れた顔をした。
「こいつが勝手に私の所に苦情を吐きこんだだけです」
「谷岡兄さん、舞姉ちゃんと付き合ってくれませんか？でないと舞い姉ちゃんはぼっちになってしまいますよ……」
「「プッハハハハ！」」男二人は爆笑してしまった。
「あ、あの！先何言ったっけ？あ、人生を再び偉大にしるでしょう？食堂はいいと思うよ今の人は料理する時間はないから皆が行きやすい食堂だったらいいんじゃない？ね？ね？」一気に話しを吐いた森原は息が乱れた。
「食堂だったら、朝食屋はどう？」男は笑いを止めて言った。「日本には殆どないだろう？面白そうじゃん」
「朝食屋ですか？確かに朝食を作らなくて出かけられますし、時間の無駄も減りますね」森原は両手を合わせて言った。
「でも今の日本人は朝食を作らなくてもコンビニに行くのでしょう？朝食屋って儲かります？」谷岡はやっと笑を止めた。
「いや、住宅地域に設ける。しかも独身サラリーマン密集の埼玉郊外に……」男は言った。

「あ！社員寮がそちら辺です。家賃安いですけど、やはり遠すぎます。お蔭で毎日睡眠不足ですよ」森原もそこの住人だ。
「朝食を作る時間が省けます。食堂の料理の栄養もきっとコンビニより豊かですから。でもいいですか？森原は唯でさえスタイルがないから、女子力を磨く機会も失ったら」
森原は自分の胸元を見た……
「谷岡やかましい！死ね！」赤面で叫んだ。
「いいえ、森原はまだ救いがある」男は言った。「日本中で平均的女性のバストが一番小さい地域って知ってる？」
「「？」」
「埼玉だ」男は続いてこんな事実を。「そして逆は京都だ」
「なんでですか！不公平です！」
「ハハ！森原は元々埼玉出身ですもんな」谷岡は笑った。
「女性の胸の発育に睡眠が大事だ。埼玉人は通学や通勤で早起きしてる。逆に、故郷を誇りとする京都人は県外に就職するのはあんまりしないから、睡眠は充実だ」
「ちなみに、情報源は？」谷岡が聞いた。
「ホンマでっかTV」
男二人は親指を立てた。
「じゃ、あの、朝食屋ができたら、私の、胸が……」
「うん、救える。森原はまだ若いから、必ず救える」
森原は彷徨う羊が神に出会った様な希望の表情をした。
「しかし、私達が作るのではないでしょう？」谷岡言った。
森原は彷徨う羊が狼に出会った様な絶望の表情をした。
「舞姉ちゃん？」
「な～に？」森原はぼうっと答えた。
「よく分からないですが、牛乳どうぞ？」男の子はとても心配そうで、粉乳缶ごとを森原にあげた。
「「プッハハハハ！」」男二人はまた爆笑してしまった。
そして、森原の目が、死んだ。

「何をするって決めた？」男の子は聞いた。
一画欠いた川の字が部屋を広めに見えた。この家の寝室は畳みのある和室だ。電気型の有明行灯が布団の横に置いてある。男は息子に布団をかけてあげ自分も寝た。人類は火を見つけてから、夜の睡眠に明りがないと不安になりがちだ。これは一種の自己防衛、その遺伝子は現代においても変わらないようで、親子二人は、薄暗く優しい明りの守りに、気持ちをほぐした。
「大体決めたよ～」男は欠伸しながら言った。
「原点回帰？それとも朝食屋？」
「まずは原点回帰かな……」
「そうか……うまくいくといいね」男の子も欠伸しながら意識を遠く行かせた。
「楽しみにして、君の一生の思い出にするから」
「……うん」――うん？

一週間後のある早朝、男の子は普段通り早めに登校、クラスメイトとじゃれる。
教室の窓口から見た校門の桜木が咲いている。春雨のない日々で、男の子は桜の雨に染めた薄紅色の地面とい

う光景を眺めるのがずっと好きだ。
「って、お父さんは就職先は決まった？」
「いやいや、探し始めたか、が先だろう？」
「煩い」男の子は友の目を見もしない。家の事情をうっかり話したことに後悔している。今二日おきに家のことが聞かれる。――今の小学生って本当に空気読めないな……
「じゃお父さんは何をするつもり？」
「原点回帰」
「「なにそれ？」」
「ナルト見ればわかるさぁ。授業始まるぞ」
話の終わりと伴に、チャイムが鳴った。ジャージ姿の教頭先生は校門の後ろに扉の閉めを見ている本日慌てて駆け込んだ生徒がなくて、教頭は上機嫌のように背を伸ばした。
皆座ったら、若い女の担任先生が出席簿を手にして入った。
「皆席についたね？出席とるよ」
生徒全員の元気な掛け声を聞いて、若い担任はすこし嬉しい顔をした。そして済んだ途端、溜息を吐いた。
生徒皆、変だと思い、そわそわ言葉を交わした。男の子も。
「どうやら皆の方が先生より知っているみたいね。できれば話しておいてくれたら嬉しいけどね」先生は誤解した様だ。「じつは今日、一人の仲間が、父の仕事で、私たちの所から離れることになった。」先生は気が重く話した。
クラス全員は驚異の声を出した。
「だれ？全然知らないぞ！」
「僕も知らない。いきなりすぎる」男の子は友に答えた。
「実は、その生徒の父親は今日も挨拶しに来ました」
先生はクラスの前門を引き開けると、男の子の父親がヘラヘラの顔で教室に入った。
「～「えええええ――――！」～」
「ハァ――⁉」最も驚いたのは他でもない、男の子だった。
「あの、いきなりすぎるのは百も承知だが、うちの息子との友情と絆はこの別れで途絶えることはないと信じる！」
男の話しを聞いて、驚愕が現実に、クラス中けたたましい騒ぎになり、泣きだしてしまった女の子もいた。
「わが息子よ、ほら、こっちに上がって、みんなに挨拶を」
男は至って当然のように手を振って呼びかける。
男の子は無表情でゆっくり教壇に向かう。
「おい！俺たちダチじゃないか！なんで何も言ってないんだ！」「そうだ！ひどいよ！」
男の子は虚しい目で振り向き、友達を黙らせた。
「ほら、ちゃんとお別れして、一緒にいるから」男は息子の肩を軽き叩き、言った。
男の子は父親を一目見て、父の薬指を軽く握った。まるで頼りない兔のように震えている。
「ス――……」男の子は深呼吸し、静かに口をあけた。「僕、転校することになった」
彼の気持ちの聞き逃さないよう、クラス全員が涙を堪えている。つい最近やっとクラスの全員と仲良くなれた新人教師は、初めて担当するクラスの一員が卒業前に離脱することにとても心が痛い；以前から男の子の事が大好きの女の子は、自分の泣声が好きな人の演説の邪魔にならないよう、ハンカチで口を塞いだ；一年生のころからの友達は、拳を強く握って熱い涙を流している。クラスの皆は男の子のことを惜しんでいる。
「僕、転校することになった？」
「うん？」

男は視線を下げ息子を見た。
「そんなの……全然！聞いてねぇよ！」
「あああああ！折れる折れる折れる折れる！」
男の子は渾身の力を込め、父親の薬指を折った。男の子の怒鳴り声と男の人喚き声が学校中を響き渡った……

＊

――すると、春めきの空の下で、我が夫と息子が新しい旅に出た。頑張って！二人とも！母さんが応援するね！

＊

黄昏の寒気により林の中に霧の欠片が漂ってきた。雪解け水を成長の元に芽吹いた草木の芽も霧で濡れた。
「ヘイ～露が薪を濡らしちまう前に集めといてよ」
「知ってる。黙れ！」
「ウっ、まだ怒ってるのか……」
ここは森の中では得がたい空き地だ。森は四つの循環で生息する――ギャップ、建設相、成熟相、攪乱。それは季節と関係ない森の四季である。そのギャップは「冬」と等しく、何もないように見える。しかし旅人にとって非常に大切な資源である。山奥では日がまともに当てられる場所はここしかいない。乾いた薪の集めも野営するのもここで行う。
旅の初日はじき終わる。二人は明色系の登山装備をテントにしまった。男は焚き火をたてて、釣れた魚を焼き始める。四月中旬、越冬のために海から川に戻った香魚がまだ夏という食べごろではないが、冬一つも乗り越えたものから、身がかなり締まっている。
男は山に入る前、地元の農民から米三キロを購入した。
「自分の手で飯盒炊爨、初めてだね」男は火を見て言った。
「自分の手で？初めて？」男の子の声から怒りが駄々漏れになって、男は慌てて説明した：
「以前は母さんに連れてきたから、野外炊事とか野営とか、全部君の母さんから教わったものだ」
「母さんもここに来たことがある？だからこれは『イントゥ・ザ・ワイルド』の真似じゃなく、本当の原点回帰だね」
息子の問い詰めにまだ怒りの緒があって、男は苦笑いした。
「まぁ、なんてゆぅか？両方かな？」
「……」男の子は集めた薪を焚き火の横に置き、テントに入り父のザックをチェックする。
「なんじゃ～こりゃ～～！」
男はどうしようもなく笑った。
「説明する機会をあげよう。食糧はどこに行った？このサバイバル指南はなんだ？」
「あの、そんな笑顔はやめてくれないかな？少し怖いけど」
「答えて」
「……あの映画、見たよね？」――よし、反応なし。男は冷汗をかいた。「見たら主人公の死亡原因は分かるはずだね？」
「愚かで死んだ」
「そうだ！だからこそ本を持って来たのだ！」
「彼は知識、経験と糧食不足の状況で敢えて行くから死ぬ」

「そうそう！そして俺たち全部揃っただろう！」わくわく。
――確かに父さんは僕の鞄に糧食をいっぱい詰め込んだ。
「要するに、この本が知識と経験、僕の鞄にある糧食はこれからの季節を乗り越えられるとでもいうのだね？」
「はい……だめ……かな？」
「ス――……」男の子は息を吸った。男は耳を塞いだ。
「母さん！どうして亡くなったのがあなたなのよ――！」
――我が息子よ、あれはちょっとしたばかり傷つくんだけど

――母さん、僕の人生最悪の日、七日目に更新した。しかし案外お腹を空かした事のない日々だった。それに、真っ直ぐじゃないけど、どこかで迷った気もするけど、なぜかある方向に向かっているようだ。スマホのGPSは最初から使えない。圏外だから。山に入ってから二日目で電池が切れた。父さんは日の出前出発する。そして夕暮れ前テントを張って狩に出る。父さんは移動する前に準備運動のかわりに、必ず壁にかかっていた刀を何回振る。僕なら鞘を使わせてもらった。正直、なんか、楽しそうだ。ところで、二日前、どうして刀を持ってくるのを聞いたら、なんと答えたって知ってる？
「モンスターハンターっぽくない？格好いいだろう！」
――そんな答えが自分の父親の口から出たって僕本当に泣き出しそうだ。でも、もし「熊が出るから」とかの返事だったら、僕は心配でご飯も食べられないかも。そう言えばあの本のことだけど、父さんは晩ご飯を食べてから本を読む。読みきったら燃やす。そのため鞄もどんどん軽くなっていくようだ。でもね、今父さんの鞄に薬草とか入っているチャック付ポリ袋がいっっぱい詰めてるよ！本当にモンハンっぽくなった！三日目の昼は尾状花序の植物の葉っぱで入れたお茶を飲んだよ！

「我が息子よ、休もうか」男は川沿いの裸ん坊の木を見て言った。「川に水を汲んできて、気をつけろよ。ご飯を作る」
早春開花の裸ん坊は東京にいったらもう散ったはずだが、この木は今も黄緑の花序を咲かせている。北に行けば行くほど花は遅く咲く。ここはかなり北のほうだ。
男はあの本の主人公のように、手ぶらで山に入るのではない。彼は固体燃料と火打ち石で手馴れて火を起し、空き飯盒で川水を沸かし飲用水にした。そして今回はお湯に裸ん坊の葉っぱも入れた。
「我が息子よ。このような花は『尾状花序』、英語はcatkinだ。柳や樺科の植物がよく見られる種類だ。その葉っぱの豊富なヴィタミンCが含まれて、消炎ができる。お茶に入れたら、胃の膨張感の解消ができる。飲んでみ」

――葉っぱの淡い香りとほろ苦さがするお茶だった。でもいい感じだったよ。父さんの鞄にはまだあるはず、今日は飲めるかな？ただ、なんか、今日の父さんはどこか妙だ。昨日までは普通にお喋りしたのに、もしかしてこの何日の間、ずっと父さんにいい顔見せないから、機嫌が斜めになったの？
今日はいつもより出発したが、ペースは先日と比べてかなり遅くなった。見ては旅路の景色を楽しめるのではない。何かを探しているように見える。眉根を寄せた男の神経はずっと強張っている状態だ。
「父さん、もうすぐお昼だよ？休んでもいい？」男の子は慎重に聞いた。
「うん？もう？いいだろう。川の近くで休もう」
この川の水位はやや高い。春の雪融けの関係かもしれない。今、山の更に奥へ近づいた。
男は水を汲み、火をおこして、水を沸かし、お茶を入れる。熟練した動きであった。もう七日目だ。昼には栄養食糧、夜では狩や採集で取った獲物の料理と炊爨。二人はこのような行動に慣れた。

――そう言えば、昨日雨降ったね。高級のレインウエアでよかった。でないときっと想像より感じ悪い。
大雨ではないが、地面は泥濘って、靴も泥まみれになった。
――考えてみれば、荒野で暮らすだけでは、雨で移動する必要はないじゃない……
男の子は今まで父親に自分らの行く先を聞いていたかった。今はますます気になってきた。
彼は尋ねようとする時、父親のほうが先に話した：
「な、我が息子よ」
「ど、どうした？」
「まだ咲いていない桜の木って……どう探せばいい？」
「なに？さくらの木？」
「壁にある絵のことだ」男は栄養食糧を一口齧り、空いた手で頭を掻いて困りそうに言った。「木を隠すなら森だっていうし、まったくごもっともだ」
「どうしてあの木を探すのか？ここにあるの？」
「オイッ、静かに」
「質問を答えて！」男の子はつい大声になり問い詰めた。
「黙れってっつってんだろ！」男は極力音量を下げて叱った
男は息子の目を見ず、川の上流から流されてきた物を見つめている。男の子は父親の目線を追ってみると、息を呑んだ。半分の体が千切れた鱒は、鰓蓋は依然として開閉している。そして半殺しされた鱒は岸の岩に止まった。
「このさかな……」男の子は口を閉じた。男は今度こそ不愉快な目で睨みつけた。
男は周囲に歩いている生き物は彼らしかいないと確認したら、息子を引き連れ、川沿いから離れた。
「鞄ん中の食糧をだして、多くでもポケットに詰めなさい。余計な音を立てるな」男は息子の耳元につき、彼だけが聞こえる声で話した。
男の子はそれに従った。
男は使えそうな薬草をポケットにつめ込み、刀をザックから下ろし、鞘をベルトに繋いだ。そして音を立てずに、二人のザックを藪に隠した。
男の子は泣き顔して父親を見、体が震え始めた。
川の流れはあまり音を立てていないのは、水位が原因だ。水面に岩がない以上、二人の立てた騒音を消せる川のせせらぎという大自然の援護は期待できない。
男は山の斜面を登りはじめた。ここは山地の中でも平たい場所だ。ここなら、男の予想した生物は彼より遥か速く走れる。上に登るのは逃げるとき坂道を作るためにある。坂道なら人間のほうが優勢があるからだ。
二人はなるべく素早くこの地域から離脱する。道の所々にあの生物の残した痕跡がある。折れた枝、覆された苔、爪磨きとされた樹皮、全部だ。
――俺らはやばい方向に向かっているかもしれない。畜生！ここはあいつの縄張りだ。あの木の探しに夢中になっちゃったから、この痕跡を見逃した！
男は登山用の手袋をつけていないと、今頃爪が掌の肉に差し込んだのだろう。
彼らが足を一刻も止まらず運び続けた。周りもますます暗くなっていく。
――引き戻すべきなのか？いや、そこはもう安全じゃない。じゃ斜面と平行にして移動する……
男は方向を変えようとする時、息子に引っ張られた。
男は歯がゆく振り向くと、息子の目線がずっと後ろの方に見つめているのを見た。
「父さん……」男の子は力を搾り出して、警告を伝えた。
突然、今までずっと音が聞こえなかった思い足音が藪を鳴り越して、黒い毛皮を持つ巨大な獣が急速接近してきた。

「熊だ……」
「下へ走れ！」
「ガオ――！」
男は息子を突き放し、居合いの構えをした。
しかし相手はもう男の目の前に衝きこんだ。
「シャ――！」男は踏ん張って一歩出して切り出した。
「ガオ！」
――くそ！先手は取られた！致命傷にいたらない！
刃は黒熊の前足の裏に深く切り込んだ。
「父さん！」
――逃げるってっつったんじゃん！
男は血振りせず乱暴に納刀し、息子を脇に抱えて逃げた。
「父さん！無事？大丈夫！」
「黙れ！舌噛むぞ！」
「追ってきたよ！」
「野郎」男は坂を下った。
熊の前足は後ろ足より短いため、下り道の行動には人間より向いていない。その上、今足には負傷させた。
――しかし、普段の熊は人を食わないが、今は冬眠上がりだから、めっちゃお腹を空かしたな！
「いい、よく聞いて。俺が食い止める。君は坂を上って、あの木が見えたら真っ直ぐ走って、鈴の音が聞こえたら全力で叫べ」
「でも木の居場所は知らないよ！」
「我が息子よ！君に任せた！さぁ走れ！」
男は息子を下ろした。男の子は後ろも見ないで一心に駆けていく。後ろから父と黒熊の雄叫びが耳に伝わった。
――母さん、母さん！どうか！父さんを守ってください！
男の子は精一杯あの木の輪郭を思い出してみた。それはどの木よりも高く、真っ直ぐ天に伸びている……
「！」
――見つけた！母さんありがと！
男の子は涙を乱暴に拭いた。肺が張り裂けそうになっても、走りぬいた。大樹の隣を通って、父親の指示に従い走り続けた。
「うぁ！」いきなり何かに躓き転んだ。
それと同時に、周りが鈴の音が山中を響き渡った。男の子はやっと父の指示の心がわかった。
「助けて！熊が出た！誰か父さんを助けて！」
男の子は藪を抜け、山の向こう側に着いた。坂の下に一軒の小さい屋敷があって、灯りが光っていて、希望の星みたいに輝かしいと男の子は思う。そこから人が駆け出したのを目に入り……それでも救助を求めるのを止めなかった……

日の出前の空と大地は霧まみれで紫ずくめだ。紫の山、紫の風、紫の雲の欠片と空の彼方。それはなによりも静かに、賑やかである。朝焼けから逃げるため、山中の雲煙が一斉に木々の守りに潜り込んだ。もし雨上がりの日差しは「天使の梯子」というなら、夜明けの日差しは「女神の階段」と呼ぶだろう。
女神のお出ましの直前に男の子は目が覚めた。
「だから、わしを義父さんなんて呼ぶな！」一人の老人の声が男の子の耳に入った。「どういう面で戻れた

んじゃ？」
　男の子は父親の声が聞こえるがはっきり聞き取れない。
　「あら、目が覚めた？」一人の若い水色の着物の女性が隣に座っている。
　「か、母さん！」男の子は猛然と起き上がった。
　「似てるでしょう？でも残念、叔母さんだよ。君の母の妹だ。千織姉ちゃんって呼んでくれたら嬉しいよ」千織は微笑んで言った。
　「千織姉ちゃん……父さんは！」
　「あらあら、元気で何よりだ。一緒に来て」
　縁側の廊下を通り、裏座敷に案内した。途中で庭の方にはあの熊の死体が寝ているのを見てやや驚いたが、それは即ち父さんの勝ちだと男の子は直ぐ理解した。
　「よ！起きたか！」
　父は紺色の着物を着る老人の対面に正座させられている。母の刀は二人の間に横たえている。刀についている血痕はもう綺麗にしたようだ。
　「おはよう。大丈夫？」男の子は憂いを帯びた顔をした。
　「大丈夫！めっちゃ元気！」
　「へらへらするな！」老人は怒鳴った。「よくも子供まで巻き込んで！死ぬところだったんじゃわんか！」
　「まあまあ、あなた、折角孫を連れてきたんだから」紅葉色の着物をする老婆が、１人前の料理を乗せた足打ち折敷を持って入った。
　「あ、母さん。手伝う」千織が老婆の手伝いに席を外した。
　「そうですよ。お義父さま、孫を連れ戻りましたよ」
　「お義父さまと呼ぶんじゃない！」
　「あ、あの……！」男の子は話しかけてみた。
　「なに？」老人は勢いで聞いた。
　「初めまして、お爺さん、お婆さん？」
　「「……」」
　――あれ？間違えた？
　「あらまぁ！もうこんなに大きくなったわ！」「やっぱわしに似ておるんじゃろ？」「お利口さんだね、お婆さんと呼べるなんて」「さすがわしの孫じゃ！」
　老人二人は興奮と感動の気持ちに駆使され、孫である男の子を囲めた。
　男は息子に親指を立てた。
　「父さん～母さん～もうご飯していい～？」千織はもう朝食の支度を整った。
　しかし騒ぎはしばらく続くようだ。

　「「いただきます」」

　日差しはやっと山際を越え、親子の目に直射した。でも眩しいとは思う暇はない。二人は老婆の味噌汁を一口飲んだ。
　「父さん……これ…は……？」
　「うん……」男は椀を両手にし、飲みきっても下ろす気はしない様子だ。
　男の子は父親の涙を目にした時、自分の頬はとっくに濡れてしまった。
　試しても試しても、二人の手には到底作れなかった妻（お袋）の味であった。
　「フン、話にならん。大した男が無様に涙を……」老人はそう言いつつ、口元は少しだけ上がった。

老婆と千織もこっそり涙を拭いた。
「ゆっくりお食べな。ま～たたくさんあるわ」
「千織姉ちゃんも手伝ったよ」
「「はい」」涙に咽んでも、二人は素直に返事した。
老人はこのような二人を見て長く溜息をつき、話した：
「食ったら、この数年間のことをちゃんと話しておくれ。さぞ大変だったじゃろ。よく頑張った。わ、わが息子よ」老人はほんの少し、赤面になった。
「！」男はお椀を顔から下ろし、唖然とした顔になって義理の父親を見つめた。
「返事は？」膝に頬杖を突いて問うた。
「はい！お義父さん！」
＊
新しい制服のショートタイと苦戦して、やっと繋いだ。
まあまあいける、と男の子は思った。
「母さん。あれは初めて見たかも。父さんの涙……」
この何年を渡って溜め込んだ辛い気持ちを一気に涙と一緒に流したようだった。辛さの雫を拭きながら婆さんの料理を美味しい美味しいと食べていた。そんな父さんだった。
「これは多分、父さんの言った『原点回帰』ってものか」男の子は母親の写真と会話した。
ここは男の子の自分専属の部屋だ。部屋の壁にはあの桜の木の写真と母親の写真（一枚だけ）が飾っている。桜の気の写真の中に父と自分、そして爺さん、婆さんに千織姉ちゃんがいる。
広いとは言いがたい部屋ではあるが、男の子初めての個人の空間だ。彼にとってまだまだ広すぎると感じている。
「いってきます！」男の子はランドセルを背に、母に別れを告げた。
慎重に踏みなれていない階段から降りて、一階の廊下を通り、斬新な空間に立ち入った。
「おはようございます！」「おはよう～！」
「谷岡兄さん、舞姉ちゃん、おはようございます！」
二人はこの空間の一番奥のテーブルに座っている。
「今日は初日でしょう？ちゃんと挨拶してね」森原は男の子に元気を付けてあげようとしている。
「分りました。ところで、舞姉ちゃんは前より早くでかけているようですね？僕の気のせいですか？」
「仕方ないでしょう。この店の朝ご飯が美味し過ぎるのが悪いですよ～！」
森原はトマト、レタス、チーズを挟んだベーグルを一口齧った。他には大蒜抜きのシーザーサラダとハムタンピンが待っている。
照明の明るい店内では八枚のテーブルが店中に並ばれている。
左の壁は定番の和式料理のメニューが書いてあり、隣の広い黒板に週替わり献立がある――和式料理から西洋、東洋の料理、四海八方の朝食料理全部あると思われても可笑しくないほど、この店のメニューである。
右の壁は水彩の壁画である――男と息子は山に入り、野営し、刀で熊と戦い、桜の木の向こうにお爺さんとお婆さんが待っている。という物語を描いた。
「あのさぁ、胸はさて置き、腰のバストが先に成長しちゃわない？」谷岡はせせら笑った。
「なんですって！誰が先に太るかまだまだ分からないよ？」
谷岡の前にはサンドイッチ、お握り一つずつ、味噌汁と焼き鮭とオムレツなど、ものすごい種類豊富の料理が並んでいる。
カップルの口喧嘩に対し、男の子は苦笑いした。
「弁当よ！弁当！」

「千織姉ちゃんありがとう」
――千織姉ちゃんは今僕と父さんと一緒に暮らすことになったの。もちろん、お爺さんもお婆さんも一緒に！
＊
「この家から出て町に引っ越すんじゃと！抜かせ！うちは代々この家で生まれこの家で死ぬんじゃ！ここを出たらどこへ行くと言ってみるんじゃ！」
「ですから、お義父さんとお義母さん、そして千織も、一緒に私たちの家に来てほしいです。既にみんなが暮らせる家を買いました」男は小さい声でまた呟いた。「ローンは少しだけ借りていますけど……」
「だ―か―ら――！ここは先祖代々の……」
「父さん！」千織が老人の言葉を割って入った。「ちょっと私の意見も聞いてもらえる？」
「な、何じゃ？言ってみろ」
「いいの、千織」男は聞いた。
「いいの、兄さんは心配しないで」
千織は一回深呼吸した。
「実は兄さんに提案したのは私だ。父さんと母さんをこの村から出てほしい」
「なんと、千織が町から帰ったばかりじゃないかい？」
「はい。帰るのに五日もかかっちゃった。お蔭で決心がついた。ここはもう住めない。町から離れたこの村は村人たちが助け合いあってこその村。でも今は昔と違って、人が少なくなって、若者も一人もいない。残ったみんなももうすぐ他の町へ行く。このままじゃ生きていられないよ」
「そんなことは……」老人は反論ができない。
この村は確かにもうおしまいの時である
「あなた、もうここは潮時だわ」老婆は老人の手を握って。「子供たちに心配させるのもよくないことだわ」
「……もうちょっと時間をおくれ」言ったそばから、老人は部屋から出た。
「父さん、いったい？」
「ああ、これはね、姉ちゃんが手紙を書いて、君のお父さんに助けを求めたのよ。手紙が届くまで半月もいるところなんて、孫が帰りたくても帰れないじゃないか」千織は言った。
＊
――そして、説得されたお爺さんとお婆さんは僕らと一緒に、もう一度山を越えてこの町へ来た。
「千織姉ちゃん、弁当、ありがとう」
「ううん、どういたしまして。ところで、あの二人はまた喧嘩になっちゃったんだ」千織は微笑ましく笑って言った。
父と爺さんが厨房に調味料の置き方に巡り揉めている。婆さんは調停者として毎日生き生きと振舞っている。
「だから、和式はわし等の担当じゃ！調味料の置き方なんざ、わしの勝手じゃろ！」
「ここは俺の店だ！」
「じゃ、わし辞めるわ」
「ごめんなさい！お義父さま！」
店内にそんな茶番を毎日上演している。
「もう知りたくない。いってきます。千織姉ちゃん」
「はい、いってらっしゃい」
「もう行くの？、まだ六時だよ？」
「もう行く！今日だけは遅刻したくない！」
「そっか、気をつけて」といった千織は厨房に戻った途端、男と老人は頭を厨房のカーテンから突き出して：
「「我が息子（孫）よ！気をつけろよ！」」

「恥ずかしいから！中に戻ってよ！」男の子はお客の微笑ましい視線を浴びながら、出かけた。

静かさに戻ったこの店の隅っこで、森原と谷岡はこの家族のことを見守って、料理を味わいながら、ドアから入った同僚やお近所さんに相槌で挨拶して、春の最後の風を楽しむ――

＊

――その日以来、一ヶ月経った。我が夫は東京のマンションを売って、父さん、母さんと千織を山奥から埼玉の郊外に定住した。ついてに私の料理の味の元もまんまと持ち出した。堅物の父さんは引っ越しを許すのも千織と我が息子の願いのお蔭だ。そして、あの夜の晩餐会、晃希さんと舞ちゃんとのお喋りも実現した。家の一階は見せて建て替え、朝食屋になり切って、近所の住民からいい評判だそうだよ。そして、我が息子も近くの小学校に転入することになって、今日はその一日目だ♪

チャイムと同時に、男の子は中年の男の担任の先生に呼ばれ、元気をつけ教室に入った。
「皆さん、始めまして！僕は佐倉颯太です！うちは三丁目で朝食屋をやってます！名前は*Make Sakura Fly Again*！」

――桜木は緑の衣を着替え、散った花びらも姿が見えなくなった。でも、春のそよ風は彼女たちを生まれ変わらせる。そして、また空へと舞い上がってゆく。これは、我が夫と息子の、サクラを再び舞い上がらせる物語である～

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

後書き：
今回もライトノベルの感じで書きました。どうですか？この愉快な親子の物語は？
物語の展開はかなり急だと思いますが、そこはついて来れますか？
森と植物の部分は以前農学部の森林再生学で勉強した知識ですが、柳の葉っぱで淹れたお茶は、実際に飲んだことはありません。興味のある方はどうぞ試して、感想をください。
さて、「ち」というテーマですが、私はこの前ちょうど散って地に落ちた花を見かけ、この物語の始めを思案してみました。そしてキャラクターの名前に悩んだあげく、いっそ前作のキャラクターの名前をもう一回使おうかと思った。物語のところどころに、ちょっとだけ前作に出た「何か」があるはずです。お時間があれば探してみてもいいですよ。（ほんのした出来心です。迷惑でしたら、このような真似はもうしません！）
最後に謝辞を言わせてください。
文芸部のみなさん、留学生であった私に、作品を出せる機会をくださり、誠にありがたく存じております。これは私、大学四年間最後の作品です。これからは時間が許すかぎり、また物語を書きます。できれば、また作品を出させてください。

はんぱもの

文月遼、

――やばい。泣きそうだ。

胸の奥底で響いた、心が潰れる音。水島永良（エイラ）は久しぶりにそれを聞いたような気がした。ぎゅっという、新雪を握り潰した時のような音だった。

湿気た木と、まとわりつくようなコーヒーの匂いに包まれた喫茶店で、永良と向かいに座る少女は黙りこくったまま、苦いコーヒーも飲んでいる。永良はどろりとした黒い水をすする音に紛れて鼻をすする。褒められたものではないが、今は行儀も何も知ったことでは無い。

永良は日本人離れした灰色の髪を乱雑にかき上げた少女だった。り目がちな双眸と、つんと尖った鼻に少し大きな口。黙っていれば狼や猟犬を思わせる鋭さがあった。シベリアンハスキーに似ていると言われたこともあったが、そんな高貴さは感じさせない、捨て犬のような顔だった。

永良は目の前の少女の事を知っていた。誕生日も好きな音楽も。こんな場所に来ているけれど、ジョージアの激甘コーヒーが大好きな超絶甘党であることも。ディズニーよりはＵＳＪの方が好きなことも。最近は古い少年漫画にハマっていることも。

――意外と着やせするからだのどこを責めれば弱いのかも。

結局、それは幻想に過ぎないのだ。そうでなければ、別れ話など切り出されるはずもない。少女は申し訳なさそうな顔をしていたが、そんな顔をするくらいであればこんな話を振るんじゃない。永良は場所も何もお構いなしに叫びたくなるのを、どうにか堪えていた。

「それで。何が悪かったのさ。アタシも、変えられるように努力するから……なあ、頼むよ」

永良は自分の言葉をセーブ出来なかった。頭の片隅で今の自分の言葉を笑う、もう一人の自分がいることにも気が付いていた。

まるで、ちゃちな恋愛映画に出て来るダメ男みたいだ。

うじうじと聞き取れないような音量で要領の得ない説明をする、量産型のダメ俳優だ。

「そういうのが問題じゃないの。逆に合わせられてるってなると、こっちが申し訳なくなるというか。多分、恋愛、下手なんだよ。私達」

じゃあどうすればいいんだろうな。永良はそう尋ねたくなることを堪えた。それこそ向こうに引け目を感じさせるということは分かっていた。

彼女は優しすぎるのだ。お互いなどと言わずにこちらが恋愛下手なのだと言ってしまえばいいのに。永良はふと思う。恋愛の巧拙ってそもそも何だろうと。

とりとめのない思考を巡らせるうちに、少女は立ち上がった。伝票に手を伸ばす。ほとんど反射的に、永良はその手首を掴んだ。相当の力を込めているのか、少女の細い手首が更に白くなった。一瞬、少女の顔がこわばる。

永良は手を離した。今のはマズかった。引き留めようとしていると思われかねない。実際、引き留めてるのだけれど。

「っ、悪ぃ。ここはアタシに奢らせてくれ」

「でも……」

「いいよ。フラれてメソメソして、更に奢られてるなんてダサいじゃん。最後くらい、ちょっとはカッコつけさせてよ、な？」

永良はその手を離し、にかっと笑ってみせる。

『エイリアン』のシガニー・ウィーバーみたいにクールに決めたつもりだった。けれども少女の

顔は捨てられた犬を見ているような顔だ。
　――ヤバイ。マジで泣きそう。
　頼むから同情みたいな視線は送らないでくれ。そう思いながらも永良は辛うじて笑みは崩さずにいることができた。
　少女は困ったように頷き、小さく手を振って咲楽に背を向けた。からんからんと安っぽいベルの音が、別れを告げるよう。
「悲しみは海では無い、ねぇ」
　永良はこみ上げてくる嗚咽を呑み込むようにして、ぬるくなったコーヒーを口に含む。
　むせかえりそうになる匂いと苦味が、少女の口腔を支配していった。それを、少女が残していったチョコレート・ボンボンで中和する。口の中でチョコが割れて蜂蜜と生クリームのガナッシュがじわりと広がる。口の中にそれを含んだまま、一気に残ったコーヒーを飲み干した。
　コーヒーとチョコレートが喉をゆっくりと降りてゆく。それが永良の心を落ち着かせた。
　永良がふうと息をついてもたれたところで、胸元に入れていた携帯が鳴った。着信音は『マイアミ・バイス』のテーマ曲だ。その相手を見た瞬間、永良は顔をしかめる。今、一番見たくない相手からだ。
「ちっす。水島です。何か用すか、神（ジン）サン」
『雇い主にちっすとは何だ、ちっすとは』
　咲楽の耳に冷たい男の声が届く。まるで退屈なニュースを読み上げているキャスターのように抑揚の薄い声だった。
「あの、今ちょっとブルーなんで、後にしてもらっていいすか」
『……あの日か？』
「いや。でも、来週辺りだろうから、そこでは仕事を……じゃなくて！　JK相手にセクハラじゃん、セクハラ！」
『そうじゃなければ、フラれでもしたか』
「関係ないでしょう、慰めてくれるんですか？」
『やめろ、高校生がはしたない』
「いや、最初に言ったのアンタ……まあ、いいけど」
　永良は薄く笑った。自分達の仕事を知っておいて、そういうことを〝はしたない〟とのたまうとは。
『「いい」と言ったな。引き受けてくれるわけだ』
「いや、言ったでしょう。今はブルーで――」
『報酬はお前の口座に振り込まれてる。。今更お前の精神状態で左右できるレベルじゃない』
　ほとんど一方的に神は目的地と要件を告げ、通話を切った。時間はあまり残されていない。咲楽は伝票の上に千円札を置いて喫茶店を後にする。
　そこに、フラれてめそめそとする少女の姿は無かった。
　一歩進むごとに、彼女の顔は狩人のそれになった
　手元にあったウォークマンを起動して、イヤホンを耳にひっかける。
　流す曲はマット・モンローの「ロシアより愛をこめて（From Russia With Love）」だ。
　穏やかな流水を思わせるメロディと、マット・モンローの甘い歌声が彼女は好きだった。上司である神の声にそこそこ交換を抱いているのは、多分この歌手と似ているからだろう。
　永良はそんなことを思いながらゆっくりと雑踏を進む。

指示された雑居ビルに踏み込み、エレベーターに入って最上階のボタンを押す。ぐんと胃を持ちあげられるような感覚と共に、回数表示がみるみると変わっていく。
最上階、屋上のドアを開いた瞬間、むあっとした夏の風と共に嗅ぎ慣れた臭いが飛び込んで来た。
乾いた、それでいて酸っぱい臭い。
火薬の匂いだ。
折り畳みの椅子に腰かけ、タブレットでゲームに興じる少女がいた。その真横には、青いシートと、物々しい金属と強化プラスチックの筒が置かれていた。
R-11　RSASS(Remington Semi Automatic Sniper System)。
レミントン社製のセミオート式狙撃銃だ。人間工学に基づいた、どこか近未来チックなボディは、ともすればグロテスクと言えるかもしれない。事実、それは合成獣(キメラ)とも言えるものだった。JPエンタープライズ、マグプル、リューポルドといった多様な銃器メーカーのパーツを組み合わせたそれは、永良のお気に入りになるように調整された(あなただけの)４　Ｕ モデルと言えるかもしれない。言ってみれば、アタシの女だ。永良は微かに口角を上げてその銃を撫でる。
「エイラぁー、遅刻ー」
タブレットから視線を離すことなく、少女が間延びした声を投げかける。永良は軽く折りたたみ椅子の足を蹴った。うひゃあと間抜けな声を上げて、少女は床に転がる。
「いった！　何すんの、もうちょいでフルコンボだったのに！」
「いい気なもんだな、お嬢さま。こちとらテメェの兄貴に呼びつけられたってのに、えぇ？　侠華(きょうか)ァ」
睨みつける永良を見て、神侠華は渋々とタブレットの電源を落とす。
袖をまくり上げたブラウスとひたすらに折り曲げたスカート姿、言ってみれば粗野な外見の永良とは裏腹に侠華の姿は華やかだ。赤く染め上げたツーサイドアップの髪にヘソと引き締まったお腹を惜しげもなく晒したチューブトップにタイトなミニスカート。その裏の太ももにはルガーLCRピストルの収まるホルスターがある。.22口径　LR(ロング・ライフル)　弾を用いる小型の拳銃だ。
さながらそれはパンクロッカーか何かのようだけれども、その顔立ちはどこか甘い。衣装と不釣り合いに幼い顔立ちは、どこか危ない色香を漂わせている。
「その兄貴から金貰ってんだから、文句言わないでよ」
「そのバイトのせいでどれだけ……ああ、クソ。やりゃいいんだろ、やりゃ」
生唾を呑み込んだことを隠すように、永良は自分の髪を軽くかき上げ、青いシートの上にうつ伏せで寝転がった。
薄いシャツ越し、あるいは太ももに衝撃吸収用のジェル特有のひんやりとした感触を味わいながら、R -11 4Uに手をかける。
「何をカリカリしてんのさ？　生理？」
「兄貴にも聞かれたよ」
「大丈夫、漏れてない」
「覗くなアホ」
スカートの裾をつまもうとする侠華の脛を、ローファーの底で軽く小突いて、永良はタブレットを見る。
そこに写っているのは、コメディ映画に出ている時の松重豊のような、ひょろりとした色黒の男だった。どこか間の抜けた表情のそれを眺めながら、永良は画面をスライドさせる。

「んで、コイツは何をしでかしたわけ？」
「お医者さまだよ。お医者さま。最も、バックには四獣合会がついてる。専門は〝飲むと元気になるお薬〟」
　四獣合会。ダセェな、三合会か何かでも気取っているのだろうか。永良は口許に笑みを浮かべ、そしてそれが疑問に変わる。
　疑問符を浮かべる永良を見て、侠華がわざとらしいため息をついた。自分よりふたつ、みっつほど年下の少女の教えてやろうと言わんばかりの態度に、ムっとしながらも、彼女が喋りたそうにしているのを感じて黙り込む。
「四獣合会ってのは、いわゆる半グレの集団って奴よ。ヤクザでもマフィアでもない。暴走族やチンピラの緩いネットワーク」
　侠華は指を折りながら具体的な仕事を数える。
　ネットカフェや敷金、礼金のかからない格安アパートなどの不動産、芸能プロダクションやモデルの斡旋。そこまで言った所で、永良は遮った。
「ヤクザと何が違うんだよ」
「規制を受けてないのよ。暴力団と違って」
　侠華は説明を続ける。永良は半分くらい説明に飽きて来たのか、R-11 4Uの調整を始めた。
「ビジネスとしてはヤクザとダダ被り。けれど、彼らの組織はもっと緩いのよ。そして、組織も一定じゃない。集合離散を繰り返しているワケ」
「ゼロインはどうなってる？」
「200メートル、ちょっとゼロインしといて」
　ゼロインとは照準器で覗いた地点とライフルから飛ぶ弾道が一致するように調整をすることだ。風向きなどの条件を加味しなければ、その照準に合わせて撃てば当たる。
　目標が来る場所は300mほど先にある小さなクラブだった。
　目標が100メートル違えば、その誤差は大きくなる。ほんの数センチのズレだとしても、1メートル以上の誤差が出ることがあるのが照準の世界だ。
　永良はスコープを覗き込み、ノブを数クリック回して照準を調整する。わずか数センチズレるだけで、数メートル先に弾丸が逸れてしまう。少しのミスは許されない。
「四獣連合も同じなの。ある程度有力な組織があるけれど、実体としてはもっと緩い繋がり。せいぜいSNSの相互フォローってくらいの関係も珍しくは無いわ」
「風と気温の誤差、すぐ出せる？」
「はいはい。それで、この男は四獣連合の中でも有力な――」
　侠華がタブレットを横から操作して、専用のアプリを開く。彼女が自作した弾道計算アプリだ。いくらかデチューンしたものをストアで配信しているらしく、小遣い稼ぎ程度にはなっているようだった。永良は出て来たファンシーな電卓に数値を軽く撃ちこんだ。数秒とかからずに出て来た数値を見て、彼女はR-11 4Uの照準をもう一度覗く。
　彼女の勘とも、大きな差はない。
「――んで、彼は医者であることをいいことにちょこちょことクスリをくすねて、混ぜ物をして売り捌いてる分け。体の良いバイトって名目で教え子を使ってね」
「へー、よくできてんじゃん」
「……聞いてる？」
「聞いてる聞いてる。つまり、悪党ってワケでしょ？」
　侠華はうんざりとしたようにため息をついて、隣に寝転がった。冷たいジェルがお腹に当た

って、「ひぅ」と嬌声を上げる。
　隣で聞こえた甘い声と、清潔な石鹸の匂いが永良の五感をくすぐる。胸の奥が一瞬じゅんと熱くなる。
　視線をずらし、侠華の様子を見る。高倍率の双眼鏡を片手に、お腹が冷えるのか、もじもじと動いている。
　その度に髪が永良の腕や背中をくすぐる。その度に、彼女の心が跳ねる。あまりに無防備な様子に、永良はどきまぎさせられる。
「うう、なんでエイラは耐えられるのさ」
「……脂肪（おっぱい）？　ってか、もうちょいちゃんとした服来なよ」
「おしゃれに犠牲はつきものなの」
「あっそ」
　そこまで言って、侠華はスコープを覗き込む。永良もそれに倣って照準器を覗いた。ちょうど目標だったクラブの前に、一台のクラウンが停まった。
　クラブの奥から、数人の若い女を連れた壮年の男が出てくる。松重豊みたいな顔の、標的だった。
　永良は親指をずらしてR-11 4Uの安全装置を外す。スライドを引いて、弾薬を装填する。がしゃん、と薄い金属を握り潰した時のような音が響いて、弾丸が装填される。
「侠華ぁ、弾丸はなに？」
「7.62mmセミジャケッテッド弾の〝エグゼキューター（処刑人）〟。高級品なんだから、外さないでよ？」
「へい、アタシを誰だと思ってるワケ？」
　それを聞いて、侠華はニヤリと笑った。静かに風向きと風速をもくもくと読み上げる。雑談をしていたときとは打って変わって、どこか機械的だった。きょうだいなのだなと永良は思う。
　永良の照準に、微かに疲労を浮かべる医者の顔が見えた。周囲の女性も、どこか艶々としている。死ぬ前にスッキリ出来たのであれば、まあマシじゃないか。ナニを膨らませたまま死ぬことほど惨めな事は無い。
　永良は下品な事を思いながら伸ばしっぱなしにしていた指を曲げ、引き金に指をかける。
「いつでもいいよ」
　侠華の言葉に合わせて、永良は静かに引き金を絞った。
　雷管が激しく叩かれ、火薬が爆ぜる。銃身の奥にある旋条（ライフリング）をなぞって弾丸が校則に回転、高速で飛ぶ。
　バスン、というくぐもった破裂音が響いた。高圧のガスが噴き出し、周囲の埃や塵が噴き上がる。心地の良い反動が、全身をびりびりと駆け抜ける。
　スコープの奥で、医者の額に穴が開いた。人差し指ほどの大きさの弾丸が、秒速700m近い速度で皮膚を抉り、骨を砕いて陥入する。一瞬遅れて、下顎を残して男の頭が爆ぜた。
　白いクラウンに、血と灰色とピンクの脳漿が飛び散った。
　なるほど。処刑人ね。上手いことを言うものだ。永良は得心が言ったように頷いた。オーバーキルもいいところだが、炸裂して弾丸が粉々に砕け散るから、どこから撃ったかを特定するのは相当困難になるだろう。
　もっとも、そこまでするほど気を遣う必要はないようだが。
　クラウンから数人の男が飛び出して、拳銃を引き抜いた。ドアを開いて盾代わりにして身を隠す。

「目標って、一人でしょ。他はどうする？」
　侠華は何も言わず、手のひらを広げた。
「ボーナスってわけね。50？」
「5」
「ケチ」
「ザコ相手に金が出るだけありがたく思えって、兄貴がさ」
　永良は侠華から飛ぶ指示に導かれるままに再度照準を覗き直した。窓ガラス越しに様子を伺うチンピラ、その下のドアに狙いを定める。
　風向き、風の強さ、有効打を与えられたか否かの確認。それらを全て外注したうえで永良は狙撃を行っていた。
　永良が引き金を絞る。短いスパンで二度、三度と引く。
　いわゆる、ダブルタップと呼ばれる技術だ。本来は狙撃銃で行うものではない。精度が高く、キャパシティが多い銃。そして正確な腕が両方なければ成立しないスキルだ。
　薄い車のシートメタルをすり抜けて、ドア越しに赤い花が咲く。日本の防弾仕様などたかが知れている。小口径の拳銃ならばまだしも、ライフル弾を止められるはずもない。
　永良は淡々と引き金を絞る。その度に小さな爆発が起こる。
　一分と経たずに、死体の山が出来上がった。少なくとも、ふたりの世界には静寂が戻る。数百メートルほど先の喧騒は知らないけれど。
「うっし、撤収」
「あいよ。あー、スッキリした」
　二人がゆっくりと起き上がり、ジェルパッドを巻く。楽器を入れるような大仰なケースにR-114Uをしまい込む。
　十キロ近くあるそれを、永良は軽々と背負う。既に日は沈みかかっており、空はすでに暗くなっていた。
　エレベーターのパネルを押し、一階へ。ごうんごうんというくぐもった機械音しかない時間、普段なら他愛も無い話を続けるのだろうが、今日はぎこちない沈黙が続いていた。初めは無視していたものの、耐え切れなくなって永良は問う。
「それで、これからどうする？　ボスに報告？」
　侠華は答えなかった。先程までの生意気な態度は鳴りを潜め、伏し目がちに永良を見ている。暗いせいで表情はうかがえなかったが、派手な外見と裏腹にしおらしげな態度の温度差に、永良は先ほどの高揚を思いだす。
　優秀な観測手であり、上司の妹でもある彼女の姿。それが普段のものよりもいくらか違って見えた。
「ええと、じゃあ。ちょっと寄りたいところがあるんだけれど」
「どこへなりとも」
　恭しいお辞儀を返すと、侠華は少しだけ照れくさそうに笑った。その笑顔を見て、永良も微笑み返す。
　エレベーターの扉が開く。目の前をパトカーが通り過ぎていくのが、数人のガラの悪い男が走って行くのが見えた。
　どれもこれも、今の彼女達には関係のないことだ。
※※
「いやぁ、悪いね！　奢ってもらっちゃってさー。今月ピンチなわけよ」

「どうせ、そんなこったろうとは思ったけどさ……」
　流行の毒にも薬にもならないような薄っぺらいラブソングの流れるファミレス。テーブルの上半分を埋め尽くさんばかりの料理が並べられている。チキングリルとハンバーグ、エビフライのコンビセット、マルゲリータピザに、申し訳程度の野菜と言わんばかりのポテトフライ。メロンフローズン。小さな身体のどこに入るのか、少女は次々とたいらげていく。
　永良はコーヒーをすすりながらちらりと財布の中身を見た。100円そこそこの手数料をケチってお金を降ろさなかった自分を悔いる。これだけ遠慮なく注文されてはじきに底をつくだろう。
「エイラ、アンタは食わないの？　ほら」
「ん。貰うけどさ……」
　侠華の差し出して来た皿を見て、永良はため息をつく。ピザのホール半分に、山盛りのポテトフライ。見ているだけで胃がもたれてきそうになる。
「それで、ここを選んだ理由、そろそろ教えてもらえる？」
　ピザにタバスコをこれでもかとかけながら永良は問う。赤い、ツンとした匂いの液体がチーズを赤く染め上げていく。その様子を見て侠華は眉をひそめた。油でぬるぬるした指をねぶり、スカートの裾で拭ってフォークを握ってエビフライを突き刺した。お互いにマナーに関して思う所はあるようだったが、それについては互いに不干渉を貫いていた。
　永良の方はどうでもよい諍いで関係を壊すことを望んではいないのだ。目の前の食いしん坊はどうだろう。彼女の脳裏にふとそんな疑問をよぎったが、それを聞く前に侠華が口を開いた。
「エイラってさ、あれだよね。ケーケン豊富じゃん？」
「殺しの？」
「いんや。その……れ、恋愛？」
　永良は思わずむせかえった。飲みかけのコーヒーが飛び散ってテーブルを汚す。
「きたなっ」
「わ、悪い……ま、まあ。豊富って言えば豊富かもしれない」
　侠華はテーブルを軽くふいて、小さく相槌を打った。その表情にはどこか尊敬のようなものが混じっている気がした。
　どうせなら、普段の殺しの腕を褒めてくれればいいのに。永良は少しだけ面白くなかった。
　恋愛の経験が豊富とは言い返せばそれだけ失敗を重ねたということに他ならない。派手な失敗を何度もしでかしたし、関係を修復することが出来ずに気まずいままの女性だって何人もいる。
　そうだ。女性だ。
　永良の守備範囲は女の子なのだ。その経験がおよそ一般的な恋愛論に通じるのかは怪しい所だ。LGBTだの何だの理解が進んだところで、結局のところは異種として見られることに変わりはない。
　永良は自分の嗜好を侠華には伝えていない。理由も同じだ。
　理解があるフリをして遠ざかっていく人間を何人も見て来た。上司の神には伝えているものの、それは侠華に内緒にするようにと頼んでいた筈だ。
「それで、誰から聞いた？」
「兄貴から。恋愛の相談なら俺よりエイラのがいいって」
　後で話をしない（ぶっ殺そう）とな。永良は極力平静を装って鞄の奥にある小型の拳銃を撫でた。
　それはともかくとして、同僚の相談を無下に扱うほど彼女も冷淡では無い。何よりも、目の前の少女恋心を抱かせた人間がどんな人物なのかも気になる所なのだ。
「ま、まあ。相談は乗るよ。それで、相手ってのは？」

「うえ!?　言わなきゃダメ？」
　もそもそとエビの尻尾をかじっていた侠華が眼を剥いた。
「言わなくても良いけれど、相手がどんな人なのか知らないとアプローチ方法のアドバイスも出来ないだろ？　年齢。所属、アンタなら部活動か。まあ、こっちも特定する気もねぇよ」
　出来るだけ年上の余裕を漂わせるように心がけながら、永良は軽いウィンクと共に答える。
　侠華は溶けかかったフローズンに手を伸ばそうとして、止める。良い兆候だと永良は思う。こう言った場面で飲み物に手を伸ばすのは、答えをはぐらかそうとしている証拠だ。
「ええと。相手のことはよく知ってるようで、よく知らない。けど、年上。あとは……」
「知ってるようで、知らないって？」
「いや、だって。仕事ん時以外はあんまり顔合わせないし」
「仕事？　まさか、アンタの惚れた相手って……」
　侠華は頷いた。
「うん。殺し屋（ヤングガン）」
　永良はこめかみを軽く押さえて呻いた。
　考えうる限りで最悪の答えだった。
「その人ね。とても綺麗なんだ。飾り気が無くて、何にも縛られることなく、自由に生きている。まるで獣みたいでさ」
「ケダモノを美しいたぁね……」
「そう？　素敵じゃない？　無理に着飾って、自分を偽らなくても生きていける」
　多分、彼女の言う殺し屋（ヤングガン）はそれしか生きる方法を知らないのだろう。およそ他人と合わせるということを考えられない。獣であることは何かしらを傷つけずに生きていられないことの証左に他ならない、社会病質者（ソシオパス）や精神病質者（サイコパス）と呼んでもいいだろう。自分が言えた義理でもない。
「神サンに相談しなくて良かったね、絶対、止められる」
「だから、エイラに相談したの。黙っててもらえる？」
「勿論、相棒の頼みだからね」
　相棒という言葉を聞いた瞬間、曇っていた彼女の表情がぱぁと華やいだ。やりづらいなと永良は思う。コロコロと感情が変わっていくものだから追い付くだけでも結構な労力になる。
「ありがと」
「でも、おススメはしないよ。有名な映画監督も言ってる。銃を持った人間は絶対に幸せになれない」
　そんなことは分かってる。侠華は続ける。
「でも、そういう人が幸せになろうとするのは悪いことなの？」
　屁理屈だ。露骨に話をすり替えにかかっている。そう言おうとして永良は返事に詰まった。
「分かるわけねえよ。でも、アタシらみたいな人間（ヤングガン）は長生きできない。遠からず泣くことになるのはアンタだ」
　永良は自分自身でも、言葉をセーブできなくなってきている気がした。まるで、自分に言い聞かせているような気分になってくる。
「それに、アンタは違う。アンタは、殺し屋（ヤングガン）じゃない」
「でも、私は殺し屋（ヤングガン）の相棒だ」
「でも、殺しはしてない。銃をいじくり回して、獲物のプロファイリングをして、最適な殺しのポイントを仲介する。でも、殺しはしていない」

意地の悪いことを言っている自覚はあった。これではまるで彼女が半人前と言っているようなものだ。実際のところ、彼女がいなければ殺し屋(ヤングガン)たちの負担は数倍になっているのだから。
けれども、一線を越えていないことは侠華にとって相当気にしていることらしかった。喋っている間も止めなかった食事をやめて、きゅっとスカートの裾を握って俯いた。
「殺し屋と付き合うなら、アンタも殺し屋になる(一線を越えるか)か、そうでなければ普通の人と付き合った方がいいよ。もちろん、自分の仕事を隠してね」
「やっぱ、そうなるよね……」
侠華は軽く太ももの上を探り、そのままゆらりと立ち上がった。
「ああ。帰るなら送るよ。神サンとこに話しに行かなきゃだし」
「いや、私。先に寄るとこあるからいいよ」
「でも、一つだけ聞いていい？」
永良は小さく頷いた。
「じゃあ、どうしてエイラは殺し屋(ヤングガン)と付き合うことを選ばなかったの？」
返事を待つことなく、侠華は店を出て行った。永良は彼女を追いかけようとして、止めた。
なぜ、彼女が言うように同業と付き合おうと考えなかったのだろうか。単純に業界が極端に狭い分その趣味の人が少ないだろうというのもあるだろう。
本当にそれだけなのだろうか。
投げかけられた問に、永良は答えることが出来ずにモヤモヤした感情を抱えたままファミレスを後にした。
永良はウォークマンをつけて、夜道を歩き出す。神のいるオフィスに行くまで数駅ほどある。永良は電車に乗らず、走ることにした。ライフルの入ったケースを、スクールバッグの底に仕込んでいるFN 5-7ピストルの重さも無視して走り出す。
永良は走ることが好きだった。食べることも好きだし、セックスも好きだ。そして、殺しも好きだ。
何も考えず、本能に身を任せることで、彼女は心の均衡を保っていた。侠華の言葉を借りるなら、獣のような生き方が好きだった。
弾む息と足をいかに速く回転させるか。走っている数十分は、それだけしか考えなかった。走っている間は、侠華のことも忘れていた。
侠華と問答をしていたこともあって、永良が事務所に戻ったのは九時を回ってのことだった。
指紋認証のドアをくぐり、オフィスに向かう。数台並んだデスク、その奥にでモニタを見て退屈そうに映画を見ている男がいた。赤い髪をオールバックに撫でつけ、眼鏡をかけた初老の男だった。電子タバコをくわえ、揚陸艇のアメリカ兵がドイツ軍の機銃掃射で死ぬシーンを延々と眺めている。
「神サン、ちっす」
「遅かったな」
神・侠亮は画面から目を放して永良を見る。彼も印象的な眼をしているなと思う。最も、妹が宝石ならば、彼はドブのように淀んでいるのだが。
「飯は食ったのか」
「ええ。妹サンと一緒に」
ほう。と神は笑う。その先を続けろとでも言うように。
「ああ、アイツなら野暮用を済ませてから帰るって」

神はゆっくりとソファから立ち上がり、永良へと近付いた。ズンとくぐもった音が響いて、彼の拳が永良の鳩尾に沈む。とっさに腹筋を締めたものの、衝撃を完全に殺しきることは出来ずに嗚咽を漏らす。
「ちょっ、いきなり……」
「ここまでヤッて分かんねぇとは大した度胸じゃねぇかアバズレ。まっ昼間っから猿みたいに盛って脳みそまで腐ったか！　何とか言ったらどうだ、ええ？　聞いてんのか腐れ饅頭！」
怒気をはらんだ言葉の波。おまけに髪を強引に掴んで揺さぶるものだから、永良は返事ができるはずもない。
舌打ちをして、神は彼女を開放する。咳き込みながら呼気を整える彼女に、神はタブレットの画像を見せつけた。
地面に飛び散った血と焼けたようなタイヤ痕。そして、薬莢だった。その薬莢には見覚えがある。
「.22口径LR……」
「殺しになれば頭は回るか」
「どこだ？」
「時間を考えりゃ、テメェがあのガキから眼ェ離してすぐだ」
神はそのままタブレットを操作しの地図アプリを映す。赤白青緑のカラーが重なって奇妙な色を作り出している。そのうち、赤色のみが重なる地点を映す。
「四獣連合。それがどんな組織なのかは知ってるだろ」
「ああ。暴力団にもなれねぇ腰抜け共の寄せ集め」
「ギリギリ合格だ。チビがバカをやらかしたのは、ここだ。VB団。朱雀をモチーフにしたチンピラどもだ。やってることはモデルの斡旋、違法スレスレのハーブ売買……意味は分かるな」
「シスコン野郎……まだ時間はあるってことだろ」
永良は舌打ちをする。モデルと言えば聞こえはいいが、実態は風俗や表ざたには出来ないような撮影のそれだ。
逆に、そこまでは売り物としての価値は保証されていることになる。時間が経てば薬漬けの廃人が出来上がる。
「何をすればいいか分かっているな」
神はデスクの下からキーを放り投げた、熊のキーホルダーをあしらってある。
「これ、アンタの趣味？」
「……妹の誕生日プレゼントだ」
いたずらっぽく笑う少女を見て、神はくすぐったそうに視線を逸らした。
「さんきゅ、大事にするぜ」
永良は自分のロッカーを蹴り開けた。
火薬と金属、オイルの匂いがたちこめる。
ブラウスの上からロスコ社製の黒いアサルトベストを纏う。ボディアーマーなどを悠長に着込んでいる余裕はない。
永良は自分が最も得意な兵器を手にすることにした。ファブリック・ナショナル社製5-7ピストル。スクールバッグに入れていたものを含めて計二挺。加えて5-7ピストルと同じ5.7mm弾を使用するカービン銃であるAR-57だ。レシーバーの上からマガジンを強引に押し込む。コッキングレバーを引っ張って初弾を装填する。マグプル社製のスリングを用いて、それを肩に軽く引っかける。
予備の弾倉をひっつかみ、アサルトベストのマグポーチに詰め込んでいく。

永良はドアを蹴り破らんばかりの勢いで飛び出した。車庫にある古めかしいボディのバイクに飛び乗った。タイガーエクスプローラーのXR。黒いボディが街灯に照らされて鈍く輝いている。
キーを差し込んで思い切り捻る。クラッチを握り、ぶんというエンジンの唸りがお腹の底まで響く感覚を確かめて一気に発進する。
走っている間、永良の頭の隅には常に侠華のことがちらついていた。それを心地よいとはとても思えなかった。
人と関わることは、獣であることを捨てることだった。
急カーブを身体を傾けて強引に曲がる。その度に銃やハーネスの金属がぶつかりあってガチャガチャと音を立てる。
テールライトが赤い軌跡を描いて、倉庫街に突き進む。
強引にブレーキをかけて、鍵を引き抜いて適当なところに横倒しにする。
バイクの異音に気が付いて、数人の男達が飛び出した。その手に握られているのは、安物の拳銃や、ナイフ程度だった。
たたん、たたん。と歯切れの良い連射音が響く。フルオートで銃弾をばらまくのではなく、数発おきに指を絞って小刻みな連射を繰り返す。数秒とかからぬ間に二人がぱたりと倒れる。残った一人はナイフを取り落とし逃げ去っていった。その背中さえも、容赦なく撃ち抜いて行く。
永良は倉庫をゆっくりと進む。ガンシューティングのように飛び出してくる敵を次々と射抜いて行く。弾切れになるとマガジンを模した薬莢受けを捨て、新たなマガジンを差し込んだ。
一人、二人、三人と死んでいく
たたん、たたん。たたたたたん。
容赦なく、弾丸が彼らの身を引き裂く
たたん。たたん。たんたんたん。
あえて手足のみを撃って、生かしていた一人。這いつくばって逃げようとしていた男の背中を踏みつけ、永良は問う。
「侠華はどこ」
「くたばれ……」
永良は軽く引き金を引いてその背中を砕いた。
「侠華はどこ！」
「B-16の倉庫だ！」
「ありがとう！」
永良は残りの弾丸をすべて使い果たした。男の背中が真っ赤に染まり、腕が千切れて返り血が彼女の頬を汚した。
弾切れになったAR-15を背中に回して、永良はホルスターから二挺の5-7ピストルを引き抜いた。
永良は地面を蹴って駆け出した。
B-16と書かれた倉庫。その扉をノックして地面に伏せる。一瞬遅れて無数の弾丸が頭上を通り抜けていった。
「……を……来い」
永良は地面をごろごろと転がって影に隠れる。
ばがん、とドアを蹴破って来た男の金的をめがけて、永良は鋭い蹴りを飛ばす。ごりっと柔らかいものを潰したような感覚を覚え微かに眉をひそめる。
地面を蹴って立ち上がってグリップの底で男の顎をすくい上げる。メキリと骨を砕ける感触を覚え、永良の口許に獰猛な笑みが浮かぶ。その高揚の間も、侠華の姿がちらついていた。
なぜ、自分はこんなところにいるのだろう。永良はふと考える。言ってしまえば彼女は他人だ

。なのに、どうしてここまで必死になるのだろう。
　自分は、彼女のことが必要なのだろうか。永良はふと思う。
　今、自分がやっていることはヒーローっぽい。例えば、ここでカッコよく彼女を救ったとして、映画のように結ばれるのだろうか。永良は思う。そのように都合のいいことを期待しても良いのだろうか？
　返事が返ってこないことに警戒したのか、足音が近づく。
　その数秒で、答えが出る筈もなかった。
　永良は、獣でいることを選んだ。
　彼女の思考から、侠華が消える。
　5-7ピストルのグリップを握り直し、永良は笑みを浮かべる。
　たんっと軽く地面を蹴って、ドアの正面に立つ人間に立て続けに銃撃を浴びせる。5.7mm弾は小型の銃弾ながら、高級なボディアーマーでさえ貫通する。人体のように柔らかな肉を切り裂くのは何よりも容易いことだった。
　先頭にいた一人の胸を貫き、逸れた弾丸が後ろにいたもう一人の足を貫いた。
　永良は倒れ込んだ戦闘の男を蹴りつけて跳躍。そのまま背後の敵に次々と銃弾を撃ちこむ。
　永良が着地した時には、倉庫は奇妙なほどに鎮まり返っていた。ごとん、と奥の事務室から物音が響いた。ホールドオープンした拳銃に弾倉を差し込んで、ゆっくりと永良は扉を開く。
　目の前にいたのは、どこにでもいるような男だった。所属の証であるように、真っ赤なシャツを着ている。足元には、微かに血が伝っている。多分、侠華がしでかしたのだろう。
　その隣には、裸姿の少女が椅子に縛りつけられている。口許にはボールギャグがはめこまれ、閉じることのできない口から涎が零れて彼女の肌を、下着を伝っていた。侠華だ。
　男は周囲を見渡し、自分の部下がすでに全滅していることに気が付いたようだった。震える手が侠華銃口を突きつけていた。
「う、うごくな！」
　永良は問答無用で引き金を絞った。反動が跳ね上がることに任せて、股間、腹部、胸、首、頭部と立て続けに銃弾を撃ちこんだ。動かなくなった男に、永良は自分の持つ弾丸をありったけ撃ちこんだ。
　永良は荒い息を整える。ひゅうひゅうという呼吸音だけが倉庫に響き渡っていた。永良はスマホのメッセージで、神に連絡を送る。
「侠華」
　永良はホルスターに銃をしまって、侠華の口からボールギャグを外した。表情はどこか虚ろで、返事は来なかった。
　永良は蛇口の前まで彼女を運び、その口に指を突っ込んだ。激しくえづいて指に生暖かい液体が零れる感触を感じた。
　シンクに黄色っぽい胃液と消化されていない食事が散らばった。それを何度か繰り返し、今度は侠華の口をゆすぎ、何度も水を飲ませる。恐らく飲まされたであろうドラッグを取り除いて洗浄するためだ。
　永良は、侠華を机の上にゆっくりと横たえた。
　呼気は吐かせる前よりはいくらか落ち着いており、穏やかな呼気が膨らみかけた胸を上下させている。微かに浮き出たあばらに、なだらかなくびれのあるウエスト、ふっくらとしたお尻。
　永良は生唾を呑み込んだ。
　ほんの一瞬、彼女は横たわる少女を犯す幻覚を見た。

乱暴に下着を剥ぎ、意識の無い彼女の白い身体に這わせる舌の感触をおぼえた。清潔なシャンプーと石鹸、消しきれなかった吐瀉物、そして生娘の匂いを嗅いだような気がした。
彼女の細い指が、自分の身体をまさぐってくる感触に酔った。
永良がゆっくりと少女の身体に手を伸ばす。
――多分、恋愛が下手なんだよ、私達。
永良は、獣だ。気ままに命を奪い、欲するままに性を満たし、自由に生きて来た。
永良は、人間だ。誰かと繋がることを欲したし、それ以上に自分の仕事や生れ付いた性によって繋がった相手と遠ざかることになることを恐れていた。
永良は、自分が獣にも、人間にもなれなかったことに気が付いた。血まみれの倉庫を飛び出した。
はっはっと、狼のように荒い呼吸を上げて永良は逃げ出す。
走っている間も、永良の脳裏には少女の姿がこびりついて離れることは無かった。永良は吠える。それは泣いているようにも、獣が吠えているようでもあった。
※※※
霞む視界の中、侠華は遠くなっていく彼女の姿を見ていた。永良は優しい人だ。多分、これからも普段通りに付き合っていくのだろう。けれど、自分に好意を向けてくることは、もう二度とないだろう。獣でありながら、人であることを何よりも求める。そんな彼女だからこそ、惹かれたというのに。
「ああ、もう。だから、恋愛下手って兄貴にバカにされるんだ」

あとがき
獣はいてものけものはいない。ほんとの愛はどこにある。

一般作品集

オーダーメイドをあなたに。

八木沢　優弥

「お疲れ様ですう。いかがでしたでしょうかあ。」
若い店員の、妙に間延びした鼻声がちくちくと耳にさわる。
「・・・もう一回ほかのやつ探してみるわ。」
店員の顔も見ずにさっき試着したワンピースを渡して、舞子はかつかつと早足でブラウスの棚に向かっていった。
ーこのコーナーはまだ探していない。もしかしたら私に似合う服が見つかるかもしれないー
そんな淡い期待を胸に抱きながら。
ブラウスのコーナーで、目星のデザインのものを２点。新発売でこのブランドの今回の目玉となっているレーススカートを１点。
本当はもっと試着したい服もあったが、試着室に持ち込めるのは３点までと決まっている。
どこか後ろ髪を引かれる思いで、舞子は試着室に向かっていった。
その様子をショウウィンドウの陰で、じっと見ていた人物がいるなんて露とも知らずに。

あれから数回にわたって試着してみたものの、結局自分に合う服は見つからなかった。
「高校までは、こんなことで悩まなかったのになあ・・・」
運動系の部活にこそ入っていなかったが、高校の頃はちょっと食べすぎたな、というくらい食べてもあまり太らなかった。
これがいわゆる、食べても太らない体質かしら？と自分でも得意になっていた。加えて顔も悪しからず、一部の男子からは「結構かわいいんじゃね？」と噂されるほどだった。
ささやかな自惚れに悪い転機が訪れたのは、高校３年の時だった。
「そうね。受験の頃だった。やたらおなかがすくし、食べたら
食べたで・・・」
太りだしたのよね。
口に出すといやな気持ちになるから、心の中でつぶやいた。
高２までは多少食べ過ぎても太らなかったのに、ちょっとカロリーの高いものを食べたらすぐ太るようになった。
周りからは、「受験はストレスたまるからねえ。でも大学に受かったらすぐに元の体型になるさ。」とか「一時的な自律神経の不調よ。気にすることないわ。」なんて言われたけど、結局。
「受験生活が２年も延長するし、どんなに頑張っても体型は戻らない。」
それに大学生活も、いやクラスの子たちだって―
舞子の中で、滾々と愚痴や不満があふれ出していた。

ずっとあこがれていた『フェミシーヌ・ガーデン』の服をゆっくり試着できるようになったというのに・・・
試着室に入り、自分の体型に合う服がないと思い知らされるたび、惨めな気持ちになるなんて。
長い回想が終わって、ふうっ・・・と深呼吸のようなため息をつくと、うしろから
「『フェミシーヌ』がお好きなのですか？」
突然話しかけられた。
ひいっ、と思わず飛び上がってしまった舞子を見て、
「驚かせて申し訳ありません。あなたが熱心に服を選んでいたのを見かけたもので・・・」
と、男が口ごもった。
重たそうな前髪が邪魔をして目元がよく見えない。だが、パンツスーツに包まれた体はきりりと引き締まっている。おそらく齢は若いほうだろう。
身長ときたら、彼の首元に舞子の頭が来るほどだ。
ちなみに舞子の身長は１７０弱である。
「私が何かお手伝いできることがあればと、こうして声をかけたわけなのです。」
テノールボイスを穏やかに響かせて男はそう言った。
当の舞子は
「・・・？はい？」
ただ戸惑うばかりである。
「いやいやいや。自分が好きで見ていただけで、手伝いも何もいりませんから。それに何なの？あなた。いきなり声かけてきて。しかも私がその店にいるとこまで見てたの？正直気持ち悪いったらないわ。」
ありったけの不信感をぶつけたが、男のほうは身じろぎもしない。
それどころか、にっこり笑って
「ええ。あなたがさっきのお店で、より服選びが楽しくなるよう、お力添えをしたいな、と思いまして。」
なんてことを言う。
「・・・私は少なくとも、『フェミシーヌ』で服を選んでいたときは、楽しいと思っていたわよ？」
「そうですか。これは失礼いたしました。」
男は一旦頭を下げた。だが、すぐに頭をもたげた。
「ですが、それならなぜ、『フェミシーヌ』の買い物袋がないのですか？あんなに熱心に選んでいたからには、一つくらいはあるかと思っていたのですが・・・」
「そ、そんなの、持ち合わせがなかったからよ！また今度、まとまったお金持って、あの店に行く予定だったんだから！」
「だったら、あなたが今持っているその黄色い袋の中身も、高そうなワインも食料品も買えない

はずですがねえ・・・」
くくく・・・と楽しげに男が笑って言う。
男の、人を食った様子がなんとも腹立たしいが、それ以上に自分のとってつけたような嘘が瞬時に見破られてしまったことが恥ずかしくて仕方なかった。
「・・・っ～～」
「おやおや、何もそんなに顔を真っ赤にしなくても・・・
ただ、ここはひとつ、だまされたと思ってついてきてくれませんかね？怒らせてしまったおわびもしたいことですし。」
肩に手を置かれ、引きずられるように舞子は男に連れられて行った・・・

ショッピングモールのある大通りを離れ、筋道を突き進んでいく。
ふいに舞子は不安になった。こんな男についていって大丈夫なのかしら・・・
「つきましたよ。」
顔を上げると、そこにはツタの絡まる、レンガで作った大きい立方体のような古めかしい家があった。
いかにもそれっぽい雰囲気が漂う。
やっぱり来なきゃよかった・・・
不安が後悔に移り変わろうとしたとき、男に中に入るよう促された。恐る恐る足を踏み入れると、
「え？えっ、なにこれ・・・」
外観とは裏腹に、どこかノスタルジックな明るい空間が広がっていた。
えんじ色のトルコ風のじゅうたんが床に敷いてあり、テーブル、イス、ソファ、たんす、あらゆる調度品がアンティーク調だ。
加えて、珍しいことに針や糸、針山、指ぬき、メジャー、全身用
半身用、男性用、女性用のトルソーやあらゆる模様のハギレや反物が、棚の中やテーブルの上などに所狭しと置かれていた。
舞子は思わず、小さいころ絵本で見た、魔女の仕立て屋の物語を思い出していた。
「散らかっていて申し訳ありません。すぐに片付けますから、
あちらのソファに座って待っていてくれませんか？」
スーツの上着を脱いで、男が部屋を片付けている間、舞子はじっくりと部屋を見渡した。最初に感じていた不安も後悔も、嘘のように消えてなくなっていた。
建物の高さと見上げた感じを考えると、ここは２階建てらしい。
この部屋の引き戸の隙間から、キッチンのような空間が見える。
それに、入ってきたときは気が付かなかったが、キャスター付きの大きな鏡があった。でもその鏡が普通と違うのは、大部分が割れていて、鏡の一部分だけしか残っていないことだ。
もはや原形をとどめてないわねーと思って見ていると
「どうかなさいましたか？」

男が目の前にいた。
「え、あ、ちょっと考え事をしていたの。
なんでもないわ。ごめんなさいね。」
いえいえ、お気になさらず、と言って男はソーサー付きのティーカップに入った紅茶を２人分置いた。
お盆には、二人分のアップルパイも用意されている。
しばらく、紅茶とアップルパイを楽しんだのち、舞子は気になっていたことを口にした。
「そういえば、手伝うって具体的にどういうことなの？それにあなたの名前は？」
「ああ、申し上げていませんでしたね。」
ティーカップをソーサーに置いて、男は話し始めた。
「私は鮫島と申します。ただ、申し訳ありませんが、
具体的なことを話す前に、あなたの身の上話を私に聞かせてくれませんか？見ただけではわからないこともありますから・・・」

「私は波多野　舞子。これからする話はずいぶんつまらない話になるけど・・・」
舞子は自らの心の内を吐き出した。こういう話は身近な人よりも、赤の他人のほうが話しやすいというのは不思議なものだ。
「昔は、服のことで悩んだことなんかなかったの。気に入った服はどんなものでも似合ってるように思えたし、着ているだけで楽しかった。」
お気に入りの服を着ては笑顔でいられたあの頃を思い出し、またやるせない気持ちに包まれる。
「でもね、受験シーズンが本格化する高校３年生の時かな、だんだん太りやすくなって体重が１０キロ近く変わった。」
鮫島は舞子の話をふむふむと真剣に聞いている。
こんなオチもない話をよくも聞いていられるわね・・・
舞子はあきれたようにため息をついた。
自虐が次第に加速する。
「おなかに肉がついちゃったし、何より太ももがね・・・
ワンピース着ればおなかが目立つし、レーススカートは太ももがつかえて入らない。フリーサイズと指定されているのにね、
もう笑うしかないわよ。」
言ってて自分が泣きそうになった。
それでも口は止まらなかった。
「『フェミシーヌ』だけじゃないわ。ほかのブランドやお店もそんな感じなの。たとえ着ることができたとしてもわかるのよ。
この服が自分に似合ってないってことがね。」
試着室でたった一人鏡に向かうとき、どこか違和感がするのだ。
この服は確かに素敵だしデザインも好みだ。だけど、それだけに服が浮いて見えるのだ。自分が

服を着ているのではなく、服に着られてる感じすらある。
「そしたらどんどん惨めな気持ちになって。ちょっと体重が落ちたからちょっとは似合うようになっているかもしれない。そう思ってあの店に赴くの。でも結果は同じ。まあそうよね。ちょっと体重が減ったとしてもウエストや体型がほとんど変わらないんじゃ意味がない。」
いろんなダイエットを試した。
エステにも通っている。それでも体重が減って筋肉量が上がっただけで、体型が高校の時のようになることはなかった。
「学校だって楽しくない。２浪して、望みの大学の法学部には受かったけれど、勉強は大変だし、クラスメイトとは話が合わない。最初に仲良くしてた子はいたけど、その子は私に挨拶すらしなくなったわ。前は自分から声かけてきたのに。」
大学生になれば、人間関係も勉強もだいぶ楽になる。そう言われてきたしそう信じてきたのに。
「高校では勉強もそこそこできたし、委員会活動もしてたし、友達もいたし、恋人も一応いたわ。それなりに楽しかったのに、志望校に入った途端、何もかもがうまくいかない・・・」
最後の台詞はもう嗚咽に近くなっていた。

「そうですか・・・それはつらかったですね。」
鮫島がつぶやいた。その言葉だけで幾分救われた気持ちになるくらい、優しい声だった。
「ところで、高校まで恋人だった彼は、波多野さんの大学にはいないのですか？」
「いないわ。だって・・・」
言いかけてやめた。いやなことを思い出してしまったのだ。
「なるほど・・・自分の好きな服が似合わなくなり、プライベートの時間も楽しくない。学校の授業も人間関係も苦しい・・・自分が落ち着ける場所がないわけですね・・・」
「そうね・・・」
「ではまず、プライベートの時間から楽しめるようにしましょう。そこからひょっとして学校も楽しくなるかもしれませんから。」
「そんなこと言ったって。ここ、見たところ仕立て屋のようだけど、あなたがオーダーメイドで洋服でも作ってくれるのかしら？」
「いいや。それじゃあ他の服を楽しめないでしょう？
私が波多野さんに差し上げたいものは、どんな服でもあなたに似合うようにしてくれるもの
です。」
「ええっ？つまり、『フェミシーヌ』の服も他のブランドの服も
似合うようになるってこと？」
「左様でございます。」
見たところからかってるわけではなさそうだし、むしろ真剣味を感じる。だが舞子は鮫島のいうことがまだ半信半疑だった。
「じゃあ、お願いしてみようかしら。採寸は必要かしら？」だめでもともと、戯言のように注文した。

「ありがとうございます。お願いします」鮫島は深々と頭を下げた。
採寸を一通り終えると、鮫島はこう言った。
「今から１週間後には送れると思います。それまでどうか心待ちにしててください」
心待ちにしないで待ってるわ、と心の中でつぶやいて舞子はレンガの家を出て行った。
外はすっかり日が落ちて暗くなっていた。

洋服の買い物も楽しくなくなってからは、好きなバンドのグッズを集めたり、バローロのような高いワインを飲み、チーズを食べることが生きがいになっていた。
バンドのグッズも安くはないし、夜にワインとチーズなんて太る一方だということは頭ではわかっていた。しかしこれをやめてしまったら生きる楽しみがなにもなくなってしまうような気がして、浪費癖とワインを断つことができずにいた。
そんな鬱々とした日々を過ごしているうちに荷物が届いた。あの日から８日後だった。宅配の人から荷物を受け取っていた時には自分が何を注文したのかすっかり忘れていたくらいだ。
「一体何をくれるというの・・・」
箱は意外に軽かった。
中を開けてみると、なかなかおしゃれなデザインのボディースーツとコルセットが出てきた。
全体的に黒っぽいのだが、首から胸元にかけて薄くて細かい網目の布がかけてある。鎖骨がさりげなく見えるつくりになっているのだ。それでいて胸元から下腹部まではしっかりと体のラインを引き締める固い生地でできている。胸元の上のほうには
ひらっとした布飾りがついていて、まるで大人の女性が身に着けるドレープドレスのようだ。コルセットも同じ生地で、バラの花びらのコラージュが施されている。
へえ、鮫島さんもなかなかやるじゃないの、と感心してコルセットとボディースーツを眺めていたら、足元に紙切れが落ちていた。
拾ってみてみると、手書きでこんなことが書かれていた。
一送るのが遅くなって申し訳ございません。
　これは矯正下着です。もし件のブランドショップに行く際には、上下セットでこれを着て試着なさいませ。
　また、お洋服を購入された後も、これを着けてからお洋服を着てお出かけすることをお勧めします。
　なお、これはサービスですので、代金はいただきません一
「ふうん・・・殊勝なことを言うわね。これが怒らせたお詫び、ってやつかしら。でも喜ぶのはまだ早いわ。鮫島さんのいうとおり、まずは『フェミシーヌ』に行ってみようじゃないの・・・」
ボディースーツとコルセットはぴったり体に合っていた。
「へえ、すごい・・・体のラインも絞れてて、太ももがきゅっとしまってて、まるで私じゃないみたい・・・」
ボディースーツとコルセットを着るだけで、ここまで理想に近

いプロポーションに近づけたのは、はじめてだった。
舞子は意気揚々とショッピングモールへ出かけて行った。

「うわあっ・・・」
思わず感嘆の声を漏らしてしまった。
今、舞子は『フェミシーヌ・ガーデン』の試着室でただ一人、鏡と向き合っている。今着ているのは、フリルの黒いリボンをあしらえたオフホワイトのブラウスと、ネイビーのレーススカートだ。先日試着し、似合わないとあきらめて買うのをやめたものだ。
それがなんということだ。
レーススカートに太ももがつかえるどころか、ボディースーツの効果により腰と下腹が引き締まり、きれいなＡラインを描いている。ブラウスもしっかりボタンがしまり、おなかが目立つこともない。胸元のリボンもどこか華やいで見える。
続いて、ワンピースにも挑戦してみる。下腹のところでボリュームが広がることも、太ももが悪目立ちすることもなかった。
もともと首元の空いたワンピースだったのだが、それがボディースーツの、特に鎖骨を覆うストッキング生地と合わさることで、ひざ上丈の黒いシックなワンピースがさらに上品に映えるのだ。
「お疲れ様ですう。いかがでしたでしょうかあ。」
いつもならどこか癪に障る店員の鼻声も気にならなかった。
「とてもよかったわ。この３点全部買います！」
あ、ありがとうございますう、と数オクターブ高くなった店員の声に、舞子はさらに気分を良くした。
この日の買い物は、レーススカートとブラウス、ワンピース、
さらにこの店オリジナルデザインのストッキングと革靴とあわせて１万６千ほどしたのだが、舞子にとってはこれまでにない、充実した買い物になったのだった・・・

「ありがとう、鮫島さん！」
一人で暮らすアパートに戻った舞子は、帰ってすぐさま、鮫島に電話をかけていた。手書きの紙切れには電話番号も書いてあった。
スマホを持つ手もうきうきしているのが自分でもわかる。
「その様子ですと、『フェミシーヌ・ガーデン』でよいお買い物ができたようですね。」
「そうなのよ！鮫島さんのいうとおり、あの店で服を選ぶのが楽しくなったわ！」
それはすごい、と鮫島も嬉しそうだ。
「ここまで満足していただけたのなら、私としても喜ばしい限りでございます。そうそうあの矯正下着は、お出かけの時は必ずつけていただくと嬉しいのですが・・・実はあれ、体型を引き締めるだけじゃなく、最終的には矯正下着がなくとも理想のプロポーションを作るように設計してあるのですよ。」

「それほんと？すごいじゃない！もちろんよ！
いわれなくても必ず外に出るときはつけていくわ！」
「くくくっ・・・そうですか・・・」
「あ、そうだ。実はもう一着、作ってもらおうと思っているの！あのボディースーツ！コルセットも一緒にね！今度はちゃんとお代も払うから。」
「いやあ、ここまで信用してもらえるとは・・・わかりました。
もう一着、同じデザインのボディースーツを作りますから、今度は波多野さんのほうから来ていただけませんか・・・」

舞子は改めて驚いた。
試着室にいるときには気が付かなかったが、あのボディースーツとコルセットは光に当たるとあでやかに輝くのだ。
「へえ・・・ほんとよく考えてあるのねえ。この下着。
スワロフスキービーズあたりを使っているのかしら・・・」
うっとりとボディースーツとコルセットを眺めながら、舞子は眠りについた。

次の日は大学だった。
昨日とは裏腹に、舞子はどこか憂鬱な気分で席についていた。
クラスメイトがなんだか自分に対して感じが悪いのだ。
無視される、とかいうはっきりしたものではないのだが、
「おはよう」と、たまたま目が合ったクラスの女子に声をかけたらば、
「・・・？」と怪訝な顔をされる。そして、
「うー・・・あー・・・ごめん！波多野さんだった！
おはよっ」と返されはするのだが、誰もが最初で言葉に詰まったり、思い出そうと頭を抱えたりする。
まるで自分の名前が思い出せないかのように。
ひどいときには、そばにいる人に聞いたり、授業中にまわる出席簿の名前を見てやっと舞子の名前を思い出した者までいた。
今は６月の半ば。いくら１年生とはいえ、しかも男子数人とかならまだしも、比較的会話をする女子にまで名前を忘れられるのは案外訳が分からない。
結局、クラスメイト全員に名前を忘れられているのが明らかになった。
いや、正確にはただ一人
「やあやあ、おはよう！波多野さんっ、今日はなんか元気ないねえ、どうしたん？」とすんなり自分の名前を言った女子がいたのだが。
ーこの子、妙になれなれしいのよねえ・・・ー
舞子にとって、やや苦手なタイプのクラスメイトだった。
烏森茜といって、クラスでは癒し系だの、天然系だの、不思議ちゃんだの言われてその人懐こい

性格が多くの人を引きつけている女子だ。いつも笑顔で明るくいられるのはいいことなのかもしれないが、舞子にはそれがどこか幼稚に見えていた。
ーよりにもよって、クラスの子から妙に嫌がらせじみたことをされてる時にこの子につかまるなんてー
「ああ、烏森さん？私は大丈夫よ。ただ梅雨で天気も悪いし、ちょっとだるかっただけだから。」
「んー、そうなん？だったらいいんだけどさっ。
今日のコーディネートとは裏腹に顔色悪そうだったからさ。ちょっと気になってたの。」
いやー、このブラウスとレーススカートって『フェミシーヌ』だよねえ、やっぱ顔がきれいだからこういうエレガントな服がよく似合っててうらやましいなあ、波多野さんは。などと舞子の周りをちょこまかと動きながら茜は本気ともお世辞とも、区別がつかないことをさらりと言ってのける。
「普段からこういう服を着てくればいいのに。」
「烏森さんみたいにスレンダーな体してないからさ、今まではあまりこのブランドの服はつけたくなかったのよ。」
「でも、『フェミシーヌ』が嫌いなわけではないんでしょう？」
現に今はバッチリコーディネートがきまってるしねっ、と茜が見上げるように舞子の目をじっと見る。
「好きと似合うは別物よ。」
そーかなあ・・？と、小鳥のように茜が首をかしげる。
「じゃあ、今日『フェミシーヌ』を着てきたってことは、波多野さんが、このブラウスとスカートにピンと来たってことだよね？この服なら私にぴったりだぞっ、て。」
「正確には下着を変えたのよ。そしたら『フェミシーヌ』だけじゃなくて、ほかのブランドも似合うようになったの。」
茜のことは今でもちょっと苦手意識があるものの、あまりにも手放しに褒められているうちに舞子は茜としゃべることが次第に楽しくなっていた。
「へえっ！それってマジなの？ほらほら、コマーシャルでやってるじゃん、下着が変わればカラダも変わるって！あれってほんとなんだ！」
下着のブランドどこなの？コマーシャルのエンジェルファーム？ミミック？それとも・・・と次々に有名な下着ブランドの名前を列挙する茜を何とか制止して舞子は鮫島の話をはじめた。
「有名どころのブランドじゃないんだけど、鮫島さんっていう・・・そうねえ、個人で仕立て屋というか、デザイナーをしてる人が作ってくれたのよ。しかもタダで」
「ふうん、そんなことってあるんだ。お嬢さん、あなたにふさわしい服を私に作らせてください、って謎の紳士に麗しき乙女が声をかけられる、なんてシチュエーションが本当に！」
「烏森さんってほんと、想像力が豊かよね・・・」
あきれる舞子に、えへ、それはよく言われる。と茜が天然な返答をした。
「その人の名刺もらったりしたの？下の名前が知りたい！」

そう言われてはじめて気が付いた。そういえば下の名前を聞いていない・・・
「あっ・・・ごめんなさい、名刺とかはもらってないのよ。
私もいつも鮫島さんってしか呼んでなくて。」
「そっかあ・・・じゃあしょうがないね。今度は下の名前も聞いてきてほしいなっ。」
「下着作ってもらいたいの？烏森さんは必要ないでしょう。」
「でもどんな下着作るか興味あるんだもの。」
あっ、そうだ。話があるんだけどさ、と茜が切り出した。
「２０日の午前中って空いてる？あo・・・賀茂先生の予約が取れたから、一緒に行かない？」
「カモノ先生って・・・あの有名な？」
賀茂　葵。舞子たちの世代から特に熱い支持を集めている評判の占い師だった。手相、占星術、オーラ、タロット・・・
あらゆる占いをこなすエキスパートで、最近雑誌で紹介されているのを舞子も見たことがあった。目鼻立ちの整った、きれいな先生だったことが記憶に新しい。
２０日の午後は鮫島から注文した下着を受け取る予定になっていたが、午前中なら空きがある。
「２０日の午前中なら空いてるわ。賀茂先生は私も会ってみたかったの。」
「じゃあ、決まりだねっ！」
その時はちゃんと『フェミシーヌ』とサメジマさんの下着を着てくるんだよーと言って茜は去っていった。

あれから１０日後。２０日の午前１０時。しかし占いに時間がかかることも考えて鮫島には賀茂先生のところへ行くから遅れるかもしれないと電話口で言っておいた。
ここ１０日間は散々だった。クラスメイトのほぼ全員が舞子の名前を思い出すのに時間がかかるようになり、ついには教授までもが舞子が一昨日レポートを出しに来たにもかかわらず、波多野君、課題はまだなのかね。と聞いてくる始末だった。
結局教授の机に舞子のレポートがあるのを確認した教授が謝ったことで誤解は解けたのだが・・・
なんかおかしい。みんなが私のことを忘れ始めてるみたい・・・
「波多野さん？黙りこくってどうしたの？」
唯一舞子の名前をすんなりいえる茜が顔を覗き込んでいた。
「いいえ、なんでもないわ・・・行きましょうか。」
舞子と茜は神社裏のマンションの中に入っていった。

「葵ちゃーん！波多野さん連れてきたよっ」
「茜・・・人前で葵ちゃんはやめて」
茜と葵はなんと知り合いらしく、たわいもなくおしゃべりを始めている。その横で舞子は風通しの良いモダンな空間にしみじみと趣を感じていた。
ー何となく落ちつくわ・・・ちょっとゆっくりしたくなっちゃったー

「ちょっとあなた」
声のする方を振り返ると、目と鼻の先に葵の顔があった。
「少し話したいことがあるの。奥の部屋にきてほしい。」

「この部屋では落ち着いて仕事ができるの。お客さんと話すときもね。」
案内された奥の部屋は、テーブルの上にタロットカードと水晶の振り子が入った透明なケースが置かれている以外は、ほとんど物がなかった。
壁はコバルトブルーに藍色を混ぜたような、海のような色をしている。
「そ、その・・・話って何でしょうか？それに烏森さんが予約をしていたはずじゃあ・・・」
「それは大丈夫。あの子は私のいとこなの。予約というよりも私に会わせたい子がいるからってことで今日約束をしていたの。」
「烏森さんが、わたしをあなたに、ってことですか？それは・・・」
「あなた、ここ最近おかしなことが起こってない？例えば、名前を忘れられる、とか。」
・・・まさにそうだ。なんか変だとは思っていたけど・・・
「そうです。烏森さん以外のクラスメイト全員が私の名前を思い出せないってことがありました。しかも一日前に直接会って宿題を出したのに、教授が私が宿題を出したこと、すっかり忘れていたんです。」
「・・・なるほど。まさに空気人間の仕業ね・・・」

空気人間・・・？
「なんですか、それ。普通の人間とは違うんですか？」
「見た目は普通の人間と変わらない。普通の人間が生きたまま空気人間になるやり方もたくさんあるしね。」
「じゃあ何が違うのですか？」
「他人の記憶に残らなくなるの。普通に姿が見えて、普通に会話することはできるけど、空気人間を見たり会話したりした人は、数秒後にはすっかりその人のことを忘れてしまうの。家族や友達ですらね。」
「・・・！」
「一番多いのが鏡を使ったやり方。呪術の効果がどうやって出るようになったのかまだわかっていないんだけど・・・
案外すんなりとなれてしまうものなのよ、空気人間って。」
「なんで空気人間になりたがる人がいるんですか？家族にも忘れられてしまったら、暮らしにくいじゃないですか」
「ただ人から忘れられてしまうだけで、姿も見えるし会話もできる。空気人間になってしまったとしても普通に買い物したり、お金を稼いだり、娯楽を楽しんだりできる。しがらみもなく、自分の思うままに日々を過ごせるからってところが多いわね・・・」
なるほど、何かしくじってしまったとしても人の記憶に残らないし、下手すればお金を払わずに

商品をとったり、乗り物に乗ったりしても足がつかない。それに誰の記憶にも残らないならどこへだって行けるし人間関係に煩わされずに自由に生きられる・・・
「波多野さん？」
呼びかけられてハッとした。
「あ、ごめんなさい。」
「いいわ。大事なのはここからなんだけど、空気人間はね、普通の人と違って多少の呪術がつかえるようになるし、特定の相手を空気人間にすることができるの。」
「じゃあさっき、空気人間の仕業だといったのは・・・」
「そういうことね。周りの人に名前や過去の言動が忘れられ始めるのはその兆候だといっていい。」
「烏森さんはそうでもなかったのですが・・・」
「あの子は特殊なの。いろいろとね」
さてと、と言って葵は話を切ると
「特定の人物を空気人間にする一番確実な方法は、その人が身に着けるものに呪いをかけたうえで、自分が空気人間になった時に使ったものをまいておく方法なの。あなた最近なにか体に身に着けるものを人にあげたりした？」
「いいえ」
「あるいは逆に、何かもらったものはあるかしら？」
「あ・・・」
オーダーメイドの矯正下着。
真相を知った時、全身から血の気が引いていくのが分かった

どうしよう。まさか鮫島さんが空気人間？しかも私を・・・一体なぜ？
葵の部屋を出た後も恐怖心は収まらなかった。今日は鮫島さんのとこ行くのやめよう、そうしよう。そう念じながら葵がくれた青いバラのプリザーブドフラワーのペンダントを握りしめていた。空気人間の術から守ってくれるというお守りを。
マンションを出て神社を離れてやっと葵は一息ついた。
その瞬間。
「ぐっ・・・ああっ・・・」
急に呼吸困難に襲われた。全身がしびれて動けない。矯正下着が体を強く締め付けていた。
「ごめんよ舞ちゃん。賀茂　葵のところへ行くって言ってたから、こうするしかなくて」
目の前には鮫島がいた。鮫島がうずくまる舞子の前にしゃがみ込み、目が合った。そこで舞子はハッと気づいた。
「ひこ・・いち・・・」

「思い出してくれたんだね。」
鮫島が恍惚の笑みを浮かべる。

「術がかからないと、俺の記憶がよみがえらないからねえ・・・」
ひこいち。高校時代、舞子は鮫島のことをそう呼んでいた。
本名は一彦と書いてかずひこと読むのだが、名前の漢字を逆転させて舞子があだ名にしたのだ。図書館で同じ本を取りそうになったのがきっかけだった。そこから本の話で盛り上がり、放課後ブックカフェや町の図書館で待ち合わせることが多くなった。こうして楽しい話も悩み事も共有するようになったある日のこと。
「舞ちゃん。実は俺・・・舞ちゃんのこと・・・」
ずっと好きだったといわれた。しかしその時サッカー部の副キャプテンだった曳地からの告白の返事をしたところだったのだ。鮫島とは仲が良かった。だが、舞子は曳地と恋人になりたかった。だから
「・・・ごめん。私、曳地君と付き合うことになったの。」
それだけ言って鮫島を振り向くこともせず走り出した。
それ以来、舞子が鮫島と会うことはなかったー

「悔しかったなあ。よりによってあんな女たらしに舞ちゃんをとられるんだから。」
鮫島が舞子の肩を抱いて耳元で囁いた。
当たっていた。高校３年まで曳地と付き合っていたのだが
曳地は現役で医学部に通った後、大学で新しい彼女を作り、
メールで別れの言葉を告げた。他に好きな人ができた、舞子とはもう別れたい、と。
「舞ちゃんと離れるなんて嫌だ。そう思ってたらたまたま空気人間になる方法をネットで知ってね。」
鏡を倒して自分の姿を映し出し、自分の血で鏡に十字架の印をつける。鏡に映った自分自身を金づちで割っていき、鏡の破片を粉にする。それを頭に振りかける・・・
「じいちゃんとばあちゃんがもともと仕立て屋をやってた部屋があの時案内した部屋で、そこで俺は空気人間になったの。
そしたら不思議といろんな術がつかえるようになってね、材料さえあれば思い浮かんだものを作れるようになったのさ」
『フェミシーヌ』で舞ちゃんを見かけたとき、チャンスだと思ったよ。舞ちゃんを空気人間にして、俺だけのものにできるーって。

「じ、じゃあ・・・ボディースーツのキラキラしたものは・・・」
「俺が空気人間になるときに使った鏡さ。」
くくく・・・と鮫島が笑っている。
「空気人間が普通の人間と接してもまったく記憶に残らないけど、空気人間同士なら忘れられることはないー普通に一緒に暮らせるんだ。ねえ舞ちゃん、あの家で俺と一緒に暮らさない？」
ほら、恋人同士、同棲するみたいにさあー
いつもより、低い穏やかな声がさらに優しく響いているのがかえって恐ろしかった。

「いやだ！そ、れより、この苦しいの・・・どうに・・か・・して・・よ・・」
「苦しいのは術じゃない。こいつのせいさ。」
鮫島が指さす先には、舞子が握っているペンダントがあった。
「それがどうやら、俺がかけた術に対抗してるみたいなんだ。
そのせいで術の仕上げができないんだよ。」
まったく忌々しい―鮫島はそう吐き捨てた。
「そのペンダントを持っていれば最後まで術がかかることなく空気人間にならずに済むかもしれない―それまでずっと苦しみ続けることにはなるけどね」
「・・つまり・・何が・・・言いたい・・・の？」
「そのペンダントを投げ捨てな。さまなくばこのまま延々と下着に締め付けられることになる。ペンダントさえなければ術の仕上げは一瞬で終わって、舞ちゃんも楽になる。」
「でも、そしたら私、空気人間・・に・・・」
「そういうことになるねえ」
舞子の嘘を見破った時の、あの人を食ったような顔がそこにあった。
「でもさ、舞ちゃんが高校を出てから大学まで過ごしてきた時間を振り返ってごらんよ。何かかけがえのないものは得られたかい？そこに自分の居場所や生きがいがあると思える？」
これといって面白みのない授業。クラスの女子と無理やり話を合わせるか、一人で暇をつぶすだけのひたすら苦痛な休み時間。せっかくの休暇も何ら趣味もなく、お気に入りの服が買えなくなってからは外に出るのもつまらない―
舞子の思い描く日常には、一緒にいて安らげる人も楽しいイベントも、身も心も充実させるものも何一つなかった。
ボディースーツとコルセットがあるにしても、楽しいと思えたのは洋服を選んでいる間だけだった。
「・・・もともとこの場所には、私の居場所なんてなかったのかもしれないわ・・・」
そうつぶやいて、舞子はペンダントを握りしめ、空に向かって放り投げた。
ペンダントはきれいな放物線を描き、そして見えなくなった。
舞子が鮫島の腕の中へなだれ込む。
鮫島と目が合った。その目は実にやさしく、舞子のすべてを受け入れるような包容力に満ちていた。
舞子の両腕が鮫島の首元に回ったとたん、舞子の体はやわらかな光に包まれ、光とともにはじけていった―

つづく

死んでくれてありがとう　　アイスティー

　親が離婚した。原因はこれだというものはなく、また前から予想できたものであった。離婚の直前は喧嘩すら起らなかったが、口喧嘩はよく聞こえていた。かといっていつも言い争っていたわけではなく、僕が学校のテストで１００点を取ってきた日は３人で回転寿司を楽しそうに食べたのを覚えている。ひょっとしたら僕の行動次第では離婚しなかったかもしれない。ともあれ現実に離婚は成立してしまった。
　僕としては泣いたし、できるのなら３人で暮らしていたい。ただ、離婚が決まったと聞かされたとき、これで親の怒鳴り声を聞かずに済むと思ってしまった部分もあった。今からしてみれば３人とも疲れていたのだろう。結果は悪くても決着したことに安堵したのは悪いことではない。
　中学生の僕はどうすればよかったのだろうと考える。離婚しないでほしいと素直に言えばよかったのだろうか。それとも牧師よろしく人はみな欠点があります、それに目くじらを立てるのではなく補ってあげるべきなのですと諭せばよかった？　流石に無理がありそうだ。いつかのテレビで見たが近年は離婚率が上がってきているそうだ。そうゆう時代なのかもしれない。離婚はそう珍しいことじゃない、しょうがなかったのだ。

　離婚が成立した後、母が家を出た。元々父方の夫婦が住んでいた家であり、僕は転校したり新天地で生活するよりはと家に残った。２人での生活が始まった。当初の生活は思ったり苦にならなかった。もちろん苦労したが、あの今日は喧嘩が起こりませんようにと祈りながら過ごしていた生活に比べれば充実していた。あまりやらなかった家事を手伝うようになり、父の負担を考えるようになった。家の雰囲気はかつての穏やかさになっていた。これを機に僕は変わっていくんだ、離婚は悪いことばかりじゃないなんて思ってすらいた。
　母がいなくなった後の生活は当初はうまく運んでいた。僕は母がいなくなった分真面目になり、父とも関係がよくなった。学校だって一生懸命に勉強したし、その姿を担任に褒められたりした。最初はよかったのだ。
　母のいない生活に寂しさはどうしてもあった。辛かった。もし母がいてくれたら、もう一度やり直せないかと思った。この思いを学校で打ち明けられないことがさらに悲しかった。僕に限らないことだが、人は自分に起きた不幸は自分で抱えて生きていかなくてはいけない。辛いから労わってほしい、配慮してほしいなど言えない。言えないけど察してほしい、そんな自分よがりな気持ちを強く持った。
　そんな気持ちを持った中、学校で生活していくと前には思わなかった感情があった。うまく表現できないけれども、よそ見をしてぶつかられたときや話しかけて聞いてもらえなかったとき、無理に仕事を押し付けられたときにその感情は出てきた。
　さらに母、お母さん、という言葉が気になるようになった。母が褒めてくれた、母が優しくしてくれた、母がうざい、母がムカつく、母がうるさい…。それらの言葉は僕を不快にした。

最後には他人の笑い声に苛立つようになった。自分より優秀な人に嫉妬を覚えるようなった。姑息な奴には侮蔑と怒りを感じた。なぜそんなに楽しそうに笑うんだ、こっちは辛いのに、人のこと考えているのか、うるさい、死ね、偉そうに…。学校の中では笑わないようになった。

ある日先生に呼ばれ、困っていることや悩んでいることはないかと聞かれた。僕はいえ、と感情のこもっていない声で答えすぐその場を離れた。指に光った結婚指輪が目についた。お前に何がわかるんだ、善意のはずの申し出が僕を憐れんでいるように感じて不快だった。そこから友達や周りの人と距離を置くようになり、相手も話しかけてこなくなった。僕にはそれが阻害されたように感じられた。少しはなさないだけでこれか、友達じゃなかったのか、と。最初思っていた前向きな気持ちは消え、暗い感情が頭を埋め尽くした。

離婚を機に僕は変わってしまった。離婚のせいで僕は短期になったし笑わなくなった。今では母も父も恨めしい。なんで離婚したのか、離婚するくらいなら産むんじゃない、僕のことも考えろ…。クラスの連中にも怒りを感じた。お前らばかり楽しそうにするな、どうして不幸じゃないんだ、と。どうして僕ばかり、僕は悪くないのに、他に不幸になるべき奴はたくさんいるのに…。どうして僕ばかり、どうして、どうして…。

不幸な自分こそ誰よりも幸福になるべきだなどという思い上がりを意識するようになった。その気持ちから他人を見下すようにもなった。クラスメイトも僕の考えていることがだいたむいわかるのだろう、心配するそぶりなど全く見せなかったし、むしろ軽蔑する目を向けた。

家でも学校でも無口になったある日、クラスメイトの生徒が死んだ。事故死だそうだ。クラスで人気者だった人でＨＲで聞かされた際には担任含め大勢の人が泣いた。可哀そうに、まだ十代でこれからの未来があったのに、早すぎる、そんな言葉が僕の頭の中にも浮かんできた。僕も悲しかったかもしれない。だが、それ以上にうれしさを感じた。自分より不幸な人がいた、自分はまだ幸せなほうなのだと気づけたのだ。その瞬間、僕は救われた気持ちがした。僕は親の離婚などという小さなことで悩んでいた。死ぬということに比べたらなんと小さなことだろう。ありがとう、死んだクラスメイトに向かって僕は心の中で礼を言った。

そうだったのだ。僕は幸せなのだ。よくよく目を向けてみれば紛争で死んでいく人達、事件に巻き込まれ殺される人達、食べるものがなく餓死で死んでいく人達…。僕より不幸な人はこんなにもたくさんいるのだ！　死んだ人のこれからできたかもしれなかったこと、やり残したことを思うと悲しくて、それを自分ができると思うとそれ以上にうれしい。それにしてもあのクラスメイトの死を告げられた時の皆の表情、泣き声、死を惜しむ言葉は気持ちがよかった。

僕はあなた達の存在を忘れずに生きていきます。だって僕は幸福なのだから。

あとがき

大学に入って初めて書きました。これは高校から感じていたことのなのですがどうしても物語が暗いものになってしまいます。とゆうか主人公が自分と似た感じになってしまう。みんなこんなもんなんですかね。それとも多くの本を読めば変わるのか。これから精進していきたいです。よろしくお願いします。

穢れた水仙

十文字

『白昼の惨劇、市街地に響く銃声
　十三日正午頃、風芽市の閑静な住宅街の一角で突如発砲音が響いた。近くを巡回中だった警官が現場に駆けつけると頭から血を流して倒れている男性と拳銃を持った二十代の青年を発見し、青年をその場で拘束、殺人罪の現行犯で逮捕した。
　殺害された男性と青年は共に暴力団構成員の一員であり、数ヶ月前から続く派閥争いで対立していたとのことだ。
　なお、青年の所持していた拳銃の出所は未だ不明であり、警察によるさらなる調査が必要である――』

　赤で大きく『ボツ』と書かれた紙面の文字を見ながら、俺は大きくため息をついた。編集長によると、この手の暴力団同士の抗争による殺人事件は既に何件か起こっており、記事にしても大きな売り上げは見込めないそうだ。
　せっかくいいネタが入ったと思ったのに……
　そんなことを思いながら、ボツになった記事をシュレッダーに放り込んだ時、ポケットに入れていたスマホが振動した。見ると、いとこの家で家政婦として働いている深海心愛さんから着信が入っていた。
　珍しいなと思いつつ、通話のボタンを押して電話に出る。
「もしもし、心愛さん？　電話をかけてくるなんて珍し――」
「き、城戸さん……旦那様が……旦那様が――」
　続けられた彼女の言葉に俺の周りの時間が一瞬止まったように感じた。

　緊急の連絡を受けた俺はすぐに風芽市中央病院に向かった。
　病院に到着し、受付で「鳴海敦也の親族だ」と伝えると看護婦の一人が病室までの案内をしてくれた。
　病室の前まで行くと部屋の外に心愛さんの姿が見えた。顔色は悪く、いつもの溌剌とした雰囲気は微塵もない。
「心愛さん、大丈夫ですか？」
「あっ、城戸さん……来てくれたんですね」
「ええ、敦也伯父さんが殺されたって聞いて、いてもたってもいられなかったので」
　敦也伯父さんはとても気さくな人で小さい頃の俺はよく懐いていてよく家に遊びに行ったものだ。今でこそ会う機会は減ったが、この辺りで会える近い親戚は伯父さんぐらいしかいなかった。

「この中ですか？」
　俺が目の前の病室を指さすと心愛さんはゆっくりと頷いた。
「そうです。でも城戸さん、あんまり見ない方がいいと思います……その、ひどい状態なので」
それを聞いた俺は、一度大きく深呼吸をして覚悟を決めて病室の扉を開けた。

　病室の中にはベッドが一つだけ置かれており、その周りに見慣れない男が一人と敦也伯父さんの一人娘、鳴海伊央菜の姿があった。
「城戸冬夜さんですね、警視庁捜査一課の照井です」
　部屋に入るなり、見慣れない男がそう言って警察手帳を見せた。俺が「そうです」と応えると照井刑事は少し憂い表情を見せ、頭を下げた。
「今回の件は誠にお悔やみ申し上げます。我々も犯人逮捕に向け全力をあげますので……」
　その時だった。突然後ろの扉が開き、また見知らぬ男が入ってきた。その男は照井刑事に駆け寄ると何かを耳打ちした。その瞬間、照井刑事の表情が鋭くなった。
「すみませんが緊急の呼び出しがかかったので、これで失礼させていただきます。また後日、お話を聞かせていただく場合がありますので、その時はよろしくお願いします」
　照井刑事は早口でそう告げると先ほど来た男を引き連れ、足早に病室を出て行った。
「緊急の呼び出しって……被疑者でも見つかったのか？」
「そうみたいだよ、『被疑者を確保したという連絡が入った』って言ってたし」
「……相変わらず耳がいいな、伊央菜」
　そう言いながら振り返った俺は、思わず自分の目を疑った。
伊央菜はベッドに身を乗り出し、しきりに伯父さんの頭に手を当てていた。
「おいおい、何やってんだ伊央菜！」
　駆け寄ってそう訊いてみたが、伊央菜は知らん顔で伯父さんの後頭部を確かめるように触り「やっぱり」と小さく呟いた。
「やっぱりって、何が？」
「ここに打撲痕、殴られた痕がある」
　傍目からではよくわからないが、伊央菜の指さす先をよく見てみるとその部分が少し腫れ上がっていた。
「『殴られた』？　じゃあ、伯父さんはーー」
『撲殺されたのか』と続けようとした俺に伊央菜は「違うよ」と言って首を横に振った。
「父さんの死因は胸部を複数回刺されたことによる失血死って刑事さんは言ってたよ。実際、体の方から嫌な臭いがするし、間違いないと思う」
　ということは、伯父さんは何か硬いもので頭を殴られた後、刃物で何回も刺されたということになる。そのことを思うと怒りで身が震えた。誰にでも親切で優しかった伯父さんが、どうしてこんな惨く殺されなければならなかったのだろうか。犯人はいったいどんなやつだ。どうして伯父さんを殺したんだ。どうしてーー
「トーヤ」

　すると突然、伊央菜が声をかけてきた。顔を向けると伊央菜はこっちに体を向け、俺をじっとみすえている。
「確かめたいことがあるの、一緒に来てくれる？」
　いつも無機質だった伊央菜の声が、その時は少し熱を帯びているように感じた。

◆◇◆　◆◇◆

　警視庁の一室には今回の事件の経過報告をするため、多くの刑事が集まっていた。その中で俺は一番末端の席に着き、配られた資料に目を通しながら報告に耳を傾けていた。
「害者は鳴海敦也、四十五歳。市内で探偵をしていたそうだ。次に被疑者について……須藤、報告してくれ」
「はい、名前は佐野準、二十八歳。現在無職で工事現場のアルバイトをしているそうです。現場付近を巡回中の警官から職質された際に逃走。すぐに捕まえ、事情聴取した結果犯行を認めたため、その場で緊急逮捕。犯行動機は指定暴食団浅倉組経営の闇金返済で金に困っていたとのことです」
　浅倉組の名前が出た瞬間、場の空気が一気にざわついた。浅倉組といえば、少し前から内部分裂騒動で俺達が手を煩わせている所だ。そこが今回の件に深く関わっているのだとしたらかなり厄介なことになるだろう。だが、俺はそんなことよりもずっと気になることがあった。
　そうこうしているうちに、須藤の報告が終わり、本部長から次の指示が出された。
「須藤達は引き続き被疑者の聴取をしてくれ、他の者は証言の裏取りだ。では、解散」

「照井さん、どうしたんですか？　さっきから難しい顔してますけど」
　部署に戻る途中、今回ともに捜査することになった泊巡査がそう声をかけてきた。俺は一旦足を止め、泊に自分の考えを話すことにした。
「少し考え事をしていただけだ、どうもさっきの報告が腑に落ちないからな」
「腑に落ちない？　何かおかしなところでも？」
「ああ、報告では『闇金返済のために金が欲しかった』って言ってたが、一般家庭にそれほどの大金があるとは思えん。それに物取りが目的ならわざわざ殺しなんてリスクの高いことをせず、すぐに逃げる方が得策だ」
「でも、家を物色している時に鉢合わせってこともあるんじゃないですか？　そしたら、口封じのために殺したってことも」
「その線は薄いだろう。害者が倒れていたのは玄関先だ。もし物色中に見つかったのだとしたら、もっと家の奥で倒れていた方が自然じゃないか？」
「……じゃあ、照井さんは今回の件は殺しが目的だったと？」
「まだ断言はできないが、その線が強いと思う」
　そう言いながら俺はさっきとは違う方に向かい歩き始めた。
「照井さん、どこに行くんですか？」

「現場だ、何か手がかりがあるかもしれないからな」

◆◇◆　◆◇◆

　伊央菜に連れられてきたのは、事件現場である伊央菜の家だった。家の前には規制線が張られ、中には入れないようになっている。こんなところで何を確かめるのかと思った矢先、伊央菜は規制線を避けて中に入ろうとし始めた。
「ちょっ、待て待て！　何してんだ、お前！」
「何って……確かめたいことがあるって言ったじゃん」
　そう言って再び中に入ろうとする伊央菜を何とか引き留め、深くため息をつく。昔から常識外れなことばかりするやつだったが、これほど世間知らずだとこの先が思いやられる。
「お前の家でも今は勝手に入っちゃだめだ。刑事さんの許可をもらわないと――」
「それなら大丈夫だよ。さっきの刑事さん達、こっちに向かって来てるから」
　伊央菜は俺の背後を指さした。振り返ってみると、少し離れた所に見覚えのある人影が二つ見えた。
「あれ、鳴海さんに城戸さん、お二人ともどうしてここに？」
　目を丸くしながら、そう声をかけてきたのは病院で話した刑事、名前は確か照井といったか。俺はひとまず事情を話すことにした。
「お忙しい中すみません、伊央菜……姪がここで確かめたいことがあると言い出しまして」
「確かめたいこと、ですか？」
「ええ、すぐに済むと思うので中に入る許可をいただけませんか？」
　俺がそう頼むと照井は顎に手を当て少しの間目を伏せた。だが、考えはすぐに纏まったようで再びおれと視線を合わせた。
「わかりました。ですが、我々からあまり離れないようにしてください」
　ダメ元で言ってみたが何とかなるものだな。そう思いつつ、俺と伊央菜は二人にお礼を言って一緒に家の中に向かった。

　中に入るなり、伊央菜は例の確かめたいことを確認するためにもう一人の刑事、泊刑事を連れてさっさと家の奥に歩いて行ってしまった。そのため、今は照井刑事と二人で家内を見て回っている。家の中は想像よりもずっと酷い状態だった。以前来た時は綺麗に収納されていた本や衣類が辺りに散乱し、タンスの引き出しやクローゼットの扉が開けっ放しになっていた。
中を見回っていると唐突に照井警部が話しかけてきた。
「そういえば城戸さん達はいつから私達に気がついていたんですか？　正直、私達は近くに来るまで気づきませんでした」
「伊央菜が教えてくれたんですよ、『さっきの刑事さんが近くに来ている』って」
「ほほう、鳴海さんはそうとう視力が良いのですね」
「いえ、むしろ逆です。伊央菜は見えないから刑事さん達に気がついたんです」

　それを聞いて照井刑事はポカンとした顔を俺に向けた。さっきの言葉の意味を理解しかねているようだ。俺は一つ咳払いをして説明を始めた。
「伊央菜は先天性白内障で生まれた時から全盲なんです」
「全盲……気がつかなかったな、白杖も持ってなかったし」
「白杖を持ってないのは伊央菜がエコーロケーション、つまり音の反響を聞くことで周りのものを認知できる能力があるからだと聞いています。視覚を補うために、聴覚や嗅覚など他の感覚が異常に発達しているらしいです」
　説明に一区切りついた時、家の奥から泊刑事の声が響いた。
「照井さん！　ちょっと来てください！」
　それを聞いて俺と照井刑事は声のした方に向かった。
　泊刑事と伊央菜は一番奥にある伯父さんの書斎にいた。俺達が到着するとすぐ泊刑事が黒い小さな手帳を持って駆け寄ってきた。
「照井さん、これ見てください！」
　照井刑事は手帳を受け取るとパラパラと中の確認を始めた。内容はどうやら伯父さんの仕事に関わることのようだ。
「これって、伯父さんが仕事で使ってた手帳か？　どこにあったんだ、これ？」
「奥にある机の二番目の引き出しの中。そこだけ底が浅かったから調べてみたら案の定二重底になってて、その中にそれがあった」
　伊央菜はたいしたことはないように言っているが、普通だったら気がつかない微妙な違いを目敏く見つけたのだろう。
それほどまでに精巧に隠されていた手帳にはいったい何が書かれているのだろうか？　そう思って照井警部に視線を戻すとあるページを開いたまま固まっていた。
「照井刑事？　どうかしたんですか？」
　俺がそう訊くと照井刑事は無言で手帳を差し出してきた。それを受け取って中を見た俺は、その内容に思わず絶句した。

◆◇◆　◆◇◆

　捜査の終わりが見え始めたある日、私は照井に警視庁の屋上へ呼び出された。
「で、話って何だ？　悪いがあまり暇じゃないんだ」
「ああ、今回の事件で新しい進展があったんでな……お前に報告しておこうと思って」
　思わず目を見張り、生唾を飲む。新しい進展、だって？
「進展って……もう事件はほぼ解決したようなものだろ？」
「いや、佐野準は利用されていただけだ。黒幕にとって都合のいいスケープゴートとしてな、そうだろ？　須藤」
　冷や汗が流れる。そんなまさか、ばれるはずがない。あの家には証拠は何一つ残っていないはずだ。そうやって平常心を保とうとする私に照井は小さな手帳を見せつけてきた。

「この手帳は害者の家から見つかったものだ。中にはとんでもないことが書かれてたよ……浅倉組と警察組織の一部が手を組み、警察は押収した武器を浅倉組に横流しして多大な利益を得ている、と」
　バカな！　そんなものがまだ残っていたというのか！
　反論しようにも言葉が出ず、パクパクと口を動かすことしかできない私に向かって、照井はとどめと言わんばかりに冷たい視線を送ってきた。
「言っておくが、佐野は既に口を割っている。『警察に味方している者はいない』と諭したら、すぐに全部話したよ」
　くそ！　あの裏切り者が！　……どうする、全てばれてしまった。このまま終ってしまうのか？　……いや、私はこんなところで終わるはずがない。照井さえ……こいつさえ殺してしまえばーー
　そう思った瞬間、私は懐からナイフを取り出し照井に向かって走り出した。そして、ナイフが照井に届いたと思った瞬間、天地がひっくり返った。綺麗な一本背負いをくらった私はまともに受け身をとることもできず地面に叩きつけられ、即座に意識を手放した。
「欲に溺れた馬鹿が、黒帯をなめるな」

◆◇◆　◆◇◆

　伯父さんの家で手帳を見つけてから数週間後、事件は急転直下で終わりを迎えた。あの手帳によって浅倉組と警察の裏取引が明らかとなり、多数の逮捕者が出た。警視庁のトップは今回の件の責任をとり辞職し、新しい体制が組まれることが決定したそうだ。
　そんな中、俺は伊央菜を出版社近くのファミレスに連れていった。今回の件で深く傷ついたであろう伊央菜を少しでも慰労してやろうと思って誘ったのだが……その考えは甘かった。
　俺の目の前には積み上げられたケーキの皿に空になったパフェのカップが並んでいる。
　忘れていたがこいつは大の甘味好きで聞いた話によると一メートルほどある巨大パフェを一人で平らげたとか。しかも、エコーロケーションでかなりのエネルギーを消費するため、これだけ食べても太らないらしい。
「あのな、いくら俺のおごりだからって少しは自重ってものをだな」
「身内の不幸でお金を稼ぐトーヤに言われたくない」
　うぐっ、痛いところを突くな、伊央菜。
　確かに今回の件を記事にした結果、出版社『マイ・ジャーナル』が創業以来の多大な売り上げを記録したのは紛れもない事実だ、だが、それとこれでは話が違うというものではないか？
「あー、で、伊央菜、お前はこれからどうするんだ？」
「そうやって都合が悪くなるとすぐ話を変えるの、トーヤの悪い癖だよ……私は父さんの後を継ぐつもり」
「継ぐって、大丈夫なのか？」
「これまでずっと父さんの仕事をみてきたから、ある程度はなんとかなると思う。それにトーヤ

も協力してくれるでしょ？」
　さも当然のようにそんなことを言う伊央菜に呆れと諦めの入り交じったため息をはいた。伊央菜の言うとおりたった一人の肉親として見捨てるわけにはいかないし、なにより、良いネタにありつける可能性も高い。俺にとっても悪くない話だ。
「わかったよ、できる範囲で俺も協力する」
「決まりね。これからよろしく、トーヤ」
　そう言いながら伊央菜はまた店員を引き止め、追加の注文をし始めた。
「まだ食べるのか？」
「そりゃあね、まだ五分目くらいだし」
　これだけ食っておいて腹五分目ってこいつの体はどうなっているんだ……というか、これで今回の原稿料の大半が消えるんじゃないか？　俺はせめてものはらいせに皿の脇に置いてあったショートケーキの苺をかっさらった。

【後書き】
この作品を読んでいただきありがとうございます。
昨年から暖めていたアイデアを形にすることができたので個人的には満足しています。
そして、この二人の物語はまだ続く(予定)です。

　透明マニキュア　汐咲ひかり

「頬の上げ方」

てこの原理か
クレーンか
手伝う者は誰もいない

なんて厄介なんだ

だから
あたふたしてる間に
「もういいよ」って言われるんだよ

「春、３月」

なかなか溶けない残雪も
頬を包む冷たい風も
髪を擦る高い夕日も
間を持たせるための幼稚な駄弁りも

気取ったリュックと母からの弁当箱
ＪＫ、田んぼの真ん中を歩く
マフラーに広がった吐息をつぶす
黒い黒いローファーが
どこまでも女子高生で

我に返るころに
また「春、３月」を嫌々更新する

「桜の下で」

桜の下の木漏れ日で
君の顔がぐっちゃぐちゃ
笑い声が無声映画に録音され
私の頭を踏み鳴らす
明日むせびいる予知を
風にむしとられた花びらに授けて

たられば
無声映画が語っている

「電車の中で」

目的地まであと少しなのに
電車がこれでもかと吐き出している
吐いて吐いて吐きだして
その轟に

僕は車両の片隅で身を縮める

前の席でカップルが笑っている
『お前も吐け』と電車が揺らしてくるから

ああ　りあじゅーぼーん
(どうかお幸せに)

「透明マニキュア」

透明マニキュアを付けてみた
ネイルの世界だと「トップコート」というらしいが
透明マニキュアの方が私にぴったりだと
物珍しく友人に話した

そういえば
従姉(あね)がネイルの専門学校に通っていた
上智大学を卒業したけど文系だから就職できなかったのだと
親戚たちはしきりに小声で話していたが従姉はそうとは思えないくらい気が強くなって私のもとへやってきた
それは去年の５月のこと

あんなにも硬くてはがれないと思っていたものが
気づいたら水たまりが自然と無くなるように消えていた
はがれるというよりきえる
５日ぶりの爪の地肌に
私はがりがりと引っ掻いていた

雨上がりには

三日月

彼はどこか温かみのある店を見つけた。白い壁に茶色の屋根というごくシンプルな建物だ。昼ピークが過ぎ、切れた調味料の買い出しのためにふらっと外に出たときだった。スーパーに寄ってから、いつも通っているのとは違う道で帰ろう、と彼はふと思い立った。そして彼、神楽は何気なく目についた喫茶店で立ち止まった。その店を一目見て外観に引かれたのだ。店の前には花壇があり、パンジー、サクラソウ、フリージアなど色とりどりの花が出迎えていた。何かに吸い寄せられるように、気が付くと「オープン」の札が下がっている店の扉を開けていた。カランコロン。扉につけられたベルが鳴る。天井にはペンダントライトが下げられ、窓から射す日差しで店内は明るかった。中央にはカウンター席があり、周りにテーブル席がいくつかある。しかし、中はしんと静まり返っていた。客は神楽の他誰もいないようだった。物音がして奥から人が出てくる。六十代後半だと思われるおばあさんだった。比較的ふくよかで小柄な体型をしていた。温厚そうな優しい顔立ちの女性だ。でもどこか凛とした雰囲気もあった。紺のワンピースを着て髪の毛を後ろで束ね、眼鏡をかけている。どうやらこの人が店主のようだ。店主が親しげに話しかける。

「いらっしゃい。ようこそこの喫茶店においでくださいました。さあさあ、どこでも好きなところにおかけになって。メニューはそちらの黒板に書いてありますから、決まったら呼んでください」

「はい」

神楽が２年前、この辺りにレストランを開業してから初めて立ち寄った喫茶店だった。注文して数分後、コーヒーが運ばれてきた。挽きたての豆の匂いが鼻孔をくすぐる。

「どうぞ」

「ありがとうございます、いただきます」

一口飲んだ。

「とてもおいしいです」

「それはよかった」

店主はにっこり微笑んだ。

「ここにいらっしゃったのははじめてよね？」

「はい、ここの外観に惹かれまして。見事な花々だなあと。外の花壇はすべてご自身で手入れされているのですか？」

「ええ、そうなの。手入れも大変だけれど、きれいに花が咲くとお客様にも喜んでもらえるでしょう」

神楽も微笑んで同意した。

「とても素敵だと思います。私もこの近くでレストランを営業しているのですが、お客様に自分

の作った料理をおいしいと言ってもらえるとうれしいので」
「あら、若いのにレストランを自身で切り盛りなさっているの？」
「はい、別のレストランでずっと修行していてやっと自分の店を持てたばかりなので、まだまだですけれども、定期的に足を運んでくださるお客様も増えてきて、なんとかやっていけてます。ただ、困ったこともありまして」
「困ったこと？どんなことがあったの？」
「あ、いえ、さっきあった出来事なのですが、少々込み入った話なのでなんとも……」
　つい口にしてしまったことを神楽が話そうかどうかためらっていると、彼の心の内を読んだかのように店主は言った。
「人に話してみると何か見えてくるものがあるかもしれないわ」
　店主の優しいまなざしと店の中に流れるゆったりした空気に促され、神楽は事の次第を話し出した。

＊

　いつものように昼時の客の波が引き、神楽は食事後のテーブルの片づけをしていた。テーブルを拭きながら、ふと足元を見ると、何か落ちている。拾い上げた神楽はそれがカードケースだと気づいた。シンプルな黒のものだ。ここのところ、客の忘れ物が多い。あとで、店奥の忘れ物入れにしまおうととりあえずスラックスのポケットに入れたところで、彼はふと違和感に襲われた。店内の様子がいつもと何か違うように感じられたのだ。
「粘土のウサギがない……」
　テーブルに面している窓台に置いていたはずの粘土細工のウサギがなくなっていた。客が落としてしまったのか近くにあるはずだと、しゃがんで床を探してみたが見つからない。その他にテーブルの上のメニューや、しょうゆ・砂糖などの調味料のそば、ありとあらゆる場所を見て回ったが、粘土細工のウサギはどこにもなかった。それは彼の一人娘が小学校の図画工作の時間に作ったものだった。ピンク色の絵の具で塗られており、耳に赤いリボンがつけられているウサギだ。学校から帰ってきた娘がそれを真っ先に見せていたのを彼は思い返していた。

――パパ、これね、千尋が図工の時間に作ったんだよ
――へえー、どれどれ、おー、うまくできてるなあ
――ふふ、すごいでしょ
――せっかくだから店に飾ろうか、千尋が作ったウサギさん、お客さんにも見てもらおう
――え、ほんとに？　わーい、やったー

　満面の笑みを浮かべて嬉しそうにしていた娘の様子が彼の頭に鮮明に浮かんだ。神楽は急いで店奥に入って行った。夜の開店に向けて仕込みをしていた妻に聞いたが、彼女も知らないようだった。昼の営業を終え、すでに帰ってしまったバイト二人にも連絡したが、ウサギの行方は同じくわからなかった。ただ、開店前に窓台のそばのテーブルを拭いたというバイトの一人からは、そのときは確かに粘土細工のウサギがあった、と言われた。そのあと彼は防犯カメラの映像

をチェックすることにした。それは開業する際、多少値が張っても防犯カメラがあるに越したことはない、という修行先のオーナーのアドバイスを受けて店に取り付けたものだ。

＊

　そこまで話して神楽は目を伏せ息を吐いた。

「それで、その日の開店前から昼時の終わりまでのビデオ映像をチェックしていたんです。そしたら……」

　彼はそこで言いよどんだ。

「そしたら……？」

　店主が続きを促す。

「そしたら、その窓台のそばのテーブルに一人で座っていた三十代前後くらいの男性のお客様が、粘土細工のウサギを自分の鞄に入れていたんです」

　神楽は険しい表情で唇を噛んだ。

「鞄に……？」

　店主も眉をひそめる。

「ええ」

「店の置物を盗むなんて……。その人はどんな様子だったの？」

「防犯カメラ越しなので、はっきりとはわかりませんが、誰かに見られないように周りを気にしているふうでもなくて、ただごく自然に鞄にそのウサギを入れていました。でもその男性って実はカードケースを落とした人なんですよ」

「さっき、テーブルの下で見つけたって話していたカードケース？」

「はい、その後男性が席を立つときにカードケースを落とした様子も映像に記録されていて」

「その男性はよくお店に来るの？」

「いえ、その日が初めてでした。注文を聞いたバイトの子はごく普通の人だったと。ただレジ対応をした妻はどこか上の空の様子だったと言っていました。店に忘れ物をされる方はここ最近数人いるので、それほど気にはしてなかったのですが、持ち去られた粘土細工のことをなんて娘に話そうかと……。店に頻繁に来てくださるお客様も何人かその粘土細工を褒めてくれていて、そのたびに嬉しそうにしていた彼女に正直に話すのもためらっているんです」

「なるほど」

「できることなら、娘のために男性を探し出して、そのウサギの粘土細工を返してほしいのですが、それも難しいですし。かといって、それを持ち帰った手前、ウチの店にまた来る可能性はもっと低いと思います。それに、その男性を運よく探し出せたとしても、ウサギの形のまま手元に残っているかどうか……。まあ、警察沙汰にするのもどうかと思いまして」

　神楽はため息をついた。

「そのカードケースの中身は見ました？　男性を探す手がかりがあるかもしれないわ」

「ええ、この際だからと思い、カードケースの中身も確認したのですが……、手がかりになりそうなものは入っていませんでした」

「そのカードケースには何が入っていましたか？」

「ええと、確か……。あ。そうだ、そのカードケース、ポケットに入れたままでした。これです」
　そう言って彼はスラックスのポケットに入っていたカードケースを見せた。
「ほう。少し中身を見てもよいでしょうか？」
「ええ、どうぞ」
　カードケースを受け取った店主は中に入っていたカードを取り出した。交通系電子マネー一枚、異なる大手コンビニチェーンで使う無記名のカード一枚ずつ、そして折り紙で作られた「おまもり」と書かれている小さな紙一枚だけであった。
「ケースに入っているカードの数も少ないですし、何も身元がわかるものがないんです。せめて名前さえわかれば、まだ探しようはあると思いますが、カードにも名前が書かれてないので」
「これはなんでしょう」
「それは僕も不思議に思いました」
　店主が手にしたのは折り紙のおまもりと思しきものだった。神楽は改めてそれを見た。縦六センチ、横四センチくらいに折られた水色の紙の表には『おまもり』とたどたどしい平仮名で書かれている。おそらく平仮名を覚えたての子どもの字だろう。おまもりの上部には穴が空いていてきちんと紐が通されていた。裏返すとそこには幼い子が描いたと思われる男性の似顔絵があった。神楽が防犯カメラの映像で見た男性の顔のようだった。
「これを落とした男性がお子さんからもらったというあたりかしら」
「ええ、私にもそう思えます」
「これをカードケースに入れて持ち歩いているのは、きっと大切だからよね……」
「そう、ですね」
　子どもからもらった手作りのものを大切にしているのなら、どうしてこの人は店の粘土細工のウサギを持ち去ってしまったのだろう、と神楽はなんとも釈然としない気持ちに襲われた。そんな神楽の気持ちを汲んだのか店主は言った。
「せめてこのおまもりだけでも何か手がかりになればいいのでしょうけれど……」
「ええ、けれど難しいですよね」
　肩を落としていた神楽はふと我に返って時計を見た。
「いけない。もうすぐ娘が学校から帰ってくる時間だ。そろそろ戻らないと」
「あら、そうでしたか」
「すみません、お仕事中なのに長々とこちらの話を聞いていただいて」
「いーえ、こちらこそ、喫茶店をやっている年寄りに話して何か気持ちに整理がつくことなら何でも聞くわ。それに今日はお客間様の出入りが少なかったから、なんてことないのよ」
　店主は微笑んだ。神楽はお礼を言って、そそくさと荷物をまとめ、会計を済ませるとその店を後にした。

「遅かったわね」
　レストランに戻った彼が買ってきた調味料を補充していると、妻が声を掛けてきた。

「ああ、ごめん。喫茶店に寄っていた。そこの店主に今日のことを聞いてもらっていたんだ。初めて寄った喫茶店で初対面だったけど、すごく話しやすい人だったから、つい」
「そう……。そろそろ千尋が学校から帰ってくる時間ね。どうする、その、今日の、千尋が作ったウサギのこと。あの子に話したらやっぱりショックを受けるだろうし……」
「うん、そうだね、なんとかあの子を傷つけずにいられたらいいけど」
「ただいまー」
　二人が話している途中で店のベルが鳴って声がした。神楽は妻と顔を見合わせた。娘の千尋が帰ってきたのだ。すぐにピンクのランドセルを背負って二つに結んだ髪を揺らした女の子がドアの向こうから現れた。
「おかえり」
「おかえりなさい、今日は二階におやつ用意してあるわよ」
　妻の言葉に千尋はぱっと顔を輝かせた。
「おやつあるの？　食べる、食べる！」
「あ、ちょっと待って、千尋」
　自宅である二階へ一目散に走っていく娘に向かって妻が呼び止めた。
「何？」
　千尋が振り返る。
「ちゃんと手を洗ってから食べるのよー」
「はーい」
　返事をして千尋はドタバタ階段を上がっていった。
「ウサギがなくなっていること、全然気づかなかったな」
　神楽がつぶやくと妻は苦笑しながら言った。
「だって本当に二階まで一直線だったもの。あの窓台を見る暇なんてなかったわ」
　妻は窓台に視線を送ってそう言った。
「にしても、おやつで気をそらすのってうまくいくんだね」
　神楽が感心したように言うと妻は苦笑した。
「今日はうまくいったけどね。あの子がこの店の中を通るのは基本外に出る時だから、なんとか取り繕うことができればって思うけど、いずれは話さないといけないわね」
「うん」
　ため息をつく妻の言葉に神楽は顔を曇らせて頷いた。

　それから数日間は大型連休ということもあり、店が忙しく、カードケースの持ち主を探す余裕はなかった。千尋には粘土細工のウサギを持ち去られたことをなんとか気づかれずにいたが、やはりこのままではいられない、と神楽は思い始めていた。
　ふっと時間の空いた午後にもう一度カードケースを見てみようと神楽はそれを取り出した。しかし、ケースに入っているはずの折り紙のおまもりがないことに気がついた。
「確かに入っていたはずなのに」

つぶやいて考え込んだ彼は、はたと思い当たった。喫茶店で店主にカードケースの中身を見せたときに、おまもりだけしまい忘れたのだろうと。神楽は急いで支度をして妻に出かける旨を伝え、喫茶店に向かった。

カランコロン。息を切らして喫茶店のドアを開けると、今日は数人の客がいた。客の会計をしていた店主が神楽に気づき、笑顔を見せた。その客が帰ると、神楽はすぐさま店主に話しかけた。
「すみません、この前ここでいろいろと話を聞いていただいた者なのですが」
「ええ、覚えていますよ。いらっしゃると思っていました。この前置いていってしまったおまもりのことですよね？」
「やっぱりこちらにあったのですね。うっかりしまい忘れてしまったみたいで」
「いえいえ、こちらも気づかなくてすみません。お客様のレストランの場所を聞いていれば届けられたし、良い知らせも早くできたとも思ったのですが、来られたのでよかったわ」
そう言って店主は微笑んだ。
「良い知らせ、ですか？」
「ええ、聞いて驚かれると思うけれど、このおまもりが入っていたカードケースの持ち主がわかったのよ」
「え？　持ち主が？　本当ですか、それはまたなぜ？」
神楽は目を丸くして聞き返した。
「本当よ。よかったら椅子におかけになって、その方がゆっくり話できると思うわ」
店主に勧められたカウンター席に腰掛ける。
「そうですね、そうします」
「話が少し長くなるから、コーヒーでも飲まれますか？」
「はい、じゃあこの前と同じコーヒーをお願いします」
「かしこまりました、少々お待ちくださいね」
そう言ってから店主がコーヒーを持ってくるまでの時間がやけに長く感じられた。いったいどうやって、ここの店主が私の店に来て粘土細工のウサギを持ち去り、カードケースを落としていった男性の正体を知ることができるというのだろう。神楽の頭の中はそんな疑問で埋め尽くされていた。
「お待たせしました。どうぞ」
「ありがとうございます、いただきます」
神楽はコーヒーを一口飲んだ
「それにしても驚きました。手がかりになるようなものがまったくないのにいったいどういう経緯でわかったのですか？」
「本当に偶然なのよ。実はついこの前こんなことがあってね」
店主が話し始めた。

＊

そろそろ開店時間も終わりに近づくという頃に、店主は店の花壇の前に突っ立っている男の子

を見つけた。黄色い帽子をかぶって、背負っているランドセルには黄色いカバーがかけられている。小学一年生と思われる。どうしたのだろうと店主が気にしていると、その男の子は急にうずくまってしまった。それを見た店主は慌てて店の外に出た。
「あなた、どうしたの？　どこか具合悪い？」
「え？」
　声を掛けられた男の子は驚いて顔を上げた。今にも泣きだしそうな顔だった。泣くのを我慢するように手で顔をこすった。
「ううん、具合が悪いんじゃなくてね、その、……」
　そこまで言って男の子は黙ってしまった。
「うん」
　店主は男の子の視線の高さに合わせてしゃがんで相槌を打った。すると見つめ返してきた男の子はびっくりした顔になった。
「おばあちゃん、学校行く道のところであいさつしてる人？」
「え？　ああ、通学路でのあいさつ運動のことかしら。ときどき、道路にいてあいさつしているわ」
　店主は開店前の小学生の登校時間に、子どもたちの防犯も兼ねたあいさつ運動に参加していた。専用のベストを着て通学路に立ち、小学生の登校を見守るのだ。
「やっぱりそうなんだ」
　そう言って男の子は初めて笑顔を見せた。
「でも、あなたの具合が悪いってことではなくて安心したわ」
　店主も微笑んだ。
「うん、でもね、……ちゃったの」
「ごめん、最後の方聞き取れなかった。なんて？」
「なくしちゃったの」
「何を？」
「……にしかられちゃう、ぼく、ママ、に、しかられる」
　笑顔を見せていた男の子は気づくと再び涙をあふれんばかりに瞳にたたえ、途切れ途切れに言った。店主は困ってしまった。
「何かをなくしてしまって、それはママに叱られてしまうことなのね。うーん、少しゆっくり話を聞いてみてもいい？　このお店の中なら落ち着くと思うから」
「うん」
　男の子は頷いた。店主は彼の手を引き中に入ってテーブル席に座らせ、水を差し出した。
「ひとまずこのお水を飲んで、落ち着いてね」
　店主は男の子の真向かいに座りながら言った。
「うん」
　気持ちを落ち着けた男の子が話してくれたのは以下のようなことだった。
　男の子は名札をなくしてしまった、と言った。彼が通っている小学校では校内でいつも名札を

付けているのだが、登下校時は防犯のため、名札を裏返して名前が見えないようにしている。しかし、小学校からの帰り道、友達と別れてふと気が付くと胸についているはずの名札がなくなっていた。来た道を引き返して探しても名札は落ちておらず、果ては学校まで探しに戻ったが、教室にも廊下にも落ちていなかった。そうこうしているうちに、もう遅いから帰るように、と先生に促され、学校を後にしたわけだが、家に帰るわけにもいかずどうしようもなくなって花壇のところに突っ立っていたのだと言う。男の子はつい最近すでに名札を一回なくしていて、そのときこっぴどく叱られたため、母親には言いづらいのだと話した。
「うーん、なるほど。そうねえ、ちなみにランドセルの中は探した？」
　店主が尋ねると男の子は目を見開いていかにも盲点を突かれたというふうに答えた。
「探してない……。探してみる」
　いさんでランドセルの中に入っていた教科書や筆箱、連絡帳、給食セットなどすべて取り出してみたが、名札は見つからなかった。がっくり肩を落とした男の子に店主は声を掛けた。
「その内ポケットの中にもないかな？」
「うち、ぽけっと？」
「ええ、ランドセルの前についているここ、ここのポケット」
　店主が指さしながら教えると男の子はさっきよりも目を大きく見開いて言った。
「見てなかった、いつもここに何も入れないから」
　男の子が内ポケットに手を入れて取り出したのはまさしく彼が探していた名札だった。
「あった……。あったよ、おばあちゃん！」
　最初驚いて真顔になっていた彼はみるみるうちに笑顔になった。店主も笑顔で頷きながら答える。
「あったね、よかったね」
「ありがとう、おばあちゃんのおかげだよ。本当にありがとう」
「とんでもない、見つかってよかったわ」
「ごめんね、なくしたって思ったらこんなところにあった」
　恥ずかしそうに言った男の子に店主は笑って答えた。
「いいのよ、たぶん、何かの拍子で安全ピンがはずれて名札がポケットに入っちゃったのね。今回わかったから次同じことはしない、って自分に言い聞かせてごらんなさい。でも何かを探すときは覚えておいた方がいいわ。探し物って意外と近くにあることも多いから、まずはそこから探すってこと。私も眼鏡がないと思ったら頭の上に眼鏡があったっていうのがしょっちゅうだったわ。気をつけるようになってから、今はもうほとんどそんなことないけれど」
「へえ、そうなんだ。うん、僕もちゃんと気をつける」
　名札が見つかって安心した様子の男の子は店内を見渡した。
「すごいねー、ここってコーヒー飲むところでしょう？　カップとか機械みたいなものがいっぱいある」
「そうね、マグカップとかコーヒーミルっていう器具だったりちょっとした焼き菓子だったりがたくさんあるわ」

　テーブル席の椅子から降りてカウンターに向かった男の子が尋ねた。
「あれ、これって……？」
　男の子が手にしたのは、神楽が忘れていった折り紙のおまもりだった。
「ああ、それ、この前お客さんが置いて行ってしまったものよ」
「これ、ひなちゃんが作ったやつだね！」
「ひなちゃん？」
「うん、間違いないよ。だってひなちゃんがこのおまもり持ってたもん」
　店主は驚いて聞き返した。
「ひなちゃんってあなたが知っている子？」
「うん、僕とおんなじ小学校の子だよ。このおまもりはね、幼稚園の年長さんのときに作ったんだ。ひなちゃんがお父さんを描いた、ってこの絵を見せてくれたよ」
「そう……、この似顔絵はやっぱりその子のお父さんなのね」
「うん、お父さんにあげるって言ってた。ひなちゃんのお父さん、絵描きさんなんだって。大きくなったらひなちゃんも絵描きさんになるって言ってた。今、いっぱい絵を描いてるよ」
「そっか、そのひなちゃんの名字はわかる？」
「みょうじ？　えっとね、はしもとだよ」
「橋本さん……。お父様は絵を描いていらっしゃるのね」
「うん、有名な絵描きさんだってひなちゃんが自慢してた」
「なるほど。実はね、このおまもりが入っていたカードケースの落とし主を探している人がいて、でもその人が見つからなさそうで困っていたの。教えてくれてありがとう。その人に良い知らせができそうだわ」
　店主の言葉を飲み込めずキョトンとしていた男の子だったが、感謝されているのはわかったようで、にっこり笑って頷いた。

＊

「そんなことがあったんですか」
　話を聞いた神楽は思いがけない偶然から、探していた人物が判明したことに驚いていた。
「そう、それで私も調べてみたのだけど、橋本っていう名字の有名な画家がこの近くにアトリエを持っているらしいの」
「本当ですか？」
「ええ、これがそのアトリエの連絡先よ」
　店主は電話番号、住所などの連絡先を書いたメモを神楽に渡した。
「ご丁寧にありがとうございます」
「人の役に立てるのはうれしいからお安い御用よ」
　店主は微笑んで言った。

　二日後、店主から教えてもらった連絡先を頼りにして神楽は画家のアトリエを訪ねた。
　通された部屋で待っていると、防犯カメラに映っていた男性とそのアシスタントと思われる男

性が姿を現した。
「このたびは突然お邪魔してしまってすみません。こちらのアトリエにお電話で連絡していました、神楽と申します」
「本来ならば、こちらがうかがうところをご足労いただいてすみません。橋本貴之と申します。画家をやっています。こちらはアシスタントの斎藤です。このたびは窃盗と思われても仕方のない私の行為のために神楽さんをひどく困惑させてしまったこと、深くお詫びいたします。申し訳ありませんでした」
　橋本は斎藤とともに深々と頭を下げた。
「そんな、頭を下げないでください。もうこうして解決できたので、それで十分です」
　神楽の言葉に橋本は顔を上げ、持っていた紙袋の中身を取り出した。
「本当にすみません。これがそのウサギの粘土細工です」
　そう言って神楽に手渡す。
「ありがとうございます」
　神楽は安心したようにそれを受け取った。
「言い訳めいて聞こえるかもしれませんが、あの日神楽さんの店に行ったときの私は、作品展の絵の締め切りで切羽詰まっていました。そのため、作品のことを考えすぎてどこか上の空でした。そのとき目に留まったウサギの粘土細工に、作品を完成させる一つのヒントを見出していました。だからと言って持ち去っていいはずはないのに。本当に人としてすべきではない行動でした。重ねてお詫び申し上げます」
　神楽が何か言う前にそれまで黙っていたアシスタントの斎藤が口を開いた。
「橋本先生は睡眠時間や休息も十分に取れないまま、作品に取り掛かっていました。わかってくださいとは言いませんが、そういうときの先生は心ここにあらず、ということが多く、本来ならば絶対取らないような行動に出てしまったのだと思います。本当に申し訳ありません」
「いえ、事情がわかって安心しました。そうだ、こちらも渡さなくてはいけないものが」
　そう言って神楽が取り出したのは橋本が落としたカードケースだった。
「これも私の不注意で落としてしまったにも関わらずありがとうございます」
　カードケースを受け取った画家は恐縮しながら言った。
「いえ、そのカードケースの中身を拝見したのですが、折り紙のおまもりはお子さんからもらったものなんですね」
　神楽が言うと、それまで硬い表情をしていた橋本は口元を緩めた。
「ええ、娘が幼稚園の頃くれたものなんです。電話でもお聞きしましたけど、このおまもりから私のことがわかったんでしたよね」
「はい、私にも同じ年くらいの娘がいるのでお気持ちわかります。この粘土細工のウサギ、小学校の授業で娘が作ったものなんです。お子さんが作ったおまもりを大事そうにカードケースに入れている持ち主なら悪い人ではないのでは、と思っていました」
「そうだったのですか。本当に返すことができてよかったです」
「それにしても、小学生の子どもが作ったものでもあなたのようなプロの画家の参考になる点

があったというのは驚きでした」
　神楽が率直な感想を述べると画家は微笑んだ。
「子どもの感性は私たち大人が持つことのできない力を秘めています。そこはやはり見過ごすことのできない点です」
「なるほど」
「それでただの自己満足かもしれませんが、私からお詫びのしるしとして、近々控えている作品展のチケットをできればお渡ししたいです。」
　そう言って橋本は胸ポケットから取り出したチケットを神楽に見せた。
「これ、大々的な作品展じゃないですか。こんな高価なチケットいただけません」
「いいんです。本当に。都合が合えば娘さんと奥さんといらしてください。」
　神楽は橋本に押し切られる形になった。
「はい、じゃあ受け取らせていただきます」

　後日、神楽は娘の千尋と共に、橋本をはじめ著名な芸術家が出品している作品展に来ていた。
「いっぱい絵があるねえ」
「そうだなあ」
　受付でもらったパンフレットを頼りに橋本の作品のそばまできて神楽は驚いた。他の作品とは比べものにならないほど大勢の鑑賞者がいたからだ。
「人がいっぱいいるね。絵が見えない」
「うん、ちょっと待ってな、前の方行こうか」
　神楽は千尋の手を引いて絵がよく見える最前まで行った。その絵の中では、赤いリボンを首につけた犬と幼い男の子が仲良さそうに描かれていて、男の子は虹に手を伸ばしている。大勢の鑑賞者たちの一番前では、千尋と同じくらいの年の女の子がその絵を見上げていた。ふっとその子が振り向いて神楽たちの方を見た。その女の子を見てどことなく橋本に面影が似ていると神楽は感じた。彼が同じ年くらいの千尋を連れていたからだろう、女の子は二人に話しかけてきた。
「ねえ、あの絵ね、ひなちゃんのパパが描いたんだよ。すごいでしょう」
　無邪気に笑う女の子に神楽は微笑み返した。
「そうなんだ、とってもステキな絵だと思う」
「そうなの？　あなたのパパが描いたんだ！　すごいね！」
　千尋も驚いて女の子に聞き返す。
「うん、ありがとう。ねえねえ、あなたのお名前は？　私、ひなこ」
「私は千尋」
「千尋ちゃん何年生？」
「私はね……。」
「そうなんだ。私も……」
　楽しそうに自己紹介し合っている彼女たちを神楽は見守る。
「ねえ、他にもひなのパパの作品あるんだよ。案内するね」

「いいの？　うれしい。ねえ、パパ行ってもいい？」
「うん、いいよ、迷子にならないようにな」
「はーい」
　すっかり仲良くなった二人の女の子はそろって返事をして駆け出した。その後ろ姿を神楽はまぶしそうに見ていた。

【終】

∀・

新井　或馬

フレンドがいない。そう、iPhone鳴らね。

濃密なトイレ談義が終わったその日の放課後、下校を共にする友達がいないことがバレないように、僕は皆が帰るのを待って放課後の教室で寝ているフリをしていた。そして自虐の宣伝文句を思いつき笑いを堪えていた。そしてモノ悲しくなった。

そんな時、同じ学校に通い、哲学を嗜んでいる一つ年上の兄さんからLINEが飛んできた。

ーー屋上へ来いーー

ーー屋上へ行こうぜ……久しぶりに……キレちまったよ。と、どこぞのサラリーマンの台詞を僕は思い出しながら、兄さんが何をキレているのか、自分の兄さんに対する過去の行いを思い返していた。

寝ている間にＦＦの女性キャラの装備を皆『囚人の服』に変えたやつか、それともポケモンのボックスをすべて空にした後に全部コインキングの卵にしてボックス名を「金魚すくい」にしたことか？　もしくは兄さんが初めていく吉野家の注文システムにアドバイスを求められた時、おしんことサラダ食べ放題だから、好きなだけ喰うといいよと言った後、危うく警察沙汰になりかけたことか？

しかし、どれも弟のかわいいイタズラだからそこまで怒る必要はないだろう。

あ、もしかしてアレか。兄さんが大晦日に友達と御来光を見に行くので、兄さんが大好きな『ガキ使』を録画しておいてと言われた時、友達がいない僕は腹いせに去年録った『はじめてのおつかい』の名前を『ガキ使』に変えて差し出したのが悪かったのか。

うーん。でも全部大したことじゃないよなぁ。

ーー兄さん、キレてますか？ーー

あれこれ考えるのはやめて僕は素直にLINEで質問した。

ーーお前が過去に行ったことについては今だに許してないが、キレてはいない。クラスメイトが鍵屋の息子でな。昼休みに屋上の扉をピッキングしていたらどうやら開いたらしい。こういう機会は滅多にないので、夕焼けをバックに人生について語りたいのだ。俺の友人はあいにく部活で忙しいからお前を呼んだ次第だ。

えー、僕はそんなに安い男じゃないからな～。そんなことを思いつつなんて返信しようか迷っていると、新しい吹き出しが飛び込んできた。

未だ治らない中二病のお前も学校の屋上というものに興味はあるだろう？　あと、俺は天文学部に寄って三脚とか望遠鏡とかを持っていくから十分後に行く。それまでには来てくれ。

まぁ興味があるかないかで言われたら興味はちょーっとあるけど、別にそこまで積極的に行きたいわけじゃ……ていうかアンタ人生云々の前に単純に天体観測したいだけじゃないのか⁉　という具合に打ち込んでいると続けざまに吹き出しが出て来た。

僕はそれを見ると戦慄を覚えてすぐに立ち上がり、しかし、クラスメイトに自分が寝ていたというアピールのために大げさに伸びをした後教室を静かに出た。

まぁ学校の屋上って一度は行ってみたいからねぇ！　僕は汗だくになりながらLINEを見ていた。

お前生放送しながらネットアイドルやっている母さんが最近身バレしたとか言って慌ててるの

を知ってるだろ？　それ、お前が母さんの掲示板に匿名で色々書き込んだことが原因だと俺は知ってるからな。それをバラされたくなければとっと来い。
　これはマズイ。僕としたことがぬかったか。現実を逃避している母さんの信者たちにちょっとしたリアルを提供しようと、『☆～ミミ～☆アイドル　じゅうにちゃい⊠』という大変頭が悪そうなスレに、僕は過去ミミが上げた動画や発言などからら矛盾点を晒した。そうしたらいくらか盛り上がったのだ。
　ミミ――もとい母さんは長年培ってきた技術と知識を持ってして火消しと情報ミスリードを、熟練のピアニストを彷彿させる爆速タイプでスレに打ち込んでいた。
　ちっ。僕が書いていた時、夢中になっていたから兄さんの気配に気づかなかったのか。
　よし、次からは気を付けよう。
　学校の屋上までの階段を足早に上がっていくが、普段運動していない僕は扉に着くころには息切れを起こしていた。
　フーッ。着いたな。……お、ホントだ。空いてんじゃーん。
　普段は固く、ひねることができないドアノブがガチャッと力を入れずに回転した。
　扉を開け放つと目を刺す紅く眩しい夕日が僕を迎え入れた。
　素直にキレイだと感じた。
一歩外へ踏み出すと柵やフェンスがない屋上は風がびゅうびゅうと僕に当たって笑うように去っていく。
　扉からまっすぐ歩いて端までたどり着いたところで下を見る。人間や木などが小さく見え相当な高さにゾッとした。
　その場にへたり込んだ僕は身体で確かにコンクリートを感じることを無意識に努めた。
　呼吸を整えて見上げると、ちらほらと星が瞬き始め月も出ていた。
　紅と蒼と白が混じった空を眺めているとさっきまでの恐怖より圧倒的な開放感と幻想的な空気が僕を包んだ。
　うん。雰囲気あるなぁ。漫画とかラノベで屋上がよく出てくるのも頷ける。この空気というか雰囲気がやっぱすごくいい。
　――紙飛行機を飛ばそう。
　不意にそんな発想が頭をよぎった。僕は小説のネタ探しのためにいつも持ち歩いているなメモ帳を取り出し、適当なページを一枚びりっと破る。
　そして、子どもの頃を思い出しながら簡素な紙飛行機を作った。後ろの羽を少し立てるとよく飛ぶんだっけ？
　誰かから聞いた豆知識を思い出した。
　――よし、飛ばそう。
　そう思った瞬間、後ろで扉を開け放った音がした。来たか。
　ガッチャガッチャと何か重たいものを運んでいる音が聞こえ、こっちに向かって来ている。
　そして、僕のすぐ後ろでその音は止まった。
　なんか幻想的なシチュエーションになってきたなぁ。僕のマイフェイバッリト漫画にこんなシーンあった気がする。
　確かあれはケガした小鳥を世話をし、治った時に高台で大空へ帰す場面だったな。そんで一言、こう言うんだ。
「――太陽が死んでも……命は羽ばたく」
　僕は後ろを振り向かず、紙飛行機を小鳥に見立て真っすぐ夕暮れの空に向かって投げた。

「……」
　フッ。どうした兄さん、あんたは哲学談義が好きなんだろ？　おしゃべりしなきゃ何も始まらないぜ。
「……」
　オイオイ会話が止まったぜ。どうしたん――
　あまりにもだんまりだったので、ふと振りむいたら、そこには黒髪ロングのＪＫが三脚を設置し、撮影機材をセッティングしており、なんとも言えぬ表情で固まっていた。
　僕は彼女を見るとフッと不敵な笑みを浮かべて、姿勢を夕日側に戻した。
　――ひ、人違いだったァア！　は、ハズカシイ！　ガチャガチャ金属が擦れるような音がしてたからこれは兄さんしかいないと思ってたけど違ったァア！　映画倶楽部の人っぽいよ。コレ。もうこっから飛び降りよう。最後くらいロックに死のう。目に涙を浮かべたままアイキャンフラーイ！　とかいって飛び降りたほうが絵になるよねきっとそうだよね――。
「――そして、月は生き返る」
　僕が意を決した時、時間が止まっていた彼女から声が聞こえた。咄嗟に振り向くと顔を真っ赤にして目を泳がせ、口に手を当ててうつむきぎみな、見るからに恥ずかしさを堪えた様子だった。
　コイツ天使かよォオ！　母さんがネットでは天使とかもてはやされているけど、ここにマジもんの天使がいたよ！
　すいませんね！　屋上で紙飛行機なんか投げながら謎のイッタイ台詞吐いている僕なんかのために堕天していただいて本当にありがとうございます‼　てゆうかアンタあの漫画読んでるのね！
　あれＲがつく漫画だよ！
「……」
「……」
　やべぇ。どうしよう。会話が続かない。てゆうかこのドロ沼の暗黒空間どうしよう。もう、持たないよ。兄貴は何をやってるんだ。もう十分はとっくに過ぎた。あ、そうだ、今彼女からは僕は背を向けているから、こっそりスマフォを出して兄貴を呼び――
「――でも、私は翼を広げて旅立つわ」
　こいつヤベェ！　ノリノリでむこうから来たよ！　それとまだ漫画のネタ続けるんですね！　怖い者しらずですね！　死兆星でも見えてるんですかねこの子は！
　ちらっと後ろを確認すると、さっきより顔を赤くして、瞳には涙を軽く浮かべている。さらに緊張からか汗をかいているのが分かった。
　……さ、さて、どう切り替えそう。このまま漫画ネタを続けるべきか。えーっとこの後の流れだと、主人公は余命宣告されたヒロインを抱き留め、キスをして――大人の階段を上って……。
　ちょっ、誰もいないからとは言え、さすがにそこまで実行に移したらあかん。かといってどうアクションすれば良いのか。
　考えれば考えるほど沼に沈み込み思考が纏まらない。
　あー！　もういけるとこまでいって、いい感じで終わろう。そうしよう！
　僕はスッと立ち上がり、彼女を正面から見据えた。
　彼女は顔が火照っており、小柄で屋上の風に飛ばさそうな華奢な身体をしていた。漫画のヒロインとは体つきが全然違うが、男の庇護欲みたいなものを誘う雰囲気がそっくりだ。
　端的に言ってすごくかわいい。特に今時珍しいロングの黒髪が光沢を帯びて艶やかに風に舞う。ここまで髪を育て上げるには相当な時間と労力を費やしてきたんだろうなぁ。素晴らしい！

感動した！　興奮する！　はぁはぁ。落ち着け……僕。
　素早く静かに僕は深呼吸をした後、一歩、また一歩と彼女に近寄った。ここで、見ず知らずの男に迫られたら、誰だって距離を取る。普通なら。
　しかし、彼女は僕を上目遣いで見つめたまま動かなかった。
　本当にいいのか。このままいってしまうぞォ！
　僕はワナワナと震えながら、彼女の肩に手を置こうと両腕を伸ばす。さすがにもう、彼女も今後の漫画の展開はどうなるか把握しているだろう。であれば、さすがにここで腕を振り払うか立ち去るはずだ……。むしろそうして欲しい自分がいる。超えてはならない一線を君から遠ざかって欲しいと願う自分がいる。
　だが、彼女は僕まっすぐと見つめ何かを悟ったような瞳をし、僕がゆっくりと肩に――手を置くと、その決意を固めたような瞳を静かに閉じた。
　そして顎を上にあげ、その可愛らしく柔らかそうなピンクの唇を僕に向けてきた。
　もうここまで来たらやるしかない！　女に恥をかかせるわけにもいかないし、漢としてここは引くわけにはいかない！
　オーバヒートしている心臓を感じながら、彼女の唇に重ねるように自分の唇を近づけていった。
　閉じた瞳の奥にはこれまでボッチだった悲しい過去の映像が映されて流れ星のように過ぎ去っていった。
　色々思う所はあるけど、僕にとっては幻想的でロマンティックな体験だった。燃えるような夕日と暗闇が広がっていく空に煌めく星々が僕らを見守っている風景をバックに可愛い女の子と大人の階段を上りだす。僕にはもったいなさすぎる経験だ。
　兄さんが来たと思ったら、撮影機材をもった美少女がやってくるなんて思ってもいなかった。
　――ん？　撮影機材……。
　煽情的な彼女の唇に吸い込まれそうだった僕は、はたと目を開けて今まで思考の外にあった撮影機材の方向に顔を向けた。
　それらは、いつのまにかちょうど僕らが横並びに移るような距離に置いてあり、そして外のロマンティックな風景がバックになるようなアングルになっていた。
　……僕はさらに思う所があり、彼女の両肩においていた手を少し上腕二頭筋へとスライドさせる。
　彼女からは、んっと甘い声が漏れだすが、僕の耳にはまったく響かなかった。
　学生服を見ただけだとよく分からなかったが、こうして触れてみると女子にしては骨格がハッキリしており、筋肉もあるように思える。
「……」
　彼女は薄く目を開けて顎を上下にして僕の唇を求めていた。
　僕はそんな彼女ににっこりとほほ笑んで、顔を彼女に近づけた。すると彼女は何かを安堵したかのようにしっかりと目を閉じていた。何かを静かに待っていた。
「――オイ、この髪はなんだ」
　僕は耳元でそう呟くや否や彼女の両肩から手を放し、ガッツリと頭を両手で掴んだ。
　すると、彼女はギョッと目を見開いた。しかし、断言できるが、この時は僕の方が目を限界まで見開いていたと思う。その血走った瞳で。
「コレ、人間の髪じゃねぇな。オラァ‼」
　僕は彼女の頭を縦横無尽に振り回すと、スポッとその長い黒髪が抜けたのを感じた。

　すると彼女は白いネットみたいものを頭にかぶっていた。
　やっぱりおかしいと思ったんだ。やけに黒々しい髪色と妙に輝く光沢、そして一本一本髪の毛がサラサラとし過ぎていた。人間本来の髪からは大きくかい離した物質になっていたのだ。僕は諸事情でこういうものに詳しいんだ！
　彼女はあわわと手で口を覆って目を後ろに泳がせていた。
　僕はその目の動きを逃さなかった。
「やはり、首謀者がいるようだな。アンタは所詮役者にすぎなったんだ！」
　扉が開け離れた開放的な屋上で、僕らに見つからず中の様子を確認することができる場所は限られている。彼女の目の動きから察するに恐らくあそこだろう。
　僕は風を切って全力疾走で扉の前まで来た。そして、ポケットからスマフォを取り出し、とある人間にコール。すると扉の後ろからバイブレーションが聞こえた。
「オイ！　出てこいクソ兄貴‼」
　数秒後、悪びれた様子もなく、兄貴が清々しい顔で扉の陰から出て来た。
「……兄さんよぉ。なんかいうことあるだろ？」
「汝、人生において可愛い女子には気をつけよ」
「うるせぇ‼」
　僕は兄さんにボディーブローを決めた。
　月は僕らを嘲笑うかのように目をくらむほど輝いていた。

A・

新井　或馬

日曜日、映画倶楽部の男三人でハリウッドの最新映画を見た帰り、ファミレスで遅めの夕食を食べていた。

中瀬(なかせ) 俊(しゅん) こと俺は夏野菜の冷やし中華を。華奢な身体をした結城(ゆうき)はミートドリアとサラダを。そして顔がデカいくせに肌がきれいでガタイのいい遠藤はビーフカレーを注文していた。

「そういえば結城、三日前、学校の屋上で何やってたんだ？」

俺はミートドリアを上品に食べる結城に聞いた。

「別にぃ、大したことじゃないよ」

「嘘つけ。西日でしっかりとは見えなかったけど、俺からは結城と男がキスしているように見えたぜ」

「オイ！　どういうことだよ結城！　お前、俺という男がいながら……なんてことを――」

「別に遠藤と結城は付き合ってるわけじゃないだろ」

「中瀬(なかせ)は黙ってろ！　なぁ嘘だよなぁ結城！」

ぎゃぎゃあ騒ぐ遠藤に辟易しながら俺は三日前のことを思い出していた。

放課後、正門を出たあたりで頭にコツッと何かが当たった。見ると、小さな紙飛行機だった。広げてみると中は中二病臭い何かの物語の設定だったと思う。そしてどこから飛ばされたのか、上空を見渡してみると、屋上でウィッグを被って女子の学生服を着た結城がいた。誰かと話をしていたと思ったら、急にキスをするようにお互いの顔を近づけていった。

あれはいったいなんだったのだ。

「てゆーか中瀬っち、目いいね。よく僕だと分かったね」

「まぁな。裸眼で二・〇あるからな」

「オイ結城！　どこの誰だよ。お前をそそのかしたヤツは！」

「さぁてね。フフフむしろ、遠藤っちが初めてのヒトになってあげたら？　長い孤独からも解放されるかもねっ」

どういう意味だ？

俺が結城を見ると、おっと喋りすぎたみたいな顔をした。

「それじゃ僕はもう帰るね。英語の宿題がまだ終わってないから。それじゃあまたね～」

気が付いたら結城はミートドリアとサラダを既に食べ終えており、足早にファミレスから去っていった。

「まったくよぉ。なんだってんだ。あ、そういうや中瀬、お前学校中の生徒の情報を集めるのが趣味だったよなぁ！　結城に近づいたヤツは誰か分からないのか！」

俺はシッと人差し指を口の前に立て、遠藤に耳打ちした。

――声がデケェ！　そういうのは静かに言えよ。バカ。

――でもよぉ。お前なら知ってると思ってよぉ。

――安心しろ、結城の発言でなんとなく人物は特定できた。

――ホントかよ！　さすが『心の下着泥棒』と言われているだけあるぜ。

――俺そんな名前付けられてたの⁉　誰だよ命名したヤツ！まぁ今はいい。遠藤よく聞けよ。俺は周りの客を見渡し、ここに学校の生徒がいないこと、また聞き耳をたてられていないことを確

認するために周囲を見渡した。
――結城は『初めてのヒト』『長い孤独からの解放』とか妙なことを言っていた。それでピンと来た。俺の後輩が最近トイレで個室越しに変な奴に絡まれたんだ。気になって調査したら、高二にもなって友達がいない久保田智広（くぼた ちひろ）っていう奴にブチ当たった。恐らく結城に会っていたヤツもそいつだろう。
――よし、オレが明日カチコミにいく。先鋒は任せておけ。
――おい！　俺を頭数に入れるんじゃねぇ！　まったく、面倒事を起こすんじゃねぇよ。
――なら、どうしろってんだ。このままだと俺の気が収まらねぇぞ。友達でもねぇ奴がいきなりキスとかナメてるだろ。
――そうだぁ。それじゃあ結城の言う通りに『友達』になって誘ってみたらどうだ？
――あん？　どういうことだ。
――だから、友達のフリをして、実は遊んでいただけ～みたいな感じにすればいいじゃね？
――ふーん……ちょっと考えさせろ。
遠藤はそれを聞くとしばらく脳内で復讐シュミレーションをしたのか、終始無言で俯き気味なまま静止した。
――おう中瀬。
――なんだ？
――目から豆鉄砲
――グロイわ。
――よし、その方向でやってやる。見てろよ。ダチのふりをしてさんざん遊び倒した挙句、惨めに捨ててやるぜぇ。
クックック……と遠藤は笑いを抑え鋭い眼光をしていた。
やりすぎか？　まぁ暴力に訴えて揉め事が起こると、こっちまで被害を受けるからな。これがベストだろう。さて、遠藤が久保田に友達のフリをできるのか見物だな。
俺は笑みが見えないように氷水の入ったグラスを手に持ち、口元を覆った。
＊＊＊＊
しかし、遠藤が次の日どのように行動したか、俺は知ることができなかった。その夜インフルエンザにかかってしまい、一週間ほど学校を休んでしまったからだ。その間にLINEで状況を聞こうとも思ったが、気だるくてそんな気も起らなかった。
そしてようやく熱が下がり、学校に登校することができた。
放課後、部活動に行くためにいつもの部室に向かう。
「……なんだぁ……コイツぁ」
俺が部室に入ると、そこには簡素なモノが整然と置いてある部室ではなく、部屋中ファンシーグッズが所せましと敷き詰められていた異空間へと変貌を遂げていた。
そこに結城がデカいセカンドバックを机に置き、悠然と本を広げ、中瀬とあと一人見知らぬ男が肩を抱き合って何かイチャイチャと話し込んでいた。
「おい、いつからここは燃えるゴミの集積所になったんだ？」
「お、中瀬じゃん！　お前インフル治ったのかよ！」
「お前は変なもんでも食べたのか、遠藤……」
「んなことねぇぜ！　俺はいつも智広の手料理しか食べてないぜ！」
「ちょっと、恥ずかしいじゃん。やめてよ～」
なんか異様に腹が立つ。コイツは誰だ……ん、でもどこかで見たようなパッとしない顔とパッ

としない髪型、でも何故か他の男子生徒に比べ、潤いを纏ったような綺麗な肌……コイツがあの久保田智広か！　お前ら一週間で物理的な距離も精神的な距離も詰めすぎだろ！
「なぁ……結城、こりゃぁどういうことになってんだ。」
　俺は床に置いてあるぬいぐるみを足でぞんざいに払い、結城の隣にあるピンク色に塗装されたパイプいすに座った。
「モノに当たっちゃだめだよ。中瀬っち……んとね、中瀬っちが学校を休んだ初日に、遠藤っちが部室に久保田っちを呼び出してね『オレと友達になってください』って頭を下げながらお願いしたの。そしたら、『末永くよろしくお願いします』って泣きながら久保田っちが答えたのがきっかけだね」
　もう最初っからクライマックスじゃねぇか。俺も情報屋としてその光景に是非立ち合いたかったわ。クソが。
「そんでそれから二人でカラオケ行ったり、映画見に行ったり、ショッピングしに行ったり、プリクラ撮ったり、美味しいスイーツの店に行って大きいパフェを一つ頼んで、一緒に食べたりしてたの。そんですごく仲良くなったんだっ」
「前半はまぁ友達なら普通にあり得ることだが、後半の特に最後は恋人のそれじゃねぇか！」
「ちょ、中瀬、ハズカシイだろぉ……」
「そ、そうだよ、恋人なんかじゃないよ」
　あ、すげぇぶっ殺してぇ。特に人一倍デレデレしてる遠藤はなんだ。いつもデケェ顔しやがって、何急にメスの顔になってんだオラ。そんなことしてもサイズ変わんねぇぞコラ。
　俺は眉間にしわを寄せながらも、殺意を必死に抑えた。
「あ～とりあえず、ここは神聖な映画倶楽部の部室だ。楽園はここにないから、イチャつくなら他所でやれ」
「いや、中瀬よ。むしろ楽園は神聖な場所じゃないとできないから、ここを楽園にするしか他ないな」
「さすが遠藤くん！」
「うるせぇ！　屁理屈こねんじゃねぇ！」
「フフフッ。中瀬っち、妬いてるのかな？」
「アホ抜かせ……つーかよぉ結城」
　俺は小声で耳打ちするように話しかけた。
　――お前はいいのかよ。お前、遠藤には気がないけど、俺以外の奴と遠藤が仲良くしてると『僕のコレクションに手を出しやがって』とか言ってたじゃねぇか。この状況はいいのかよ。
　――まぁ、別に今回は面白いからいいんじゃな～い。
　そう言うといつもは持ってこないデカいセカンドバックを撫でながらにっこりと笑っていた。
　その後、このファンシー空間で今後の活動について色々話し合ったが、真面目な話の最中に件の二人がイチャイチャして会議を邪魔するので、どうもうまく進行しなかった。途中で智広を追い出そうと思ったが、彼は既に映画倶楽部の入部届けを出しているらしく、追い出そうにもそれができなかった。
「中瀬っち。もう帰らないと門しまっちゃう時間だよ」
「だぁ～クソ。全然進まなかったじゃねぇか」
「ホントあっという間だったな。智広」
「そうだね！　話し込んでたらすぐ時間になったね！」
「クソが……もうツッコむのもめんどくせぇ。俺が休んでた間何やってたんだよ。コンクールも

近いし、これじゃ作品完成しねぇぞ。」
「大丈夫だって、この前撮ったやつあるからそれを使えばいいじゃん」
「つっても、ワンシーンだけで尺が足らねぇよ。とりあず今日解散だ。……だけど遠藤、ちょっと話があるからお前は残れ」
「なんだよ、俺は早く智広と帰りたいんだけどよ」
「わかった。手短に終わらすから」
「何の話？」
　そんな話を聞いて智広がオドオドしながら俺に聞いてきた。
「一か月前にロケハンで遠征に行った時の交通費の書類、遠藤、まだ書いてないだろ。その期限今日までだぞ。俺が責任もって全員分先生に出さなきゃならないから、早く書いてくれ。お前が自腹を切るなら別に構わないが」
「それは無理だ！　すまねぇ智広先に行っててくれ」
「それじゃ校門ところで待ってるね」
　智広はすたすたと部室を後にした。結城もそれじゃお疲れっと言い残すとすぐ帰って行った。
「中瀬、早く書類出してくれよ」
「そんなものはない。先生がすでに立て替えてくれただろ」
「何？」
「おい、遠藤。お前本当にこのままでいいのか」
「な、なんだよ……。急に」
「お前、結城の事が好きじゃないのか？　それに近づいた智広を友達の振りをして、もう誰も信じられないような絶望の淵に落とすのが当初の計画じゃなかったのか」
　自分で言っておいてあれだが、ちょっと疑心暗鬼にさせるくらいでした。当初の計画は。
　遠藤はさっきまでのひょうきんな表情から一変し、両の拳を固く握りしめ、身体は小刻みに身震いしていた。
「ウ、ウゥ……。俺だって、最初はそのつもりだったさ！　でもよぉ。アイツいいやつなんだよ！　いやがらせで、何してる？　どこにいる？　今暇？　ってLINEを一日三百件くらいしたら、あいつそれに秒で返信して、むしろアイツのほうからLINEが一日五百件くらい飛んでくるんだよ！」
　なにそれ、怖い。そりゃ友達できないわ。
　遠藤はそう言うや否や、ガクッと膝から崩れおちた。
「オレは、ずっと結城が好きだ。それに近づいた智広は嫌いさ！　大嫌いさ！　でも、アイツと趣味嗜好バッチリ合うんだ。漫画やゲーム、アニメ、スイーツ、入浴剤、アロマ、果ては使っているコスメ合うんだ！」
　だから、お前、結城よりも肌ツヤいいんだね。智広も無駄に肌がきれいな理由がよく分かったよ。
「そりゃあ友達以上に仲よくなるわ……。それで、お前はどうする。このまま智広に乗り換えるか？」
　俺はがっくりと項垂れる遠藤を呆れた表情で見やった。
「――明日、祝日で学校休みだろ。智広が考えてくれるデー……遊びのプランがあってな。その時に最後、ケリをつける」
「……そうか。それじゃがんばれ」
「ちょっと、待ってくれ！　そん時、俺が逃げ出さないよう、中瀬、お前見守っていてくれな

いか？」
「はぁ？　なんで俺がお前らの後つけなきゃいけないんだよ」
「頼む！　こんなこと親友の中瀬にしか頼めないんだよ！　俺のお手製のバスソルトやるから！」
「いらねぇよ！」
「あ、バスボムの方がいいか？」
「そういう問題じゃねぇ！　風呂から離れろバカ！」
「なぁ一生のお願いだ。頼む！」
　そういうと遠藤は床に両膝と両手をつき、頭を下げて土下座の姿勢を取った。
「おい、やめろよ。そういうの……分かった。見ててやるよ」
　最初と最後だけな。
　後はそういうネタが好きな結城に張らせて、遠藤が何か聞いて来た場合結城を中継にして連絡すればいい。
「すまねぇ！　恩に着るぜ！」
　はぁ、元は俺が撒いた種とはいえ、面倒くさい事ににになった。明日、どうなることやら。そんなことを考え、俺と遠藤は喧噪が消えた学校を後にした。
　＊＊＊＊
　大変面倒くさいことになった。俺は二時間、行列を並んだ後、満員の店内で一人、パンケーキを食べ、大きくため息をついた。現在時刻午後三時、朝から自然公園やら映画館やらに付き合わされて俺の疲労はピークに差し掛かっていた。
　昨日の夜、結城に連絡したところ、部のカメラが一つ壊れていたとのことだったので、新しいカメラを買いに今日は出かけるとのことだった。そういえばこの前一個なかったな――。
　いくら説得しても、カメラの用事を優先されて、結局一人でイチャイチャしている二人を尾行することになった。俺は変装用に着ただぼっとした服装と帽子がとても重く感じた。
「はい口あけてっ。あ～ん」
「あ～ん。うん！　こりゃうめぇ！」
「そうだね、二時間待ったかいがあったね」
「ちげぇよ、智広に入れてもらったからうまいんだよ」
「ちょっと、やめてよ。そういうの～」
　恋のキューピットならまだしも、恋愛の成就がどう転がってもさほど興味がない人物を朝から監視することは拷問に近い。
　なんでこうなったんだ。俺は部活動中にイチャイチャしているのが目障りなだけであって、それさえなければ、あの二人が、というか遠藤がどっちに付き合っても別に気にもとめてない。その時、ヴヴヴとスマフォが振動した。見ると二人でパンケーキを食べている写真を遠藤が俺に送ってきた。
　食ってるの知ってるわ！　後ろで会話も丸聞こえじゃボケ！
　途中で抜け出そうとも思ったが、遠藤が定期的に俺が近くにいることが分かるように位置情報＆時間付きの写真の提示を要求してくるので抜け出すことは難しかった。また、スマフォのバッテリー切れを起こさないよう、事前に予備のバッテリーを三つも持たせられた。
　あとお礼ということで手作りの瓶詰のバスソルトと、マカロンの形をしたバスボムも同時にいくつかもらい、バックの中身がかさばってしょうがなかった……。
「ねぇ次はデパートでショッピングに行こう」

「いいな！　俺もちょうど入浴剤が切れてたから見に行きたかったんだ」
　遠藤よ、俺のやろうか？　そう毒づきながら後を付ける。
「そう言えばさァ……あそこの帽子被ってる人、なんか朝からずっといない？」
　ハッ！
　俺と遠藤は同時に身体が震えた。しまったッ！　気が緩んで近づきすぎたかッ。背景にゴゴゴゴゴゴと擬音が描かれているような緊迫した空気が流れる。
「ま、まさか智広、そんなわけないだろッ」
「ふーん。そうだね。考えすぎかもね」
　俺はコホンと咳払いをし、帽子のつばに手を当てそそくさとその場から歩き去ろうとした。
「イタッ！」
　前がよく見えなかったせいか、近くに麦わら帽子を被った高校生くらいの女子がいることに気づかず、ぶつかってしまった。その子は転んでしまい、その場にバックの荷物を派手にまき散らしてしまった。
「すいません！　俺の不注意で！　すぐに拾います」
　俺は財布、手帳、イヤホン、スマフォ、ビデオカメラなどをササッと拾い集め改めて謝罪をした。
　顔が見えなかったので女性は怒っていたのか、恥ずかしがっていたのか分からないが小声で――どうも……。とそれだけ言って立ち去っていった。俺も慌てすぎだ。もっと落ち着いてゆっくり歩こう。
「――あの、コレあなたのですよね？」
　後ろから智広の声が聞こえる。ゆっくりと振り返ると彼の手には俺のバックに入れたバスボムが握られていた。
「――い、いえ……彼女が落としたんじゃないですかね」
「――いや、そんなはずはない。僕はハッキリと見たッ！　貴方のバックからこれが飛び出すところをッ！」
　汗が尋常じゃないくらい身体中に溢れ出すのを感じるが、心拍数が上昇し、呼吸が荒れ、それを拭く余裕などなかった。
　さらに、逆光によって智広の顔がどす黒く見え、瞳だけは何一つたりと見逃すまいと爛々と光っている様が、蛙をにらむ蛇の如く鋭い眼光を放ち、俺をその場から動けなくしていた。
「――い、いやぁ何かの見間違いだと思いますよォ！　だって、ぶつかった瞬間ですよ！　見間違えてもしょうがないじゃありませんか！　とにかく、そのバスボムは彼女のだから急いで渡しにいかなきゃッ！」
　俺はバッと彼の手からバスボムを取り戻そうとしたが、彼は素早くひゅっと手を引っ込め一歩距離を取った。そして特異なポージングで俺に言い放った。
「――僕ねェ……コレと同じ形の奴をここにいるガタイのいい遠藤くんからもらったことがあるんですよォ。その時、最初僕にはどっからどう見ても、マカロンにしか見えなかったんですよねェ。――それなのに、あなたの持ち物ではないのにッ！　なぜ一度チラッと見ただけでこれがバスボムだって分かったんですかねェッ！」
「グッ……」
　遠藤が無言で立ち尽くしている中、瞳で何かを訴えているのが感じ取れる。――俺は静かに帽子の鍔に手をかけた。
＊＊＊＊＊

「なぁ～んだ。中瀬くんじゃない。どうしたのこんな所で？」
　俺は重要なところだけは隠しつつ、今日跡をつけてきた理由を話した。ガサツな遠藤だから今日のプランを台無しにしないか心配でついてきたこと、そしてバスボムは遠藤からお礼としてもらったことなどをしゃべった。
「なるほどねぇ……。そうだったのか。もぅそれならそう言ってくれればよかったのに」
「智広、怒ってないのか？」
「別に？　むしろ最初から三人で行けばよかったな！」
　いや、それはそれでどうかと思うが……と言いかけたとこでグッと俺は堪えた。
「まぁとにかく、ショッピングいこショッピング！」
「そうだな。……すまねぇな遠藤。バレたわ」
「いや、何、そもそもお前にバレないようにしろとも言ってなかったからな。気にしないでくれ、お前が近くにいただけでよかったんだ。俺は――」
　ぶっちゃけると、その後はもう三人で行動することになったので、気をもみながら尾行する心配もなくなり、その後は普通に楽しめた。二人がイチャイチャするのも最早どうでもよくなり、自然にスルーすることができた。
　そして、ディナーを終えたあと、俺たち三人は浜に出た。
　既に日はとっくに落ち、夜空に見える三日月は今日一日の俺の醜態を笑うよう顎を突き出していた。
　ザァーッ――ザァーッ――と海は静かに寄せては返し、磯の香を柔らかに放っていた。
「中瀬……オレ、伝えてくるわ」
「ああ。がんばれ」
　俺は大きな彼の背中をポンと叩いて押し出すと、彼は一歩一歩砂を確かめるように智広のもとへ歩み寄って行った。
「なぁ……智広。今日は色々ありがとな。すげぇ楽しかった」
「そう⁉　それは良かった。」
　智広はニヤッと笑っていた。
「俺は、これからも……こういった時間を……」
　智広は何？　という風に聞き返してくるが、そこで遠藤は頭を足元の砂に向けてしまい、言葉は途切れてしまった。
　いけッ！　遠藤！　俺は黙って声がはち切れるくらい心の中で叫んだ。
「俺は！　お前とこれからもずっと楽しく笑っていたい！　お前の綺麗な笑顔を見ていたい！　笑顔にしてやりたい！　だから……俺と付き合って、ほしい」
　よく言ったな。身体はデケェくせに、昔から肝心なところは臆病なお前にしては上出来だ。しかし、中学から思っていた結城をけったか。ま、それもそれでいいだろ。
　問題は部活中にイチャイチャすることだが、まぁそのうち扱いにも慣れるし、今日みたいに気にもなくなるだろう。
　智広は目を見開いてややびっくりした表情だった。しかし、徐々に笑みを取り戻すと、ゆっくりと深呼吸をして返事の言葉を押し出した。
「ごめんなさい。僕、男の人とは無理です」
「……え？」
　固まった遠藤に代わって俺は思はず聞き返してまった。
「ちょ、ちょーっと待った智広くん。百歩譲って遠藤をふったことはいいとして、お前、男とは

付き合えないのか？」
「はい」
「え、でも、ちょっと待てよ。お前今までコイツと二人でプリクラいったり、一緒にパフェやパンケーキやらを食べさせあったりしてただろぉお？」
「ええ」
「いや、それは明らかに友達の垣根を越えているぞ！」
「そうですか？　僕はこれくらい『友達』ならやるかと。兄もこれくらいスキンシップにすぎないって言ってましたから」
「ちょ、なら、さ。もし、今遠藤が智広くんにキスした場合、これは君の言う『友達』のスキンシップに入るかい？」
「入ると思います。ほら、よくあるじゃないですか。缶ジュースの回し飲みの間接キスとか！　僕はやったことないですけど。間接キスがあるなら直接キスがあってもおかしくないと思います！　兄もそんなこといってました」
　智広はニコニコと悠然当たり前のように答えた。
　そうか。コイツは長い間友達がいないせいで、友達という概念がよく分かってないんだ。
遠藤……？
「オイ、智広ぉお」
「何？」
「俺とは遊びだったのかよぉお！　俺は！　俺は！」
　遠藤は俺の首を肩に回し、強引にその場から逃げ出した。
「ちょっと、遠藤！　気持ちは分かるけどよぉお」
「分からんでいい！　今日はカラオケオールだ！　付き合ええ！」
　俺は心底嫌そうな顔をしてため息をついた。天を仰ぐと三日月が俺たちを爆笑してのけぞっているように見えた。
＊＊＊＊＊
――素晴らしい。あなたの脚本は最高だ。各人の性格を把握し、少し言葉を添えるだけで人を動かすことができるとは。
――ちょっと、反省してくださいよ。危うく計画が露呈しかけたんですからね……。他の機材も回収は住みましたか？
――ええ、部室にあるファンシーグッズに隠したカメラはすべて回収したよ……。これで今まで最高傑作が作れる！　しかし、僕が言える義理はありませんが、よく弟にこんなひどい仕打ちができますねぇ。あ、報酬はきちんと明日払いますよ。
――お互い様ですよ。彼も目的のためなら手段を選びません。血は、争えませんから……。
END

アスパラガス

文部　蘭

自分の身体が一瞬、液体のように見えたのは間違いなかった。空気中に溶け出し、蒸発するように全身が液状化する。そして、透明だった。背面に景色が映り込むほどに。ひょっとすると、僕は噴水から湧き出る水飛沫（しぶき）にでもなったのではないか、そんな気持ちになる。

車に轢かれたのだ、と理解するまでには、少なくとも六秒はかかった。ボンネットに勢いよく突き飛ばされ、五メートルほど僕は宙を舞った。そして地面に頭が強く打ちつけられたその瞬間、アスファルトの冷たさを肌に感じた。続けて、頭蓋から溢れ出る血の生温かさが襲ってきてはじめて納得した。そうか、僕は今轢かれたのか、と。

突き飛ばされた瞬間を表現するのなら、イルカショーのジャンプを思い浮かべてくれるといい。天井から吊るされた輪っかに勢いよく飛び込んでいく、あのイルカたちの勇姿を。死ぬ直前にもなって一体僕は何を想像しているんだろうか、と自分自身に呆れる。きっと、「呆れる」という動作もどうせこれで最後だ。

しかし、油断していた。竹辺とつい先日入籍した僕は、今日から同棲生活を始めたばかりだったのだ。缶ビールを買ってくる、
とマンションの向かいにあるコンビニエンスストアを訪れるため、道路を横断したまさにその時だった。

地面に横たわる僕に大声で話しかけてくる女性がいる。どんな女性か一目見てみようと瞼を持ち上げてみるが、意識が朦朧とし、相手の顔をうまく認識できない。垢ぬけていない声質から、おそらく大学生だろうと勝手に決めつける。

竹辺は今、どうしているだろうか、とふと思った。もうすぐ食卓に缶ビールが追加されるだろうと期待し、つまみがあったかどうか冷蔵庫を漁っているかもしれない。はたまた、僕が部屋を出る直前まで彼女が手にしていた「こちら側のどこからでもお切りいただけます」のどこからも切り口を入れられずに小言を呟かせていたマスタードソースのマジックカットと、未だに格闘しているかもしれない。

とりあえず、この勝負は竹辺さん、あなたの勝ちのようだ。ジャム瓶の蓋が開いたかどうか、蛍光灯が切れていないか、懸賞がひとつでも当たったかどうか、２０キロのジョギングは果たして達成できたのか。分からないことは多いが、おそらくそちらの方が多くの目標をクリアできたはずだ、と今なら自信を持って言えるんだ。だって、僕と結婚してしまったじゃないか。

「死ぬのって、こんなに怖かったんだ」

誰に話しかけるでもなく、僕は真っ赤に染まったアスファルトに向かってそう呟いた。

もし今、手元に針と糸があったのなら、すぐにでも人生の台無しにしてきた部分をきつく縫い合わせてしまいたかった。むしろ、そうしなければならない程の強迫観念を抱いた。だって、そうじゃないか。「人生は一度きりだもの」

Open Your Eyes

「予定命日」。二〇五〇年現在、常識の一部と化した概念だ。

Clap Your Hands

毒々しい色をしている。振動するたび、お利口に波紋を作る葡萄色の液体の表面に顔が映り込む。その様に安心し、谷田部駿(しゅん)はワイングラスを片手に相席の女性と乾杯をした。

「でも、婚活パーティーってこんなに人来ると思ってなかった」

逆接から入った話題の振り方に違和感を覚えつつ、谷田部は女性の話に耳を傾けていた。焦げ茶色の巻き毛が瞼に覆いかぶさり、鬱陶しく思い払い除ける。

「私、適齢期って言葉すっごく嫌いなんですよねー。なんか予定調和みたいで」

女性の名は、竹辺鈴(すず)といった。姓名を入れ替えて逆さから読むとへんちくりんですよねー、と自己紹介を済ませた彼女の唇は不自然に真っ赤だった。あまり化粧事は得意ではないらしく、アイシャドーの用い方にも不器用さが残る。

ただ、竹辺鈴はどちらかといえば美人に属する類の女性だった。目や鼻はきっちりと整っており、清潔に揺れる黒髪も肩のあたりでカーブを描き、妖艶さすら醸し出していた。谷田部は話に相槌を打ちながらも、時折竹辺の美貌に吸い込まれるように見入っていた。

「ところで、谷田部さんはいつ結婚したいんですか？」

話を急に振られたことに驚き、谷田部は動揺でワイングラスをひっくり返してしまった。純白のテーブルクロスに葡萄色のシミができる。

「ほんっと、すみません！」

「大丈夫ですか。急に溢(こぼ)しちゃうんだから、びっくりしたー」

竹辺は布巾で拭くのを手伝ってやり、谷田部を叱責しなかった。逆に、必死に謝る谷田部を見て、堪(こら)えられずに笑い出したのだった。

「私、おっちょこちょいな男の人って案外好きですよ。肩ひじ張ってないから、気を遣わなくてもいいというか」

「それは褒めてるんだか……」

「それはそうと。さっきの質問、答えてください」

「そうでした。結婚かあ。できれば今すぐにでもしたいけどなあ」

「今すぐ？」

「はい。『予定命日』ってご存知ですよね？」

「うん。その人の健康状態とか日常生活での注意力・危機管理能力を数値化したデータから割り出した命日の概算値。お父さんが昔ね、その研究所の所長だったから知ってる」

「僕の場合、その予定命日が……一週間後なんです」

「えっ、一週間後？　もうすぐじゃん」

そう言った後、竹辺は黙ってしまった。知る必要のないことを聞いてしまった、その後悔がただ残るだけだった。しばらく間が空いた後、気づけばこう切り出していた。

「じゃあ、谷田部さん。私と結婚してください」

またも沈黙がふりかかる。

「えぇぇぇぇぇぇッッッ～～～～～～！」谷田部は思わず大声を出してしまった。パーティ会場の他の客たちの視線が谷田部に集まり、一同が絶句している。あ、いや、なんでもないです、と一言添えると、彼らは興を失ったように顔の角度を元に戻した。

「いやいやいや、突然結婚してくれなんか言うから。急に何言い出すんですか」
　谷田部が発言の真意を尋ねると、竹辺はふふっ、と笑った。取り乱す谷田部とは対照的に、屈託のない微笑みを浮かべて冷静に振る舞い、性的な色気をも醸し出している。
「だって、あなた一週間後にお亡くなりになるっていうもんだから。最後の最後に結婚生活をエンジョイしたいんなら、私は乗ってあげるよ。もう時間ないんでしょ？」
「それはそうですけど。僕はあくまで冗談で結婚希望って言ったんです。残り一週間の余命で本当にそれが叶うなんて思っていませんでしたし」
「だったら、なおさら私との結婚が向いてるかもね」
「どういうこと、ですか？」
「つまり、私と結婚すればあなたは予定命日を変えられるってこと。平たく言えば、運命を変えられるの。私にはその自信があるし、ちゃんとした実績もある」
「それって……信じていいんですか」
「今ここでは詳しく話せないから、また今度ね。でも、嘘はついてないわ」
「はあ……」
　その後、二人はメールアドレスを交換し、そのまま別れた。谷田部はいつまで経っても竹辺鈴の妖艶な笑みを忘れられず、家路までの歩みが自然と遅くなってしまっていた。

Think Your Destiny

こんにちは、昨日の竹辺です。ところで、谷田部さんは一週間後に予定命日が来ると仰っていたけれど、どんな理由でそんな診断を受けたんですか。差し支えなければ、私に教えてくれませんか。返信待ってます。

　八畳の和室。昨日の婚活パーティーから一夜が経っていたが、谷田部はアルコールによる疲労が蓄積していることに嘆息し、起床した。布団をたたみ、欠伸をしながらスマホを覗くと、そこには竹辺鈴からの受信メールが一件だけ表示されていた。
　どんな理由で？　果たしてそれが診断の内容を問うているのか、それとも診断を受けた動機を問うているのか、起床したばかりで頭が働かない谷田部には判別がつかなかった。後者に答えるのは簡単で、ただ熱が下がらないため訪れた病院で付随的に「予定命日」の検査結果をもらっただけだ。特別「予定命日」そのものを診断してもらう目的で病院を訪ねたわけではない。
　問題は、前者だ。その診断書に記載された内容、医師の口から告げられた事実。それはあまりにも残酷で、谷田部は当初受け入れることができなかった。それどころか、その事実を呑み込んでしまえば、今生きている一切の理由を失うかもしれないとさえ思ってしまった。
　竹辺へ返信する。

　昨日はどうも、谷田部です。僕が一週間後に「予定命日」を迎えることは事実です。その診断理由は、「瞬間的注意力の急低下」だそうです。どうやら僕の脳内では、この瞬間的注意力が26分経過する毎に0.175カナス(kanas)ずつ低下しているらしく、正常値が約67.85カナスなのでおよそ一週間後には僕の瞬間的注意力はゼロになります。そうなると、信号も識別できないし、何より周囲に意識が向かなくなります。交通量が特に多いこの街では、そうなった時には確実に事故死ですね、って。
　そこまで文字を打ち込んで、送信する。同時に、ため息が漏れる。今こうしている間にも、死

がしっかりと近づいている。谷田部はその実感を噛みしめるあまり、逆上せそうになる。
　いつから、こうなった？　谷田部は自分自身の人生を振り返ってみた。学生時代も、そしてサラリーマンとなった今も多くの人に囲まれ、それなりに幸せだった。順風満帆とはいかないまでも、退屈を凌げるぐらいには楽しく毎日を過ごしてきた。決して蛇蝎の如く扱われたことはなかったし、まして憧れられることもなかった。その平凡さが好きだった。
　そこまで振り返ったところで、スマホが鳴る。

　Re:返信ありがとね。
　谷田部さんの「予定命日」がどうして一週間後なのか、よく分かりました。気分を害されたら申し訳ないのですが、そういうご病気なのですか？

　Re:漸進性過興奮ショック症という病気だそうです。僕も、初めて聞きました。

　Re:そんな病気があるんですね。なんというか、理不尽。
　でも、谷田部さん。私なら、その「予定命日」変えられるかも。よかったら、明日一緒にお出かけしませんか。二丁目の真珠公園の噴水の前で待ってます。

Revitalize Your Brain
　翌日、正午。真珠公園、噴水前。谷田部はこれから自身の人生の答え合わせをさせられそうな心持ちがしたせいで、気が気でなかった。
「お待たせー」
　陽気な笑顔を携えた竹辺が、そよ風のようにやって来た。二人は簡単な挨拶を交わし、それから噴水脇のベンチに腰掛けた。
「ねえ、夢相撲しない？」
「ゆめずもう？」
　谷田部は竹辺の発言の真意を汲み取ることができず、首をかしげる。
「そう、夢相撲」対照的に竹辺は凛とした佇まいだった。
「いい、谷田部さん。一度しか説明しないから、ちゃんと覚えてくださいよ？　夢相撲っていうのは、腕相撲とか指相撲とかそういった類の遊びと同じで勝ち負けがあるの。まず最初に相手同士で勝負期間を決める。次に、その期間中に成し遂げたい自分の夢をできるだけ多く公言する。一年だったら一年、十年だったら十年後に答え合わせをする。要は、たくさん夢を叶えた方が勝ち」
　そこまで竹辺が説明をし終えると、彼女の足元に鳩が数羽集まっていた。谷田部がなんとなしに眺めてみると、その鳩たちはそそくさとその場を離れていく。
「でも、竹辺さん。その勝負には構造的矛盾がありますよ」
「どんな？」
「だって、できるだけ多くの夢を叶えた方の勝ちってことは、叶っても大して嬉しくないような小さな夢ばかりを並べた方が有利になります。それじゃ、勝負にはならないですよ」
「そういうとこですよ、寿命が縮む理由」
「へ？」
「いいえ、なんでも。それでいいじゃないですか。ジャム瓶の蓋が空きますように。蛍光灯が切れませんように。懸賞がひとつでも当たりますように。２０キロジョギングできますように。この一週間で私が叶えたい夢、もう四つも言いましたよ」

「だったら、僕も。風邪を一度も引きませんように。電車で一度も乗り過ごさないように。目覚まし時計の電池が持ちますように。Ｔポイントが１００貯まりますように。あと」
「あと？」
「予定命日が覆りますように」
「じゃあ、私ももう一つ」
「うん」
「今、目の前にいる人と結婚できますように」

Dive Underwater
　真珠公園を後にした谷田部と竹辺は、ムーンピアワールドと呼ばれる隣町の遊園地を訪れていた。
　比較的空いていた観覧車のゾーンへと滑り込む。黄色に水色、ピンク、黄緑と各々色彩が異なっており、前に並んでいた学生のカップルがピンクに乗ったのを見届け、後続の黄緑に二人は乗った。
　二人が観覧車の中へ入り腰掛けるのと同時に、車体が微かに揺れる。扉が若い女性従業員によって閉じられ、空中遊覧が始まった。地面が遠のき、園内の景色が眼下に広がっていく。谷田部は高所恐怖症であるため、窓から下の方を眺めるだけで青ざめてしまっていた。そんな谷田部とは対照的に、竹辺は落ち着き払った様子で景色に見入っていた。
「竹辺さん、高いところ平気なんですか？　僕もうギブアップ寸前なんですけど」
「私もね、昔は高所恐怖症だったの。透けガラスのエレベーターとか全く乗れなかったもんね」
「昔は、ってことは今は平気なんですね」
「私の場合は、高いところを空中だと思いこんでしまうのが駄目だったの。だったら、空中じゃなくて水中だと思えばいいんじゃないかってひらめいて。水中ならいずれ浮かんで底の底までは落ちきることはないでしょ？　そう思うようにしてからは克服できたの」
　予想もしていなかった返答に谷田部は一瞬言葉に詰まった。同時に、そんなふうに高所恐怖症が克服できるのなら、もっと早くに知っておけば良かったと後悔する。
「でも、竹辺さん。水中だと呼吸ができないですよね」
「屁理屈をいう人だね」
「あ、いや。すみません。つい」
「いいよ。素直なことの裏返しでしょ」
　観覧車を降りると、竹辺は思いっきり深呼吸をしてみせた。その朗らかな横顔に、谷田部は思わず見とれてしまっていた。

　遊園地を後にしてから、すっかり日も暮れた頃、二人はイタリアンバルを訪れた。お酒と少しのパスタを食べながら、雑談をして楽しんだ。幼少期の話や大学時代の武勇伝、兄弟にまつわる話。掘り下げれば掘り下げるほど会話は膨らみ、あっという間に三時間が過ぎていた。
　夜も十一時を回り、二人はホテルへと身体を滑り込ませた。部屋に入るのと同時に私服を脱ぎ、ベッドの上で二人は強く抱き合った。竹辺は我慢しようともせずに喘ぎ声を上げ、谷田部は何度も射精をした。翌朝、目が覚めると二人はホテルを出て、それぞれ帰宅することにした。
　その翌日も二人は共に出かけた。残り三日で「予定命日」を迎えることになっている谷田部の容態は次第に悪化してきていた。時計や信号、人や車の往来に対し、即座に判断ができない。付き添う竹辺の力なしでは街を歩くことさえままならない。そんな状態だった。

昼過ぎ、二人はオリンピア水族館を訪れた。館内は薄暗く、陽光がぎらぎらと容赦なく照り付ける館外と比べるとまるで別世界だった。うわあ綺麗、と青白い輝きを放つ水槽に感嘆する竹辺のうなじがその輝きを反射し、谷田部は思わず視線を奪われる。
「見て、近くで見ると意外におっきいんだね」
ひときわ大きな水槽の前で竹辺が足を止めた。体長三メートルほどのマンタの展示だった。二人のちょうど目の前にいるマンタは見物する人間たちを全く気にも留めずに、堂々と遊泳している。
そのマンタが腹を見せた瞬間、その場から移動しようとした竹辺が怪訝な表情をし、谷田部に耳打ちした。
「お願い、隠れて」
「えっ？」
「いいから隠れてて」「隠れるって、どこに？」
「ここにいたのか、すず」
谷田部には聞き覚えのない声が、背後から聞こえた。太く、よく響く低音ボイス。振り返るとその声の主は、オールバックに焼けた色黒の肌、黒のＴシャツに真っ白なジーンズを穿き、白衣を身に纏っていた。上背は谷田部よりも頭一つ高く、予想される年齢とはそぐわないほど筋骨隆々としたしっかりとした体付きをしている。
「この人、だれ？」谷田部は竹辺に尋ねる。
「マンタ」
「は？」
竹辺の返答に谷田部は困惑した。同時に、水槽の中で優雅に浮遊するマンタと目の前にいる白衣の男性を交互に見つめる。
マンタは白衣のポケットからスマホを取り出し、地図の表示されている画面を竹辺に向けた。
「すずが家出してから五日経つが、もう我慢できんよ。こんな時のためにＧＰＳをつけておいて正解だった」
その一言で谷田部は状況を理解した。目の前にいるおじさんは竹辺の父親で、竹辺は五日前に家出をした。婚活パーティーのあの日だ。そして、竹辺はこの場所で追跡してきた父と邂逅した。とすれば、昨日ホテルを出た後、竹辺は帰宅しなかったのか。加えて、谷田部は二人の関係性をなんとなく読み取ることができた。竹辺はマンタを嫌い、対してマンタは狂気にも似た親心を竹辺に向けている。満面の笑みを崩さないマンタと嫌悪感を表情にたっぷりむき出しにする竹辺の様子から、第三者である谷田部にもその程度のことは容易に察しがついた。
「今すぐに帰ってくれば、許してあげるよ、すーず」マンタは、無理やりこしらえた笑顔を竹辺に向け、返事を促す。
「い、嫌よ」竹辺は絞り出すように、そっと言った。
「そんな男、放っといてさ。さあ、すず」
「絶対、嫌」
「父さんのとこへおいで！」マンタは笑みを崩さない。
「谷田部さん、行こっ」
そう言うと、竹辺は谷田部の手を引いて水族館を後にした。

Illuminate One Day
二人はその後、電車で隣町に移動し、あるハンバーガーショップを訪れた。共にアイスコーヒー

を注文し、二人掛けのテーブルを見つけ、適当に腰掛けた。
「さっきのが、君のお父さん？」
　谷田部は、重苦しい雰囲気を少しでも和らげようと、なるべく軽めの調子で尋ねた。
　対照的に竹辺はため息を交えながら、答える。「そうよ」
「気を悪くさせたら申し訳ないんだけど、お父さんとは何か確執があったりするのか？」
「確執……といえば確執かもね。私は昔からマンタの研究が気にくわないの」
「マンタ、ってのは」
「私の父の本名は竹辺萬太（まんた）。国立超科学研究所の元・所長。今は退いて、後援会の会長よ」
「へえ。超科学って、はじめて聞くけど」
「そうね、普通の人は知らないでしょうね。簡単に言えば、人智を超えた科学。霊や魂、運命とか予言とか、そういう世間一般ではオカルト扱いされてることを科学に持ち込んだってわけ。予定命日っていう概念もその研究過程で生み出されたの。それでマンタは所長にまで上り詰めた」
「その研究内容が、気に食わない？」
「私はね。そもそも予定命日なんて信用してないし。すべてが予定調和で進んでるなんて考えたら、生きづらいよ」
「たしかに……そうだね」話の次元が予想を超えたことに戸惑い、谷田部はアイスコーヒーを啜る。
「それ、私のだから」
　すかさず竹辺が谷田部の持つコーヒーを指さす。谷田部は戸惑いからか、相手のコーヒーを気づかずに飲んでしまった。
「ごめん」
「谷田部さんの予定命日は確実に迫ってる。今も、自分のコーヒーがどっちか判別できないくらいに。でも、私は予定命日なんて信じたくないの。絶対に」
　竹辺の気迫に半ば気圧され、谷田部はコーヒーを一気に飲み干した。
「そうだ。マンタにまた追いつかれないうちに見せたいものがあるの」

Put Us in Shackles

目的の地へ向かうため、レンタカーを借りた二人は海岸線をドライブしていた。その寿命が尽きてしまう前に、もう一度車に乗った時の高揚感を味わいたい。そんな突然の谷田部の申し出であったが、竹辺は抵抗もせずに承諾した。現代では、完全自動運転が当たり前となっているため、自動車事故はほぼ皆無であることに裏打ちされた安心があったからだった。
　車中は静まり返っていた。谷田部は運転に全神経を注ぎ、「最期」を感慨深く味わっている。そのせいかもしれない。はたまた、竹辺は晴れ切った青空を存分に反射する海面をただ静かに眺めている。そのせいでもあった。
　幾分か経った後、谷田部はようやくその静けさに気づき、車内に取り付けられた音楽プレイヤーを起動し、適当に洋楽をセレクトした。
「好きなの、この曲？」竹辺が尋ねる。
「うん。歌詞の意味はよく分からないけど、気分が高まるんだ」
「誰が歌っているの？」
「イギリスのロックバンド」
「へえ。そのバンド、格好いい？」
「格好いいよ。とても」

「そう」
　会話は途切れてしまったが、不思議と気まずさは存在しなかった。その後も、どちらから会話を切り出すということもなく、ただただ静かなドライブが続いた。
　谷田部は、この時間がいかに空虚で無味乾燥であるかを知っていた。普段であれば、必ずと言っていいほど遠ざけようとする時間。何事も生まない非生産的なひととき。しかし、その時間さえも、今の谷田部にとってはついに意味を持ってしまった。
　そのことが余命を延ばすことは決してない、と理解しながら。

　目的地に到着した途端、谷田部は思わず言葉を失った。
　目の前には、真夜中の工業地帯が広がっていた。
　谷田部たちは少し高い丘の上から、その工業地帯を見下ろす形で一望している。眼下の景色はまさにジュエリーボックスを開けたように、輝きを放っていた。
　黄金色に輝きを放つ建物があれば、明かりを纏わぬ真っ黒な建物もある。その混在が美しいコントラストを成し、漆黒の夜を彩っている。数本そびえたつ煙突はその一帯を見守っているようにも見える。また、時折聞こえてくる金属音が妙に心地よく、安心感を与えてくれるのだった。
　そのあまりの美しさに、谷田部は我を忘れそうになる。「絶景って、こういうのを指すのかもな」
　竹辺は頷く。「そうかも」
「なんか綺麗すぎて、自分が汚い存在みたいに思えるな」
「そういう感覚、なんか分かる。絶景って、景色を絶つって書くものね。私たちが目の前の綺麗な景色に完全に溶け込めないのはさ、きっと私たちが不純な生き物だからかもね」
「そうだなあー。その不純な僕たちが、純粋さに憧れるんだから、不思議だよな」
　話しながら、会話の出口がないことに谷田部は気付いた。だが、それも込みで現在の状況を受けいれた。そして、ふと竹辺が何故自分をここへ連れてきたのか、推し量ろうとする。
　その谷田部の思案を遮るように、竹辺が突然泣き始めた。
「どうした？」谷田部が尋ねると、竹辺は首を横に振るばかりだった。
「辛いことが我慢できないんなら、力を貸すよ。僕でいいんなら」
「谷田部さんは……私を大事にしてくれますか。私の母は、私が生まれたと同時に私を捨てて逃げました。残された父は行き場のなくなった愛情をすべて私に注ごうとしましたが、私には狂気にしか思えないんです」
　竹辺は両手で顔を抑え、俯いてしまった。
————この人は、心の拠り所を強く求めてきたんだ。今までも、そしてこれからも。
　咄嗟に、谷田部はそう思った。その心中深く埋め込まれた深い闇は、到底知りえるような代物ではない。としても、それを多少なりとも和らげてやることはできるのではないか、と。
　谷田部は、竹辺の両手をとり、静かに告げた。
「竹辺さん、明日式を挙げよう」

——Close Your Eyes.

「今日から宜しくお願いします」竹辺は丁寧にお辞儀をしてみせた。
「いいよ、そんな。堅苦しいのはよそう」
　今日から同棲を始めた二人の、新たな一ページが刻まれようとしていた。まだ生活感の無い、

閑散としたリビング。キャリーケースを横に倒し、これから二人だけの私空間をつくろうとするところだ。
「ねえ、記念にお祝いしない？」「じゃあ、ビール買ってくるわ」
　そう言い残して、谷田部は玄関の外へ姿を消した。　　終

まっしろしろ

文部　蘭

赤には　土が埋まっていて
青には　月が眠っている
黄色は　由(よし)を携えて
黒には　帰る里がある

茶色なんて　十字架をぶら提げ
緑と紫は　糸が絡まっていて
橙は　木に登っている

僕は白
なんの変哲もない
なにも与えられてない
生まれつき？
そんなの僕だって知らないのであります
あるいは　そうかもしれない

けれど

一本頭に被せていただいて
百を食(は)む
それで御相子(おあいこ)でしたね

熱

文部　蘭

三十六度五分で始まった　平熱を携え
この地球に産み落とされた
そんな僕らは
ジグザグに管を潜り
終着駅を目指す

急転直下愛の告白　身体中火照って
気が付けば高熱　くらくらクラゲ
忘れたい大喧嘩　何なの罪悪感
沈み過ぎて低熱　カチカチ価値観

ツーストライク　スリーボール
もう後が無いなんて叫び
熱気ムンムンの半球を駆け抜ける
連戦練磨熱中し　我忘れ
ヒーローインタビューで熱弁
家帰ればくたくた　熱湯風呂へ直行
あの娘との熱帯夜に　思わず熱愛

こんなこと繰り返し
また平熱に戻る
この地球を去る時もきっと
そんなんなんだろな

笛の音は聞こえない。 ＨＩＣＡＬ

笛の音は聞こえない。

ＨＩＣＡＬ

１

「あら、起きたのシュン君、あけましておめでとう」
「ああ、うん、母さん。新年早々なにがあったの？」
　今年最初の母さんは、エプロン姿で右手にはモデルガンを握っていた。四十超えた二児の母が何やってるんだと思うが、俺にとっては見慣れた光景だ。俺はその銃声を十七年間聞いている。
　ついでにその銃はグロック１７。オーストラリアのグロック社が開発した自動拳銃であり口径は九ミリ、装弾数はダブルカラム・マガジンによる十七＋一発。フレームやトリガー、そして弾丸にプラスチックが使われている。
「今年のオトシダマよ。弾丸の弾でお年弾」
　そんな冗談とともに銃口を向けないでほしい。俺はそそくさとコタツの中へ避難する。やはりコタツには温かい引力がある。今日はずっとこの中でゴロゴロしよう。
「そうだ、シュンちゃん。ちょっと用事を頼んでもいい？」
「いやだ」
「井原城神社まで走ってきてほしいの」
　イバラジロジンジャ、イバラジロジンジャ……と言葉を脳内で反芻させて、ようやく思い出せた。たしか隣町のそのまた隣にある、比較的広い神社だ。
「初詣ならそこの公園にある神社でいいじゃん」
　俺は人ごみが嫌いだ。井原城神社は広いだけあって、元旦には初詣で人がたくさん来る。それを目的にしてるのか屋台もたくさん来て、もはやお祭り状態だ。
「でもねぇ、あそこじゃお守り売ってないの」
「お守り？　なんで？」
　コタツから半身だけをだした。なぜわざわざお守りを買わなくちゃいけないのか。まあ、その見当はついているが。
「合格祈願」
「ああ、ミアのか」
　あいつは今年に――ああ、もう今年だ――高校受験を控えている。受験するのは俺の通う高校だ。もし合格すれば、妹は晴れて俺の後輩になってしまう。
「あいつ自身に行かせればいいじゃん」
「でもミアちゃん、昨日は夜遅くまで勉強してたらしいの。まだ寝てるんじゃない？」
　そういえば、夜遅くまであいつの部屋は明るかった。母さんは勉強だと言っているが、俺はテレビを見ていたと思う。

「じゃあ母さんは？　もしくは親父」
「お母さんとお父さんは公園の方で用事があるのよ」
　じゃあ俺がそっちに、とは言えない。そっちでなにをするのか分からないし。
「お兄ちゃんだから一肌脱いでよ」
「えー、元旦ぐらい家の中でゴロゴロしたい」
「そう言わずにさ」
「よし、妹のためにも一肌脱いでやるか」
　寒さに震える重い身体を無理矢理動かし、銃口から逃れるようにコタツから這いでる。パジャマから着替え玄関へ。
「ちょっと待ってー」
　靴を履いたところで母さんに呼び止められた。振り向くと、その手にはカラフルでスモールな封筒が。
「はい、お守り代。お釣りは自由に使っていいから」
「……うん、ありがとう」
　俺はその封筒を、筆文字で「御年玉」と書かれた封筒をもらった。文句は飲みこみ感謝の意を伝える。
　エプロンのポッケのそれがなければ、ちゃんと抗議できたんだけどなぁ。
　外に出るとやはり風が寒い。風がビュービュー吹いている。これで日本海側は雪が降っているらしい。本当、関東で良かった。そう思いながら自転車にまたがる。
　そしてすぐさま自転車から降りて、我が家の玄関に向かう。勉強で疲れて寝ている妹、同じく仕事で疲れている親父、彼をモデルガンで起こそうとしている母さんに向かって、
　ピン(あ)ポンピン(け)ポンピン(お)ポンピン(め)ポーン。
　ピン(こ)ポンピン(と)ポンピン(よ)ポンピン(ろ)ポーン。
　新年のあいさつを。そしてピンポンダッシミアのように自転車で逃走、もとい神社へと出発する。玄関から大声で呼ばれたが、それは風にかき消されて聞こえなかった。

2

　自転車をこぐこと一時間。真っ赤な鳥居の向こうには、様々な屋台の数々。さすがに人がひしめき合ってはいないが、
　――お前なに吉？　おれ末凶！
　――おっちゃん、たこ焼き三つちょうだい！
　――あけおめー！　大晦日ぶりー！
　浴衣に半纏、コートにジャケット、さらには巫女さんまでもいて、その様はまとまりのない烏合の衆だ。
　自転車を置いて、人ごみの中をかき分けて進む。やがてたどり着いたのは、大きな大きな、観

光名所ほどの大きさではない、本殿だ。
　何年前に建てられたのだろう。そうとう年季が入っているに違いない。俺は神社に興味はないが。用があるのはその前におかれる小さな小さな、もちろん観光名所のそれと比べたらの話だが、小さな賽銭箱だ。
　五円玉を投げ込んで、二礼、二泊手、一礼。面倒な作法を行いつつ、神様にお願い事を。願い事は……これにしよう。
「ミアが合格できますように」
　もっとも受験まで二ヶ月も切っているから、今祈っても意味があるとは思わないけど。
　お祈りを終えると、人ごみをかいくぐりつつ売店をさがす。今日の目的は合格祈願のお守りを買うこと。それ以外に用はない。見つけた売店は運よくも行列が短かった。並んでいる、と思うまでもなく自分の番が来る。
　数あるお守りの中から適当な一個――刺繍で「合格祈願」と縫われた、ピンク色のお守りだ――を手に取り、眼鏡をかけた黒髪の巫女さんにお金を渡す。
「すいません、これ下さ――」
「あれ、米倉じゃん」
　名字を呼ばれて顔をあげる。聞いたことがある声だ。
「げ……清水」
　普段の茶髪じゃないから気が付かなかった。もっと言えば、制服じゃなかったから知り合いだとも思わなかった。
「なに、バイト？」
「うんそう。ミアちゃんはどこ？　どんな浴衣なの？」
　清水は体を乗り出してここにいないミアを探している。目は怪しく輝いている。こいつミアのこと好きすぎるだろ。
「あいつはいねーよ」
　言葉に反応し、清水はあからさまに肩を落としてため息を吐く。そして小さな「使えない」の呟き。神様どうかこいつに天罰を与えてください。
「それにしてもいいお兄ちゃんだね。ミアちゃんのためにお守りを買ってあげるなんて」
　そのニヤニヤ顔が実に憎たらしい。これ以上俺のストレスを溜めないために、お金を渡して帰ろうとする。だがちょうどその時、お守りの隣に置いてある「それ」が目に入った。
「なんだ、これ？」
　一見するとただの小石。形や色は様々で、大きさは手のひらに収まるほど。パワーストーンかもしれないが、俺には「小石」としか言いようがない。
　その小石にあいた、黒くて丸い穴を除いて。
「ああ、これは石笛なんだって。なんでも昔にお怒りになるある神様をどうにか頑張って石笛で鎮めた、という言い伝えがこの神社にあるらしいよ」
　あるとか、どうにかとか、らしいとか、言葉の節々に適当さを感じる。ああ、こいつはそういう奴だったか。

「どんな音がするんだ？」
「さあ？　米倉って古典音楽にでも興味があった？」
「いや、ミアにでも買ってやろうかなあって」
「なるほど……。じゃあ吹いてみるね」
　そう言うと清水は桃色の石笛を、つまりは商品の一つを手に取り、唇につけて吹きだしたのだ。俺や隣で働いていた巫女さんが呆気にとられているなか、きれいな音色が響き渡る。その腕は上手なもので、音程や強弱を唇ひとつで表現している。
　大きな歓声と拍手が、釘付けになっていたという事実に気がつかせた。いつのまにか演奏が終わっていた。
「まあこんな感じ。それじゃ、お守りと合わせて一三〇〇円お納めくださいね」
　どうやら俺が石笛を買うことが決定事項のようだ。もっとも買うつもりだった俺はお金を渡して、お守りと石笛――清水が演奏したそれとは違う、真っ赤に塗装された別のもの――を手に取った。
「じゃ、頑張ってな巫女さん」
「なんでー？」
　呆気にとられる清水をおいて、俺はそそくさと自宅へ帰る。彼女の怒号は人ごみにかき消されて俺の耳には届かない。
「つーか清水のやつ、そこまでして間接キスしたいか？」
　自転車に乗りながら呟く。まあ、痴女から妹を守るのも兄の役目だ。これでミアの唇は守られた。
　そんなことを思っていると、ふと昔のことを思い出した。
　それは俺らが小学生のころ。俺が間違ってミアのリコーダーを学校に持って行ってしまった。それを俺が使うことはなかったが、使われたと思ったミアは泣いて怒った。結局、母さんの説得もあって、俺が謝ったら許してもらえた。
　たったそれだけ。
　そんな些細な出来事。
　でもそれは、俺だから、加害者だからそう思うのであって、被害者のミアはどう思っているのか分からない。お詫びもしてなかったし、もしかしたら心の中でずっと怒っているかもしれない。
　少なくとも、あのときの彼女にとっては、泣くほどいやな出来事だったはずだ。

3

「ただいま」
「おかえり」
　初詣から帰ってきた俺を出迎えたのはミアだった。部屋着姿に上着を羽織り、下半身はコタツ

に埋もれさせている。その右手にはミカン、左手にはグロック１７。
「オーバーカーサーンー」
　その言葉に合わせるように五発、ＢＢ弾が俺を襲う。すぐさま身をかがめた。ミアの命中力の無さも手伝って、どうにか全て避けられた。
「いきなり何すんだよ！」
「いや、お母さんが代わりに鹿っといてって」
　なんてことだ。米倉家の変な伝統が母から妹へ受け継がれようとしている。ならば俺は餌付けなりなんなりして、銃口を背けなくてはならない。
「まあいいや。ほい、これ」
「ん、ありがと」
　俺が差し出したお守りを、ミアは疑問に思うことなく受け取った。普通ならそれが何か聞くだろうに。
「往復二時間、いい運動になったじゃん」
「てめー知ってたのかよ」
「お母さんから聞いた」
　兄の苦労を分かってて休んでいたなんて、こいつはいったい何様だろうか。俺はコタツのミアとは反対側に入る。
「そうだ、これもだ」
　ポケットから取り出しミアの方へと転がした。それはテーブルの上を何度か跳ねて、彼女の手の中へ収まっていく。
「なにこれ？」
「石笛。書いて字のごとく、石の笛だ」
　初見で分かるやつはいないよな。あんな小石、道端に落ちてたってだれも警察には届けない。蹴られるのがオチだ。
「その穴にむかって息を吹くと音がでんだよ」
「いや、そういうことじゃなくて」
「ピンクのはなかったんだよ。その色で我慢しろ」
「だからこれがなんのプレゼントかって話で……」
「笛のお詫びだ」
　俺の言葉にミアは不思議そうに首をかしげる。しかめた眉には「こいつなに言ってんだ」と書かれている。どうやらリコーダーの一件はもう覚えてないらしい。覚えてないならそれでいい。いやなことは忘れるにかぎる。
　俺はミカンに手を伸ばし、

　ピューピューピューピュー。

　思わず俺は耳を塞いでしまった。睨んだ先では、ミアがさっそく石笛を吹いている。それに

イラッとしたが、まあ朝の一件もある、お互い様というやつだ。
「……ことよろ」
　こっちも文句は、言わないでやろう。
　ピュピュピュッピュッピュ。
　ピュピュピュピュー。
　ピュピューピュピュー。
　ピュピュピュピューピュ。
　バン（う）バン（る）バン（せ）バン（え）！
　新年早々、台所に置いてあったグロック１７が火を噴いた。

敗戦処理

今畑　鏡

掃除をして部屋を片付けようと思い立ったのは、あの日から一か月が過ぎてからだった。
一人暮らし用の一般的な大学生アパート。間取りは１Ｋで風呂とトイレは別々だ。
俺は元来掃除が苦手だったから滅多に掃除することがなかった。……そうだな、多分これも原因の一つかもしれない。
昔は一か月掃除しなくても済んだはずなのだが、五感的にも精神的にも耐えきれなくなった。
まず、とにかく臭い。とにかく腐った卵みたいな硫黄臭さが鼻についた。まあ、本当に卵は冷蔵庫の中で腐っているんだけど。
数日はシャワーを浴びるときに温泉気分に浸っていたが、四六時中温泉臭いと嫌気が差す。鼻が曲がる。
それにフライパンの表面に固まった油の臭いもキツイ。工場近くのドブ川の臭いに似ている。
こんな悪臭は俺の鼻だけじゃなくて服に移ったものだからさらにタチが悪い。友人からは「お前、体洗ってる？」と言われる始末だ。
まあ、一番キツイのは視覚的なものだ。あの人を想起させる物を見るたびに記憶がフラッシュバックする。文字通り一瞬だけ思い出の閃光が頭をよぎっては消えてゆく。頭に残った思い出が思った以上に多いものだから、無作為に断片的な記憶が再生される。そうなると、連鎖的にあの人の声やら撫でた髪の手触りやらあの人が使っていた洗剤の匂いまでも想起されてしまう。いやはや始末が悪い。
勉強の暗記科目よろしく、何度も何度も思い出すほど、その思い出は脳裏に焼き付けられる。短期記憶が長期記憶になり、永久機関的な記憶になる。なので、あの人の品々が出てきてもなるべく思い出すのは避けよう。思い出したとしてもそれらの思いでには触れないようにしよう。
早く片づけなくちゃ。
最初に部屋全体を見回して、どこから掃除すればいいかと算段を付けた。思ったより、あの人の私物が多い。

立つ鳥跡を濁さずと言うけれど、人はかなり跡を濁すんだよな……

仕方ないので、部屋の端から、つまり、玄関から片付けを始めた。
一番大きい四十五リットルのごみ袋を持ってごみを探す。
玄関には俺の靴に紛れてあの人のサンダルがあった。
「使うやつは持って帰ってくれと言ったんだけどな」
女物のサンダルなんて男が使える代物じゃない。ヒールが高くてつま先立ちするサンダルなんぞ履けやしない。サンダルのストラップをつまんでごみ袋に放り込んだ。
玄関を片付けが終わると、次はトイレに手をかけた。
そこにはあの人の生理用品とごみ箱があった。
こいつは取っておけねえな。それらを置きっぱなしにしていたら部屋に遊びに来た友人に変な誤解を与えかねない。
あれ、あいつらはまだ俺に彼女が居るとおもってんだっけ？　はあ、メンドくせえな。

俺は生理用品とごみ箱をごみ袋に入れた。ついでにと、ブラシとシートでトイレの掃除もした。あの人が来なくなったから今度からは立って小便ができる。あの人、かなり綺麗好きだったもんな。
はて、なんで部屋を汚しっぱなしの俺なぞ好きになったんだろう？　ははっ。部屋を汚してばっかりだからこの有様になったのか。

次に、洗面台から風呂場の掃除に取り掛かった。
一か月しかたっていないのに水垢がひどくこびりついていた。
あの人が使っていたメイク落としや化粧水から歯ブラシ、シャンプー、ボディソープ、洗顔フォームをごみ箱に詰め込んだ。俺が使えそうなモノもあったが、シャンプーを使えばあの人の匂いがするから却下だ。
洗面台と風呂場、ついでにシンクもスポンジと洗剤で掃除した。こびりついた水垢やら赤くかびていたところを洗い流す。まっさらになると幾分か気分がよくなった。
冷蔵庫の取っ手に手をかけると、開けてもいないのに腐った野菜の悪臭がした。
開けると、黒くなったニンジンと芽がのびのび育って紫がかったジャガイモがお出迎えした。そして、一番悪臭の原因だった卵は俺が押し込んだ二リットルのペットボトルに押しつぶされてぐしゃぐしゃになっていた。
はあ、こいつは面倒だ。
キッチンペーパーでふき取りとりながら腐ったモノどもをごみ箱にぶち込む。キャベツが水分を含んで取り出すと糸を引いていていた。酸っぱい臭いが立ち込める。発酵でもしてキムチにでもなったのかな？　発酵するくらいなら変な菌でも沸いているかもしれない。冷蔵庫のいたるところにアルコールを吹き付けた。
あの人は自炊が好きで色んな料理を振舞ってくれた。買い物代は申し訳ないと俺が出していた。あの人が作る料理は美味しかった。店だと決して味わえない家庭の味だった。
あの人が料理を作るたびに色んな調味料が我が部屋に増えていった。
豆板醤、ごま油、ローリエ、カレー粉、オイスターソース、すりおろしショウガのチューブ……
俺は料理なんてしないからこいつらも要らないな。というか、冷蔵庫を開けるたびに調味料を見てはあの人を思い出すのは辛い。
調味料全部をごみ袋に詰めた。この時点で一袋がいっぱいになったので、二枚目のごみ袋を広げた。
それから、俺は一番の強敵だと思われるリビングの片付けに取りかかった。片付けを始めた時間が遅かったのもあるけど、想定以上に片付けに時間がかかっていた。夕方になって部屋が薄暗いので蛍光灯をつけた。日を跨ぐ前には片づけを終わらせたいところだ。
リビングは一番厄介だ。それはもちろんあの人の私物が多いというのもあるが、同じく二人で共用していた物も多いのだ。
丸くて大きな手鏡は俺も使っていた。けど、あの人が一番使っていたから捨てよう。あれ。鏡って燃えるんだっけ？　いいや。これくらいなら全部燃えてしまうだろう。
あの人が持ってきたオススメの自己啓発本もごみ袋に入れる。そういえば、俺が貸したマンガはどうなったんだろう。出来れば捨てて欲しい。あのマンガをこれからあの人が別の人に勧めるのはなんか許せない。
枕カバーも捨てた。いっそのこと布団を丸ごと捨てたかったが、数万円単位の物を捨てるのは

気が引けたし、粗大ごみの分で金がかかるので止めた。
　不意にある物を目が捉えた。　……勇気を出して買ったコイツは後々使えるかもしれない。でも、しばらく活躍の機会は無いか。いや、有った方がいいんだろうけどさ。少し悩んだが、結局ごみ袋に捨てた。
　あの人が俺の部屋に置いていった服も処分した。雑巾にできそうな服は雑巾にして棚とか机を拭いた。
　ここまで作業を続けるとあの人の私物が思ったよりも多くて俺の私物が意外と少ないことに気づいた。俺じゃなくてあの人がここに住んでいたみたいだ。それだけここに依存的に来ては居座っていたということか。
　長時間作業を続けているせいで、集中力が切れてきた。あの人の品を探すのが億劫になる。でも、片付けなきゃいけない。ここで止めたら踏ん切りがつかなくなる。執着心が残ってしまう。
　やけになった俺は捨てたくないと思う物以外は目についた全てをごみ袋に詰め込んだ。
　なんか、この様子はテレビで見た遺品整理に似ていた。孤独死した老人の家へ行って、生前の形見の品を探しては拾い上げるシーンが思い浮かぶ。
　まあ、俺との大きな違いは捨てるか拾うかだな。忘れるために捨てている俺と思い出すために形見を拾う遺族。比べるのは酷く失礼だと思う。
　ふと、足になにか尖ったものが刺さった。講義のプリントで覆われたそれは、写真付きのぬいぐるみだった。
　見ると、写真にはぎこちない笑みを浮かべた俺と笑うあの人が写っていた。
　あの人は写真写りがとても良かった。顔の角度から手の添え方、口角の上げ方まで考えているらしい。聞くと、写真写りは女子の嗜みらしい。対して、場数を踏んでいない俺の写真写りは悪かった。まあ、写真に写る俺は今よりはいい顔をしているけど。たしかあの時はぬいぐるみが高くて買うか買わないかで揉めたんだよな。で、あの人に押し切られて結局二つ買うことになって……
　思い出が再生されそうになる。反射的にぬいぐるみをごみ袋に投げ入れた。
　しかし、一旦ぬいぐるみを取り出して、それから写真を引きはがした。ぬいぐるみは再びごみ箱へ、写真は本棚の本と本の間に捻じ込んだ。これくらいは残しておきたかった。甘いなあ、俺は。
　リビングからあの人に関する品をあらかた取り除いて、ついでに掃除機をかけると部屋は引っ越してきた当初みたいに綺麗に片付いた。
　よかった。これで平穏な生活ができる。
　疲れで、ベッドに寝転んだ。天井を見ると、チカチカと一本の蛍光灯が点滅していた。今度取り換えなくちゃな。
「兆候があったら少しは身構えることは出来たのかな？　違うか。どっちにしろこうなっていたか」
　ふと、あの人の匂いが鼻についた。綺麗さっぱりになったはずなのに、あの人の匂いがする。
　立ち上がって、その元凶を探す。が、見当たらない。窓を開けて空気の入れかえを試みた。けど、変わらずあの人の臭いがする。
　おそらく、この部屋にあの人の匂いが染みついているんだろう。壁紙にも、本棚にもタンスにも、もちろん布団にも俺じゃないあの人の匂いが染みついている。それが悪臭を取り除いたせいで姿を現したんだ。これを取り除くのは難しいな。

汚れがついた白い画用紙を元のまっさらな白に戻すことはできない。それならばいっその事、新しい画用紙を用意するか、もっとキツイ色で染め切った方が良い。
俺はコンビニまで走った。夕飯の弁当と煙草とライターを買ってきた。
俺は煙草を吸わない。だから部屋には灰皿がない。手の届くところにあった空き缶を灰皿の代わりにした。
どれくらい燃やせばいいかわからなかったから、一箱に入っていた二十本全部に火をつけようとした。が、なかなか燃えない。
煙草は口にくわえてストローみたいに吸いながらじゃないと火が付きにくいという友人のいつ使うか分からないアドバイスを思い出した。
煙草一本口にくわえて吸いながらライターを煙草の先端に近づけた。
おお、確かにつきやすい。
「おえっ。ごほごほ」
辛い煙が口の中に入ってそれが頭にツーンと突き刺さってむせた。思いっきり咳き込む。はあ、やっぱり煙草は嫌いだ。こいつに五百円玉は差し出せない
他の煙草は多少つきにくくても、ライターをずっと向けて火をつけた。
ゆらゆらと揺れる煙はまるで線香みたいだった。何かを弔っているように思えた。
あの友人は、煙草臭いがキスは癖になるとも言っていた。もし俺が煙草を吸っていたならあの人にも飽きられなかったかもしれない。
煙草が全部燃えるまではあまり時間はかからなかった。
部屋の中は煙ったくて、タールのもやっとした臭いが鼻についた。これなら何とかなるかもしれない。
そういえば、部屋でタバコ吸ったら引っ越すときに壁紙の張替え代金を請求されるんだっけ？まあいいか。
やれることはやったつもりだ。ベッドにごろんと寝転んだ。今日は部屋にずっと居たのに片付けをして疲れた。これなら安眠できそうだ。そう思うと、睡魔がゆったりと顔を出した。
少しだけ寝よう。俺は目を閉じた。そして、数分経って、また目を開けた。

はあ、瞼の裏側までもピカピカのまっさらに掃除できたらいいのにな。

頭を振って舌打ちをした。せめてもの抗いで思いっきり息を吸うと、副流煙でむせた。なんどもも咳が出て、喉が痛くなって、目から涙が流れた。

あとがき

フィクションを書きました。私小説っぽいんですけど、その体で自分には絶対起こりえないことを書きたいと思って筆を走らせました。

六月は嬉しいことやら悲しいことまで色々なことがありました。誕生日を祝ってもらったり、訃報の知らせを聞いたり、騙されたり……。多分、いつも以上に五感をフルパワーで動かしていた一か月だと思います。
その反動でしょうか。短編の中身としてはかなり暗いものができてしまった気がします。まあ、私の好きなマンガはダークな系統が多いのでそれも起因しているかもしれません。
しかし、こういう話を書いているときの自分はかなり明るいです。なんというか、自分の中の毒を吐き出しているみたいで気分が良いのです。爽快なのです。
別でプロットと本編を書いたハッピーなモノもあったのですが、長いので止めました。それもあって締め切りも守れてません、ごめんなさい。
あと、また別でカクヨムに一本投稿しました。「添い寝」でググると私と似たペンネームをした奴が書いた小説が見つかります。カクヨムは作家の人気を駆使して殴り合う世紀末世界なので、ぜひ読んで感想をください！　(あそこって作家の人気で読まれるか読まれないか決まるのに、レビューを書くメンツが固定されているようで、全然読んでもらえないんですよね)
そういえば、本作って登場人物の名前が一切出ていないんですよ。書き終わってから気付きました。やっぱり、登場人物の名前とか必要ですかね？
あと、名前で思い出したんですけど、最近サントリーのウーロン茶が新しくなりました（ステマではない）さて、サントリーの社名の由来って何だと思います？
ああ、またまたついでの話なのですが、最近歳を重ねすぎたせいで、甘い酒より苦い酒が好きになりました。特にウーロンハイが美味しいです。あいつはウーロン茶と色がかなり似ているのでソフトドリンクと間違えますので、飲みすぎ、また、変な野郎からウーロン茶を差し出されたときは注意です。
まあ、私も筋トレが趣味なんで酒はほどほどにしますけど。
さて、今期の作品でオススメはあるか、と言われると、私は真っ先に「仮面ライダーアマゾンズ」を推します。ハートフルなので、少し非リア充には心苦しいシーンもあるかもですが、それは「月がきれい」も同じですね。……あのヒロイン、彼氏がいるのになかなか男を振らないんだよな、生殺しだよな、残酷だよな。
最後に。あとがきを書いたものの、次のページになってしまい、ええい、ままよ！　と一ページ書きました。ノシ

痴女　　Puney　Loran Seapon

痴女

Puney　Loran Seapon

「男の人には興味ありません。大好きなのは女の子。卒業までに、この高校に存在する女性全員のおっぱいを揉むつもりなので、皆さん、どうぞよろしくお願いします」
　入学式のある日。一年生のとある教室にて。
　その発言に、同じクラスの人は勿論、先生でさえも、耳を疑った。隣の席に座る女子生徒、神無月(かんなづき)神流(かんな)も例外ではない。
　問題発言をした、その少女の名は歌園(うたぞの)美羽(みう)。見た目は黒髪セミロングとパッチリとした目が印象的な、可愛い女の子だ。あまりの発言に、聞いていた人は当然のごとくドン引き。
（彼女とは、なるべく関わらなようにしよう）
　神流は、自身の控えめな胸を見下ろしながら、そう決意した。

　そう、していた。決意していたはずなのだが……。
「何故だ。何故こうなった……」
「神流ちゃん、どうしたんですか？」
「絶対に関わるまいと思っていた相手と、私はどうして一緒に下校しているんだろうって考えてたの」
　件の問題児、歌園美羽に自分の呟きを聞かれ、神流は沈んでいく夕日を眺めながらそう答えた。
「それ、毎日言ってませんかっ？」
「……なんで席が隣だったかなぁ。あの時ほど、私は自分の苗字を恨んだことはないわ。名簿番号って、なんで五十音順なわけ？」
　入学式の日から、およそ二ヶ月。
　美羽は、神流を含め、皆が想像していたより、もっと変態だった。既に学校の女子生徒の四割は、美羽に胸を揉まれている。
　そんな中、本人は全く望んでいなかったものの、神流は美羽の一番の友達だった。残念なことに、神流は美羽以外に、気軽に会話出来る相手がいない。神流は友達作りが下手だった。
　ちなみに、胸を揉まれた最初の犠牲者も彼女である。体育の授業の着替えの時に、一瞬の隙を突かれたのだ。美羽から「慎ましやかで可愛いですねっ！」と言われた時の屈辱を、神流は一生忘れることは無いだろう。
「そう言えば、前々から聞きたかったんだけど、あんた、なんでこの学校来たの？　うちは共学よ？　女子校行けば、もっと女の子がいたんじゃない？」
　二ヶ月も付き合えば、神流は美羽という人間のこともだんだんと分かってきていた。彼女はとにかく女が好き。揺り篭から墓場まで、取り敢えず性別が女なら何でもいいっぽい。
　それだけに、何故彼女が共学の高校を選んだのか、神流は理解できなかった。
「いやぁ、それはですね……」
　美羽は少し口ごもった後、恥ずかしそうに続ける。
「受けるには受けたんですけど、落ちました」

「……あんたって、勉強苦手？　意外だわ。てっきり、女の子に囲まれるためには勉強ぐらい頑張ると思ってたんだけど」
　女子校はいくつかあるが、神流の知る限り、然程レベルは高くない。普通に受験勉強していれば、ほぼ受かる。
「いや、勉強は頑張ったんですけど、入試の時、周りが女の子オンリーすぎて、全然集中出来ませんでした」
「……ああ、そうかい」
（こいつらしいと感心すべきか、呆れるべきか……）
　どう感じるべきなのか、神流は少しの間考える。やがて、溜息を吐くと、口を開いた。
「あんたってさ、黙ってれば、普通に美少女よね」
「いきなりどうしたんですかっ？　いや、嬉しいですけども！」
「喜んでいるところごめん。別に褒めてない」
　軽く頬を染めながらイヤンイヤンする美羽に、げんなりしながら言った神流の言葉は、美羽に届いているかどうかは怪しかった。
「でも、私なんかよりも、神流ちゃんの方が可愛いですよ？」
「はいはい、ありがとう」
　美羽から『可愛い』って言われることも、だんだんと慣れた。そのせいで、神流の返しも少し投げやりだ。まぁ、一日平均三回も言われていれば、こんな対応になるな、と言うのも酷ではあるのだが……。
　神流としては、せめてもう少し回数を減らしてもらいたいのだが、美羽は頑としてそれを聞き入れてはくれない。
　決してお世辞で言っているわけではないのは分かるので、神流もちょっと困っていた。
（まぁ、悪いやつではないんだけど……もう少しまともな奴だったら文句は無かったってのに……）
　当然と言えば当然なのだが、美羽のことを良く思わない人は多い。そして、一緒にいる神流も、周りからはあまり良く思われていない。
　そのことについては、神流はあまり気にしてはいなかった。もとより、仲の良い友達など、他にいないので、今のところ、周りにどう思われようが、その弊害はあまりないからだ。
　とは言え、このままでいいとも、神流は思っていなかった。
（しゃーない、卒業する前に、私がこいつを真人間にしてやろう）
　人知れずそう意気込んだ彼女ではあるが、それがかなり無茶でなことであることを、まだ知らなかった。

　そして、その決意をしてから二週間経った、ある日の放課後。
　いつものように二人一緒に玄関に向かっていた時のことだった。
「……そう言えば、出会って結構経ちますけど、まだ神流ちゃんに私の得意技を見せたことって無かったですよね」
　急に美羽からそんなことを言われた神流は、頭に『？』を浮かべる。美羽の視線の先には、女子生徒が一人、歩いてくる。結構グラマスな体型の子だ。
　なんとなく嫌な予感がした神流は、美羽を止めようとするも、時既に遅し。
　美羽の姿が、スッと消えた。
　どこへ行った、とキョロキョロと探すと、すぐに見つかる。美羽は、先程見ていた女子生徒の

、少し後ろに立っていた。どうやら、彼女と既にすれ違ったらしい。
　女子生徒の方も、いきなり美羽が消えたことに目を疑ったようで、神流のようにキョロキョロと美羽を探すことこそしなかったものの、目を擦ったり、頬をつねったりしていた。
　彼女とすれ違う最中、神流は、女子生徒の右胸に、ほんの僅かだが手形のような皺があることに気がつく。
「……Ｄ、いや、Ｅか」
　美羽が自分の右手の平を見ながらそう呟いたのと同時に、神流は美羽の頬を左右から、うにょーんと引っ張る。
「ひたひ、ひたひてすよぉ、かんにゃひゃん」
「ねぇ、何やったの？　今何やったの？　怒らないから言ってみなさい？　え？」
　そう言ってから、神流は美羽の頬を引っ張るのをやめる。美羽は自分の頬を指でさすりながら、「本当に怒りませんか？」と目で訴え、神流は「怒んないから早く言え」と目で促す。
「彼女のおっぱいを揉み――痛っ！」
　美羽の言葉を最後まで聞き終わらないうちに、頭に手刀を落とす神流。
「ちょぉ、怒んないって言ったじゃないですかぁっ！」
「怒ってはいない。呆れているだけ。で、今、何か凄い光景を見た気がするんだけど、何をしたの？」
「ふっふっふ。企業秘密――あ、嘘です嘘です言いますから」
　神流がスッと手刀を作ると、美羽はあっさり説明してくれた。
「えーっとですね、まあ何と言いますか、要するに縮地です」
「あー、縮地ってあれだっけ？　一瞬で凄い距離を移動する、みたいなやつ？　格闘漫画で読んだことがあったようなないような……」
「まぁ、その認識でオーケーです」
「で、すれ違いざまにおっぱいを揉んだ……と。あれ？　でもおかしくない？　彼女、胸を揉まれたような反応じゃなかったけど？」
「ふっ、甘いですね！　私クラスにもなると、相手に悟られずにおっぱいを揉むことなど造作もありませんよ！」
「凄いんだか凄くないんだか……てか、そんなことが出来るなら、なんで私の胸を触った時も、それを使わなかったわけ？」
「え？　だって、胸を触られた時の相手の反応を楽しむことも、一興じゃないですか――痛っ！」
　神流は再び、美羽の頭に手刀を落とした。
　うー、と言いながら手刀をくらったところをさする美羽だったが、ふと思い出したようにポケットからカウンターを取り出して、カチっとボタンを押す。
「ふむ、これで十三おっぱいですか」
「何だよ『十三おっぱい』って……いや、だいたい予想はつくんだけど……」
「揉んだおっぱいの数を数えています。一日十五おっぱい」
「あんた、一日に十五回もあんなことしてんのっ？」
「成長具合は、ちゃんとチェックしないと」
　その後、美羽が神流に拳骨を落とされたのは言うまでもない。

　神流の拳骨は流石に堪えたようで、美羽は回復までに数十秒要した。

「つまりあれかな？　今後あんたを遠くで見かけたら、胸の辺りを腕か何かでガードせにゃならんってこと？」
　言いながらげんなりとした表情を見せる神流を、美羽は鼻で笑う。
「無駄ですねぇ。私の『これ』は、ガードをすり抜けますから」
　そんな話をしていたら、また女子生徒がこちらに向かって歩いてきた。今度は二人並んで歩いている。
「うん？　あれって、若菜先輩じゃないですか？」
「え？　誰、それ？」
「いや、誰って……新聞部の発行している新聞に載ってたじゃないですか。遠藤若菜。うちの高校の柔道部のエースですよ？　確か、去年、一昨年の柔道のインターハイ個人戦で優勝したとか。何でも、柔道を極めるために、空手や剣道など、他の武術もやっているそうです」
「あー、あの新聞、真面目に読んでないんだよね……」
「ふむ……あの二人で丁度十五人ですし、いっちょ揉んどきますか」
　そして、神流が止める間もなく、美羽は再び縮地で距離を詰めた――のだが。
「……っ！」
　若菜の胸に向かって伸ばした美羽の腕は、若菜の手に掴まれていた。
「随分手癖の悪い女子生徒が入学してきたと聞いたが……なるほど、君のことか」
　若菜はそういうと、顎に手をやり、少しの間目を閉じる。
　やがて「ふむ」と言って頷くと、閉じていた目を開けた。
「実は、私のクラスメイトの中に、君に胸を揉まれた被害者が何人かいてね。彼女達に、君の退治を頼まれているんだ。無論、私もスポーツマン。いくら頼まれたからとはいえ、試合でもないのに相手を投げるつもりは毛頭ないのだが……なるほど。これは少々、お灸を据えてやらないといけないようだな」
　若菜はそう言うと、ようやく美羽の腕を掴んでいた手を離す。そして、美羽の耳に顔を近づけ、囁いた。
「格技場へ来たまえ。逃げようなどとは思わないように」
「……デートのお誘いを、断ったりなんかしませんよ」
　美羽の言葉に、若葉は眉を潜めたが、すぐに表情を戻し、格技場へと向かっていった。
「面倒なことになったね。ところで」
　神流は、若葉の背中にジッと見つめる美羽に声をかける。
「……あんたの『あれ』、ガードをすり抜けるんじゃなかったっけ？　普通に防がれたけど？」
「ふ、普通の人ならすり抜けますし……」
　美羽の声は少し震えていた。

　そして、数分後。
　約束通り格技場へと向かうと、若菜の他に、もう一人いた。先程、若菜と並んで歩いていた女子生徒だ。どうやら審判役らしい。他の部員は、今日は別の場所で練習しているらしく、ここには美羽達を含めて四人しかいない。彼女は、神流と目が合うと、互いに軽く会釈をする。
　彼女には、神流も見覚えがあった。同じクラスの木崎結衣だった。席が近いので、比較的美羽に日常的にセクハラされている生徒の一人だ。だが、神流とは特に仲が良いという訳ではないので、結衣との間に、会話はなく、気まずい雰囲気が流れていた。
　その美羽と言えば、若菜が見ている前では、いつものように結衣にセクハラすることも難しい

ようだ。
　親切にも柔道着を貸してくれた若菜に礼を言ってから、美羽は着替えて、若菜と対峙していた。
「お互いに、礼。はじめっ！」
　最初のうちは、美羽も若菜も、牽制するように、近づいたり離れたりを繰り返していた。
　先に動いたのは美羽。先程神流や若菜の前で使った縮地を使い、一気に距離を詰める。
　だが若菜はほとんど動じた様子も見せず、近づいた美羽の足と足の間に、自分の足を入れ、内股を仕掛けようとする。
　だが、それは防がれた。袖や襟を、掴ませてはくれなかったのだ。
　僅かな攻防の後、二人は再び離れた。
（ほう……やるな）
　若菜はこの時点で、美羽の実力を把握する。自分の想像以上に、美羽はできた。
　不可解なのは、美羽の表情。女の子がしちゃいけない、凄い顔になっていた。
（この女……一体何を考えている？）
　若菜には、彼女の表情は、不気味さしか感じなかった。

「へー、歌園さん、凄いじゃん」
　審判役の木崎が、この時初めて神流に話しかけた。
「若菜先輩、強いのに、普通に勝負になってる。彼女って何者なの？」
「……ただの変態」
　木崎の質問への答えは、神流にはこれしか思いつかなかったものの、これだけで木崎には十分伝わった。
「あー……あれでおっぱいおっぱい言っていなかったら、彼女は今とは随分違う扱いをされていたと思うんだけど……」
「私もそう思う」
　神流は木崎の言葉を肯定すると、少し迷った後、続けた。
「でもね、一応言っておくけど……あいつが『おっぱいおっぱい』って言っているのは、ある意味フェイク」
「……は？」
　木崎は神流の言葉に『？』を浮かべる。これは神流が二ヶ月間、美羽と付き合ってみて気がついたことだった。
「ぶっちゃけると、女の子に素肌に触れられればなんでもいいっぽい。ほら、見なよ。美羽のやつ、あんなにだらしない顔してるでしょ？　柔道着の袖から覗く、先輩の腕に軽く触れてるだけで興奮してんのよ、あれ」
「うわぁ……」
「『うわぁ』とか言うなよ……いや、言うか。ごめん。今のは私の失言だった。忘れて」
「友達やめようって思ったこと、ない？」
「数え切れないほどあるけど、もう諦めた」
「あー、『友達だ』ってのも認めちゃうんだ……」
「そう思われるのも、もう諦めた。前は全力で否定してたんだけどね。情でも移ったのかな？」
　そう言ってから、神流は溜息を吐いた。美羽と若菜の試合は、もうすぐ終わりそうだ。

君の悪さを覚えながらも、若菜は美羽に攻撃を仕掛けるものの、その全てをかろうじていなされていた。それが少し面白くなくて、若菜は口を尖らせながら呟く。
「貴様、これほどまでの腕を持ちながら、何故体育会系の部活に入らない？　いくつの武術を嗜んだかは知らんが、恐らくはどれも高いレベルの技まで習得していると見た。これほどの身体能力をアピールすれば、引く手数多だろうに……」
「ふっ、あなたと同じですよ」
「……なに？」
「あなたは以前、新聞部のインタビューでこう聞かれたそうですね。『柔道を極めるのに、何故剣道や空手までやっているのか』って」
「……ああ。それに対して、私はこう答えたな。『剣道や空手で得た技術を、柔道に昇華させるためだ』と」
「私にとってはね、あなたで言うところの『柔道』が、『エロ（女の子への愛）』に変わったってだけです。真に求めるのは『エロ（女の子への愛）』であって『武道』ではありませんから」
「……なるほどな。納得は出来んが、腹立たしいことに理解は出来た」
　そう呟くと、若菜はすぅっと息を吸い込み、ほんの僅かに姿勢を低くする。
　一瞬の間。そして――
　若菜は、地面を蹴って美羽との距離を詰め、同時に腕を伸ばす。美羽も反撃するためか、腕を伸ばしてきた。
（もらった！）
　その瞬間、若菜は勝利を確信した。今伸ばしている腕はフェイント。これをわざと掴ませるか払わせて、その隙にもう一方の手で美羽の襟を掴み、そこから投げ技に持っていく。その予定だった――のだが。
　美羽は若菜の腕を払いのけることはせず、そのまま自分を掴ませる。怪訝に思ったものの、それならそれで、と若菜はもう一方の手で美羽の襟を掴んだ、その時だ。
　美羽の、掴まれていない方の腕が動く。何をされたか理解した時にはもう、若菜は小さく悲鳴をあげていた。
「こ……こんのぉ……！」
　羞恥に頬を染めながらも、若菜はそのまま美羽を担ぎ上げ、
　見事なまでに、綺麗な背負い投げを決めた。「一本」という木崎の掛け声が、格技場に響き渡り、試合が終わった。

　それから数分後。着替えた美羽に、若菜は、話しかけてくる。
「全く、何てやつだ……勝ちより自分の欲望を優先するとは。ある意味、大したやつだよ、君は」
「目的が違いますからねっ！　別にお灸なんていくら据えられても構わないんですよ！　私の目的は、最初から先輩のおっぱいだけです！」
「そ、そうか……」
　これには若菜も苦笑いしかできない。そんな彼女に、神流は声をかける。ずっと聞きたかったことがあったのだ。
「先輩。どうして美羽と試合なんてしたんですか？　あいつにお灸を据える方法なんて、いくらでもあったでしょう？」
　神流の質問に、若菜は僅かだが迷うような素振りを見せたものの、

「……最初に彼女の腕を掴んだ時、相当な手練れだと感じた。何かしら武術を学んでいる者の腕だったんだ。正直、興味が湧いた」
「ああ、なるほど……」
「後は、ちょっと打算的な考えもあったがな。私に派手に負ければ、『こんな凄い人がうちにいるなんて……先輩、ステキ！　私も先輩みたいにつよくなりたい！』って言ってうちの柔道部に入ってくれるかもしれん、と思ったのだ……って、なんだその目は」
「いやぁ、先輩。その考えはちょっと……そんな単純な奴、いないでしょ。子供じゃあるまい」
「う、うるさい……！」
　神流の辛辣な言葉に、若菜は視線を逸らし、少し赤くなって否定する。
「ま、まぁ。確かに少し考えは子供じみていたかもしれん。やはりここは……いや、しかし……」
　若菜は何やら一人で呟いた後、何を納得したのか、意を決した様子で美羽に声をかける。
「なあ、美羽。柔道部に入る気はないか？　実力だけなら、是非うちの部に入ってもらいたいレベルなんだが」
「いえ、せっかくのお誘いですけど、ごめんなさい。私、放課後は女の子を観察するのでちょっと忙しいんです」
　美羽の言葉に神流は呆れ、若菜は逡巡した後、苦悶の表情を浮かべて口を開く。
「……うちにくれば、毎日女の子に触り放題だぞ？」
「……」
「おい、ちょっと揺れてんじゃねーよ。てか先輩も、自分の部の部員を美羽の毒牙にかけようとせんで下さい」
「ちょぉっ？　神流ちゃん、毒牙にかけるってひどくないですかっ？」
「普段の行いを省みてから文句を言えっての。で、先輩？　そんなに美羽が欲しいんすか？　部活がピンクな空間に染まるかもしれないのに？」
「仕方あるまい。私はもう高校三年だ。うちは一応『強豪校』で通っているが、今の後輩どもの実力では、その看板を背負っていけるか、正直不安でな。美羽が入ってくれると、少なくとも戦力的には安心して、私も引退出来るのだ」
「代わりに、別のところで苦労することになりそうですけどね。多分、安心して引退、とはなりませんよ？」
　それもそうだな、と言わんばかりの顔をする若菜。
　そんな中、美羽が口を開いた。
「……入部は出来ませんが、偶に顔を出すくらいなら、全然オッケーですよ？」
「練習試合の相手として、ということかな？　無論、歓迎だ。だが、その時はちゃんと勝ちにきてくれよ？」
「……」
「いや、あんた。ここは嘘でも頷いておきなさいよ……」
「誘っておいて難だが、変態行為はなるべく自重して欲しいのだが……」
　えー、というような顔をした美羽に、二人は揃ってそう言い、頭痛を抑えるかのごとく頭を抱えるのだった。

【あとがき】

お久しぶりです。Puney　Loran Seaponです。締め切りを十四時間ほど過ぎてしまいました。こんなに遅れたのは、文芸部に入って初めて部誌に投稿した時以来でしょうか？　編集長、本当にすいませんでした。

今回は、ちょっと書き方を変えました。もしかすると、変な部分があるかも。

短いあとがきになりましたが、また会える日を楽しみにしています。

では、また！

ナショナリズム

松本惇暉

あなたはもう身構えている

　焼跡も知らない
　のに
　政治の季節も消えてしまった
　のに

からだの向きを変えようとする

　怒りの拍手！
　喜びの拷問！
　捨てられなかったのだ

もののあはれがやってくる
どうしておのれはよくねむれないのだろうか

　チチも
　ハハも
　クニも
　トモも

啜り飲みこんで
屁をこく。

　ユリイカ？
　アウフヘーベン？
　あなたはにっぽんじんだった？

そういえばおのれはからゆきさんだった

　とうめいな旗を植えた
　コンクリートの裂け目

　やわらかい刺青
　のうえ
　いろあせた虹をくだいて

振り返る